

二 満州国をめぐる列国との関係

57 昭和8年1月10日

在満州国武藤(信義)大使より
内田外務大臣宛(電報)

ドリルを代表とする仏国財団と満鉄との共同出
資による満州国への投資会社設立案について

新 京 1月10日後発

本 省 1月10日後着

第二二號(極秘)

今般軍部ノ斡旋ニ依リ佛國借款團代表者「ドリル」ト滿鐵
副總裁ト會談ノ結果双方均分ノ釀出ニ依リ資本金二百萬法
ノ滿洲國會社ヲ作り事務所ヲ新京及巴里ニ置キ滿洲ニ於ケ
ル公共事業ニ對スル投資誘致ノ機關ヲラシムルコトニ意見
一致シタル趣ニテ當地軍部ニ於テハ聯盟總會開催前迄ニ右
設立ヲ完成セシメ度キ希望ヲ以テ内地關係筋ヘ斡旋方陸軍
省ヘ電報シタル由ナリ

本會社ハ投資誘致ノ機關ニ過キサルモ佛國資本案ヲシテ今
後當方面ニ利害關係ヲ有セシムヘキ一階梯トシテ妙案ト思

考セラル

陸軍省ヨリ相談アリタルトキハ協力アリタク尙軍側ヨリ本
件ハ當分極秘トセラレタキ旨依頼アリタリ
佛ヘ轉電セリ

58 昭和8年1月11日

在満州国武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

英米煙草トラストの奉天付属地内工場用地借
入れ要望に対する満鉄側回答振りについて

新 京 1月11日後発

本 省 1月12日前着

第二七號

今般英米煙草「トラスト」上海代表者ヨリ滿鐵ニ對シ奉天
附屬地ニ於テ他ノ工業者ト同一ノ條件及支那ヨリノ輸出税
滿洲國ヘノ輸入税及滿洲國內税ノ免除ノ下ニ紙巻煙草ヲ製
造シ度ニ付所要地約五百坪ノ借入方申込有リ右ニ對スル回

政府の意向および同財団組織の確実性につき
調査方訓令

本 省 1月12日後6時30分発

第一一號(至急、極秘)

在滿大使發本大臣宛電報第二二號ニ關シ

答振リニ付滿鐵ヨリ當館ニ相談有リタル處奉天附屬地ハ事
實上既ニ狹隘ヲ告ケ居リ工業用地トシテ貸出シノ餘裕無キ
趣ニ付軍側トモ協議ノ上此ノ種外國會社ノ進出ニハ異議有
ル次第ニ非ス事實上下ノ狀況ニ付若シ強ヒテ奉天ヲ欲スル
ナラハ附屬地外ノ借地方法直接滿洲國ニ話合フ事然ル可キ旨
ヲ以テ滿鐵ヨリ回答セシムル事トシタルニ付右ニ御承知置
キヲ請フ

尙此ノ種外國會社ノ進出ヲ觀ル事ハ主義上歡迎ス可キ處ニ
テ特ニ此ノ際對外宣傳上有利ニ利用シ得ト思考シタルモ實
際上借地ノ餘裕無キ一方邦人間ニモ煙草會社設立ノ議モ有
リ又滿洲國側ニ於テモ行々專賣トスルノ議モ起ル可ク旁日
滿兩國人經濟上ノ利益擁護ノ見地ヲモ考慮シ右ノ通回答セ
シムル事ニ取計ヒタル次第ニ付御含置キアリ度シ

支ヘ轉電セリ

支ヨリ上海ヘ轉報アリ度シ

59 昭和8年1月12日

内田外務大臣より
在仏国沢田(廉三)臨時代理大使宛(電報)

ドリル側財団の満州国への投資に対する仏国

尙本件機密保持方ニ付テハ關係筋ニ對シ充分手配済ナリ爲念
壽府長岡大使ヘ轉電アリ度
滿ニ轉電セリ

60 昭和8年1月18日 在滿州国武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

英米煙草トラストの奉天付屬地内事業經營計
可に際しては東亞煙草と合意協定成立を条件
とすべき旨意見具申

新 京 1月18日後発
本 省 1月18日後着

第四二號(極秘)

往電第二七號ニ關シ

滿鐵側ニ於テハ英米「トラス」代表ニ對シ一應右電報ノ趣旨ヲ回答シタル趣ナルカ其ノ後判明セル處ニ依レハ「トラス」側ハ一日本人ヲ通シ其ノ名義ヲ以テ既ニ奉天附屬地内ノ土地ヲ手ニ入レ居ル由ニ付目下ノ焦點ハ同「トラス」ニ同地ニ於ケル事業經營ヲ許スヘキヤ否ヤニアリ

關東廳側ニ於テハ之ヲ許可セハ東亞煙草ニ多大ノ脅威ヲ來スニ付之ヲ欲セス又事實非常ノ打撃ヲ受クヘシ他面「トラス」側カ殊更ニ附屬地内ヲ所望スルハ該地域内カ滿洲國內ト異ナリ課税低キノミナラス同地域内ヨリ滿洲國內ヘハ密輸入ニテ輸入税ヲ支拂ハス殆ト自由ニ(輸入)入シ居ル現狀

有力実業家とエドワーズとの意見交換について

ロンドン 1月21日後発
本 省 1月22日後着

第二二號

「エドワーズ」ハ豫テヨリ當地實業界方面ト密接ノ聯絡ヲ保チ來リシカ特ニ「マンチエスター」地方有力者ト意見交換ノ必要ヲ認メ Sir William Clare Lees(英國商業會議所聯合會及「マンチエスター」商業會議所會頭商務省諮問委員會委員等ニシテ「マンチエスター」棉業家トハ極メテ密接ノ關係アル有力者)ノ斡旋ニ依リ先般「マンチエスター」ニ赴キ商業會議所員棉業關係者等同地主タル實業家「ガーデアン」幹部等ト數回ニ亘リ親シク會合意見ノ交換ヲナシ二三日滞在ノ上歸倫シタルカ右會合ノ模様ニ付本使ニ語レル處大要左ノ如シ

自分(エドワーズ)ハ世上往々日本カ自國ノ經濟發展ニノミ腐心スルノ餘リ外國側ノ利益均霑ヲ排除シツツアリトノ非難アルヲ聞クモ右ハ全然誤解ニシテ日本ノ眞意ハ多年兵亂ト紊政トニ依リ不秩序ヲ極メツツアル支那ニ對比シ滿蒙ノ一角ニ平和ト秩序ヲ與ヘ内外人安住發展ノ地ヲ出現セシ

ナルヲ以テ此ノ點ヲ狙ヒ居ルモノト考ヘラル

「トラス」側代表者ハ前記滿鐵側ノ回答ニ満足セス近ク滿洲國側及關東廳側ニ對シ更ニ運動ヲナス由ナルカ今般當地軍側滿洲國側關東廳側及當館ノ間ニ協議ノ結果滿洲國側ヨリハ附屬地外「トラス」側ノ事業經營ニハ異議無キモ附屬地内ニ付テハ關東廳ニ交渉セラレ度ク尙附屬地内製造煙草ノ滿洲國進入ニ對シテハ今後嚴重課税ノ途ヲ講スル所存ナル旨又關東廳側ヨリハ既ニ此ノ事業ハ東亞煙草ニ依リ經營セラレ居リ之ニ脅威ヲ與フルカ如キ企業ニ對シテハ許可ヲ與ヘ難シ但シ「トラス」側カ競争ヲ避クル爲東亞ト一種ノ合意的協定ヲナス曉ハ考慮スヘシトノ趣旨ヲ夫々宜シク回答スルコトニ一應申合セヲナシ置キタリ右ノ回答振リニテ差支ヘナキヤ篤ト御詮議ノ上何分ノ儀至急御回電ヲ請フ本電軍ト打合セ濟

支、北平へ轉電セリ

61 昭和8年1月21日 在英国松平大使より
内田外務大臣宛(電報)

滿州國門戶開放問題に關するマンチエスター地方

メントスルニアリ滿洲ニ於テ地理的經濟的ニ特ニ有利ノ地位ニアル日本ノ或ル特殊品ニ對シ外國品カ對抗シ得サルハ自然ノ道理ニシテ右ハ決シテ日本側カ故意ニ外國品ヲ排除スルニ依ルニアラサルコト明カナリ唯英國品中ニハ日本品ト並行シテ將來對滿進出ノ餘地充分ナル特殊品モ多々アルコトナレハ此ノ點ニ着眼スルコトノ緊要ナル所以ヲ篤ト説明シタル處充分諒解セルモノノ如ク見受ケラレタリ一、二棉業者側ヨリ日本政府ハ近ク滿洲國ト通商條約ヲ締結シ特惠關稅制度ヲ設定セシメントスル意圖ナル趣ナルカ右實現ノ曉ニハ英國品ノ蒙ムル打撃大ナルヘシトノ質問アリタルニ對シ自分ハ本件ニ付テハ別ニ聞及ヒナキモ滿洲ノ如ク當然日本品カ有利ノ地域ニ對シ更ニ排他的特惠ヲ要求スルカ如キ必要モナカルヘシト思考スル旨答ヘ置キタリ

綿業者中ニハ英本國及其ノ屬領其他世界各國ニ於ケル輓近日本綿製品等ノ急激ナル進出ニ顧ミ將來日英兩國品ノ圓滿ナル對外發展ノ爲市場ノ地域的協定等適當ノ方法ヲ講シ無用ノ競争ヲ避クル事ノ必要ヲ唱フルモノアリシヲ以テ其點ハ至極尤モノ事ト思考スルヲ以テ日本側ニ然ルヘク傳達スヘシト述ヘ置キタリ

「ガーデアン」ノ反日的態度ニ付同地方有力者間ニ於テモ之レヲ好マサルモノ極メテ多キ様子ナルカ同紙幹部ハ日本カ今(日)ノ如キ對滿政策ヲ持續スル限リ早晚財政的ニ破綻ヲ來スヘキヲ確信シ從テ日本ニ對シ特ニ敵意ヲ有スルニハアラサルモノソノ反省ヲ促スト共ニ若シ斯克ノ如キ破綻カ他日實現ノ曉ニハ豫テノ警告ノ正シカリシ事ヲ高潮シ以テ一般ノ外國人ニ資セントスルノ考ヲ以テ今日ノ如キ態度ヲ執リツツアル旨ヲ語り居リタリ

要スルニ「マンチエスター」地方有力實業家ノ對日感情ハ大体ニ於テ友好的ニシテ日本ノ政策ヲ批難非議セントスル模様ナキ様觀取セラレ現ニ商業會議所員中ニハ若シ此ノ際日英同盟再締結ノ提議アラハ自分等ハ進ンテ其實現ノ爲ニ充分ノ努力ヲ致スヘシト申シ居リタルモノモアリシ程ナリ在米大使、聯盟全權ヘ轉電セリ

62 昭和8年1月24日

在中国有吉公使より
内田外務大臣宛(電報)

邦人当業者の利益保護優先は対外的に悪影響
あるため英米煙草トラストの付屬地内事業經

若シ一旦斯ノ如キ(一語脱)セハ英、米其ノ他ニ對シ鮮カラサル惡印象ヲ與ヘ我國及滿洲國ハ多大ノ不信用ヲ買フ事トナルヲ俱ル諸般ノ情勢ヨリ見テ此ノ際日滿兩國人ニ對シ排他的ニ特別ノ利益ヲ與フルカ如キ措置ノ外部ニ現ルコトハ嚴ニ慎ムヘキ所ナルヘク右ハ英米煙草ノ如キ有力會社ノ場合ニ於テ特ニ然リト信ス(英、米煙草ノ幹部カ支那各方面ニ大ナル勢力ヲ有スルノミナラス各自ノ本國ニ於テモ相當ノ勢力ヲ有シ特ニ米國上院方面ニテ煙草石油ニ對シ深キ利害關係ヲ有スルモノアルハ御承知ノ通ナリ)以上ノ次第ニテ假ニ英、米煙草ノ進出ヲ阻止スルノ實際上ノ必要若ハ其ノ口實ニ相當根據アリトスルモ此ノ際ハ枉ケテ之カ經營ヲ許スコト然ルヘシト存ス右ハ既ニ御考量中ノコトト存セラ

63 昭和8年1月30日

在米國出淵大使より
内田外務大臣宛(電報)

旧東北政權の外国商社売却金整理問題および満州国の門戸開放状況などに関する米國紙
論評について

營を許可すべき旨意見具申

上海 1月24日後発
本省 1月24日後着

第五〇號(極秘)

武藤大使發閣下宛電報第四二號ニ關シ

滿洲國ニ於ケル門戸開放機會均等主義ニ付テハ滿洲國及我國ニ於テ再三聲明スル所有リ外國側モ右主義ノ實行ヲ特ニ重要視シ居リ此ノ趣旨ハ滿洲國ニ對スル列國ノ態度ヲ決スル主ナル楔機タル可キコト申迄モ無ク(例ヘハ客年十一月十五日附往信機密第三七二號及最近ノ在英大使發閣下宛電報第二二號等御參照)右ハ附屬地ニ於テモ同様ナリト存セラル然ルニ冒頭電報ニ依レハ英米煙草ノ附屬地内ニ於ケル事業經營ヲ許可セサル理由ニ乏シキ様感セラレ又假ニ東亞側ニ多少打撃有リトスルモ右ハ英米側ノ營業ヲ許可シタル後ニ於テ協定ヲ遂ケシムルコト然ル可ク差當リ東亞側ノ特殊利益ハ本件許可ニ伴フ大局上ノ利益ヲ思ヘハ誠ニ已ムヲ得サルコトト存セラル東亞トノ競業ニハ許可ヲ與ヘ難シトノ理由ニテ拒否セントスルカ如キハ企業ノ性質上到底外國側ヲ納得セシメ得サル可ク

ワシントン 1月30日前発
本省 1月30日後着

第六八號

廿八日紐育「ヘラルド、トリビューン」ニ掲載セラレタル「ヴィクター、キーン」新京通信(十二月十九日附)中注意スヘキ點左ノ通り

關稅ニ關スル限リ滿洲國ハ今日迄外國人ニ對スル通商上ノ機會均等主義ニ反スル立法ヲ施行シ居ラスト雖モ張學良政府倒壞ノ結果主ナル外國商社ハ賣掛代金ノ取立不能トナリ加フルニ日本商人ニ壓迫セラレ或ハ閉鎖或ハ事業縮少ヲ爲スノ已ムヲ得サルニ至レルハ事實ナリ米國電氣機械輸入商「アンダーソン、アンド、メーヤー」ノ如キ顯著ナル例ニシテ同商會ノ在安東支那電氣工場閉鎖ノ結果蒙リタル損害十萬「ゴールド、ダラー」ハ日本側トノ交渉ニ依リ多分補償セラルヘキモ將來ノ取引ハ望ナカルヘシ、二、三外國商人ヨリ滿洲國政府ニ日本人顧問又ハ官吏多キ爲同政府ノ註文ハ日本商人ニ振向ケラレ外國商人ハ除ケ者トナリ居レリトノ苦情ヲ聞キタルモ他ノ者ハ同政府カ嚴重ニ入札ノ方法ヲ執リ居ル證據ヲ示シ記者自身モ米國商人カ日本商人ト競

争シ註文ヲ取りタル例ヲ承知セリ各國商人ノ公平ナル證言ニ依レハ滿洲國稅關ハ極メテ公平ニテ餘リニ嚴格ニ過クトテ苦情ヲ云フ日本商人尠カラサル有様ナリ且下日滿當局間ニ通商條約案起草中ナルカ果シテ滿洲國カ門戸開放主義ヲ持續スルヤ否ヤハ同條約ノ規定ニ依リ明カト成ルヘシトテ外國商人ハ多大ノ注意ヲ拂ヒ居レリ

64 昭和8年2月1日 在滿州國武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

旧東北政權の外国商社売掛代金整理問題への
満州国対応振りに関する説明要領について

新 京 2月1日後発
本 省 2月1日後着

第九二號
本使發英米宛電報
合第三八號

近來英米諸新聞ニ掲載セラルル滿洲國ノ經濟事情ニ關スル當方面ヨリノ通信中ニハ外國商社ニ於テ舊東北政權ニ對ス

シ引續キ獨米ノ債權審査ニ移ル筈ニシテ滿洲國トシテハ充分ノ誠意ヲ以テ本件處理ニ當リ居ルノミナラス日本ヲ含ム各國債權者間ニ何等ノ差別ヲ設ケス全然平等ノ取扱ヲ爲シ居ル點ハ外國商社側ニ於テモ充分了解シ舉ツテ滿洲國側ノ方針ヲ德トシ居ル實情ナリ只本件公債ノ融通性及市場價格ニ付テハ當初外國商人側ニ於テ多少ノ危惧ヲ有シタル如キモ滿洲國側ニ於テ中央銀行ノ割引引受ヲ聲明シタル結果右危惧モ大半解消シ前記ノ如ク相次テ受諾申出ヲ爲スニ至レルモノナリ就テハ本問題ニ關シ冒頭所述ノ如キ通信又ハ記事現ハルル場合ニハ然ルヘキ方法ニ依リ適宜之ヲ是正スルト共ニ本件整理力滿洲國ノ健全ナル財政狀態ヲ反映スルモノニ外ナラサルコトヲ強調セラルル様致度シ
英ヨリ佛、獨ヘ轉電アリ度シ
大臣ヘ轉電セリ

65 昭和8年2月4日 在仏國沢田臨時代理大使より
内田外務大臣宛(電報)

ドリル側財団に対しては資本誘致を含まない
形で建築事業発注方意見具申

ル賣掛代金ノ取立不能ノ爲困惑シ居レリ(米發大臣宛電報第六八號)トカ又ハ滿洲國ノ右整理方法ニ對シ多大ノ不安ヲ抱キ居レリ(英發大臣宛電報第一四號)トカノ記事現レ居ル趣ノ處滿洲國ニ於テハ治安回復其ノ他當面ノ緊急施設ノ爲巨額ノ資金ヲ要スルニ拘ラス本件舊債務ニ關シテハ特別ノ考慮ヲ加ヘ合理的解決方法トシテ客年末(一九三〇年以降成立シ物品引渡完了セル積缺申出額國幣七百十一萬圓餘ニ對シテハ大同元年會計年度ニ於テ其ノ三割五分(約二百五十萬圓)大同二年度ニ於テ其ノ二割(約百五十萬圓)ヲ各債權者一律ノ割合ヲ以テ現金ヲ交付シ殘額ニ對シテハ之と同額面ノ二十年償還年三分利附公債ヲ交付シ(一九二九年以前ニ成立シタルモノ及物品引渡未了ノ積缺申出額國幣百三十一萬圓餘ニ對シテハ精査ノ上合理的ニ決定セラルヘキ積缺商款額又ハ損害額ト同額面ノ前項ト同條件ノ公債ヲ交付スルコトニ決定シ

爾來各國債權者團別ニ受諾ノ順序ニ依リ各個債權ノ審査ヲ行ヒ日本ハ既ニ客年末第一次ノ現金交付ヲ受ケタル外英國側ハ一月十二日、獨逸側ハ十七日、米國側ハ二十日何レモ右整理方法ニ對シ受諾ノ意ヲ表示シ英國側ハ近ク審査確定

バ リ 2月4日前発
本 省 2月4日後着

第四七號(極秘)
貴電第二七號ニ關シ

佛國側組合 Syndicat ノ金融上ノ地位ニ付テハ津島財務官發田大藏次官宛拙信第二號ニテ御承知ノコトト認ムル處右ニ付當方限リノ思付ヲ述ヘンニ

(一)本問題當初ノ目的ハ佛國事業家ヲシテ滿洲ニ於ケル或ル種事業請負ノ形式ニ依リ投資セシムルニ存シタルコト客年累次ノ往電ニテ御承知ノ通ニシテ「デペルドン」「デュフル」等ノ口吻ニ徴スルモ組合側トシテモ組合員タル個々ノ事業會社ヲシテ現實ナル事業ニ當ラシムルコト即チ諸官廳道路等ノ建設工事材料又ハ自動車ノ賣込等ヲ望ミ居ルニ過キサルモノノ如ク(別電第四八號最近「デユフル」ヨリ「ドリル」宛電報御参照アリ度シ)滿洲ヘノ資本融通等ハ考ヘ居ラス然ルニ其ノ後現地ニ於テ滿鐵トノ合辦會社設立問題起リ事業範圍中ニ公共事業請負ノ外社債引受等ニ依リ佛國資本ノ誘致問題モ加味スルコトナリタル爲當該佛國組合ニ關スル銀行側ノ背景若ハ保障ノ程度等ニ付別個ノ考慮ヲ必

67

昭和8年2月24日
在満州国武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

第一二九號(至急、極秘)
滿鐵代表ノ來訪(脱)ニ依レハ佛國ノ滿洲投資ニ關シ滿鐵ニ於テ個個ノ事業ニ就テハ協力實行スル事ニ決定セル趣ナル處目下ノ情勢ニテハ聯盟トノ正面衝突必然ノ勢ナルヤニ認めラルルニ付テハ右實現ノ上ハ必然的ニ滿洲國非協力ノ運動起リ佛國側モ之レニ引摺ラルル惧アルヲ以テ滿洲國トシテハ結局佛國借款成立ノ見込ナシト考ヘ失望シ居レリ就テハ「ドリル」ノ會社案ヲモ併セテ成立セシムル様今一應御盡力相煩ハシ度ク右ハ前記非協力運動ヲ牽制スル意味ニ於テモ考慮ノ餘地アルヘシト思考セラル
軍ト打合セ濟ミ

諸外国による満州国非協力運動台頭の可能性
に鑑みその牽制の意味でドリル側財団との合
弁会社案推進方意見具申

新 京 2月12日後発
本 省 2月12日後着

要トスルニ至リタルモノト認ムル處本組合ノ如キ金融的背景微弱ナルモノニ對シ滿洲ニ於ケル廣汎ナル事業若ハ投資ニ關スル優先的地位ヲ與フルコト發表セラルルニ於テハ或ハ日佛銀行ノ如キモ不平ヲ唱ヘ又佛國ノ他ノ有力ナル財産家ヲシテ無用ノ誤解反感ヲ抱カシムルニ至ル惧無シトセス依テ此ノ際ハ資本誘致ヲ主タル目的中ニ含マシメス差當リ客年駐滿大使發閣下宛第四一六號談合ノ國都建設事業ヲ引受ケシメ更ニ條件次第ニテ四五百萬圓ノ諸官廳建築事業ヲモ請負ハシメラルルコトトセハ現在ノ組合ニ於テハ差當リ満足スルニ非サヤト認メラレ而シテ之ニ依リテ當方一般事業家財産家ヲシテ漸次滿洲方面ニ興味ヲ増サシムル効果ヲ收ムヲ得ヘシト思考ス
(二)將又現在交渉ノ進捗程度ニ顧ミ滿鐵トノ合辦會社設立計畫ヲ進メラルル必要アリ而シテ之ニ資本誘致ノ點ヲモ加味セラレサルヘカラストスルモ其定款作成ニ當リ或ハ將來有力ナル他ノ財團ノ参加ヲモ可能ナラシムル餘地ヲ存セシムルコトニ依リ又ハ事業請負ノ點ニ付豫メ其種類ヲ限定シ若ハ金額ヲ明示シテ之ヲ制限スルコトニ依リ現在ノ佛國組合ニ關シ滿洲全般事業ニ付獨占的地位ヲ與フルニ非サルコト

66

昭和8年2月12日
在満州国武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

ヲ明カニセラルルニ於テハ同組合ノ金融的背景強カラサル點ヨリ來ルヘキ危險ハ防キ得ルニ非サヤト思考ス
右或ハ本省ニ於ケル御考察若ハ現地ニ於ケル交渉ニ副ハサルヤモ計ラレサルモ實ハ本問題ハ昨春以來種々ノ曲折ヲ經テ今日ニ至リタルモノニシテ其間客年往電第六二八號其他ニテ御承知ノ通本邦側トシテ佛國組合側ニ關シ相當「コンミット」セル點モアリ其結果組合側モ乘氣トナリ現地ニ視察團ヲ送ル段取ト迄ナリタルモノニシテ從テ今日ニ至リ同組合ノ金融的基礎固カラストテ事業ヲ中止セシムル如キコトトモナラハ當ニ該組合關係者ヲ失望セシムルノミナラス我方一般ノ將來ノ爲面白カラサル影響ヲ及ホスニ至ル惧アルニ鑑ミ右卑見申進ムル次第ニシテ當館トシテハ關係者ニ關スル體面上ヨリ言フモ形式ノ如何ヲ問ハス兎ニ角何等カノ事業ヲ請負ハシメラルル様致シ度ク存シ居ルニ付此點特ニ御考量ニ容レラレ度シ
長岡大使、津島財務官ニ轉電セリ

付屬地内事業經營の条件として英米煙草トラ
ストに満鉄への保証を要望する事項について

新 京 2月24日後発
本 省 2月24日後着

第一六七號(至急、極秘)
(1) 貴電第一一九號ニ關シ

其後關係各方面ト協議ノ結果大体左ノ趣旨ノ保證ヲ爲スヘキ旨ノ一札ヲ英米煙草代表ヨリ當大使館ヲ通シ滿鐵ニ入レシメ之ニ對シ滿鐵側ヨリ異議無キ旨ヲ再ヒ當大使館ヲ通シ英米煙草側ニ通告スルノ形式ヲ取ル事ニ決定シ英米側代表者モ大体異議無ク兩三日中ニ當地ニ於テ必要ナル署名ヲ爲ス手筈トナリ居レリ

(一)其製品ヲ附屬地ヨリ滿洲國內又ハ關東州内ニ輸送セサルヘク又輸送セラルル事無キ様盡力スヘキ事

但シ滿洲國ノ課税又ハ關東州ノ煙草税ヲ夫々支拂ヒタル時ハ此限ニ非ス

(二)工場設備ハ捲揚機六臺以内トスル事(生産高一箇月一千箱五千萬本)

(三)滿鐵力附屬地在住者ノ收入ニ比例シテ徴收スヘキ公費ヲ

負擔スヘキ事但シ鐵道附屬地經營ニ關スル諸規則ヲ遵奉スヘキ事

(四)英米煙草ノ工場敷地ハ附屬地内警察取締上支障無キ地ヲ選定スルコト

(五)將來東亞煙草トノ間ニ不正ナル競争ヲ爲ササルハ勿論將來之カ提携ノ具体的方法ヲ講スルコト

前記保證條件中(四)以外ハ英米煙草側ヨリ自發的ニ言ヒ出シタル處ヲ記シタルモノナリ又保證書ニ於テハ工場ノ敷地ハ滿鐵附屬地ト云フノミニシテ別ニ地域ヲ限定セサルモ英米側ノ奉天附屬地内ノ現在豫定地ハ警察上ノ見地ヨリ好マシカラサル關係上他ノ適當ナル場所例ヘハ鐵嶺又ハ遼陽ニ設置セシムヘキ豫定ニシテ後日英米煙草側ト滿鐵ト直接話シ合ヒノ上選定ノ筈ナリ前記保證書署名終了ノ節ハ追電致スヘシ支ヘ轉電セリ

支ヨリ上海ヘ轉報アリ度シ

68 昭和8年2月28日 在滿州国武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

付屬地内事業經營に關する滿鉄への保障事項に

スルノ可ナルコトヲ述ヘタル處再應閣下ニモ至急面談致度シト述ヘタリ就テハ何日頃本人ヲ貴地ニ訪ネシメ然ルヘキ至急御回電ヲ請フ
往電第一六七號ト共ニ奉天ヘ轉電セリ
大臣、支ヘ轉電セリ

69 昭和8年3月1日 内田外務大臣より
在滿州国武藤大使宛(電報)

ドリル側財團と滿鉄との間に滿州国における事業請負いを目的とした滿州企業組合設立契約成立について

別電 三月一日發内田外務大臣より在滿州国武藤大使宛第一三九號

右組合契約要領

付記一 二月八日、關係各省係官協議決定

「日佛合辦滿洲投資會社ニ關スル措置振ノ件」

二 二月九日付、作成局課不明

「佛國財團ノ對滿投資計畫ニ關シ有田次官ト八田滿鐵副總裁トノ會談要録」

關し英米煙草トラスト側異議申立てについて

新 京 2月28日後發
本 省 2月28日後着

第一八二號

關東廳長官發本官宛電報

第七號(極秘)

日下内務局長ヘ松山ヨリ

二月廿七日英米煙草代表者(「チンケン」)小官ヲ來訪シ過般旅順ニ於テ閣下ト會談ノ際問題トナリタル五箇ノ保障條項ニ關シ上海出張所經由倫敦本社ニ照電シタル處本社ニ於テハ(イ)製產高一ヶ月一千箱五千萬本ニ制限スルコト(ロ)將來東亞トノ間ニ不正ナル競争ヲ爲ササルハ勿論將來之カ提携ノ具體的方法ヲ講スヘキコトノ二點ニ異議アリ自分トシテハ東亞ト不正ナル競争ヲ爲スノ意思無ク將來適當ノ時期ニ於テ協定スルノ所存ニテ又月五千萬本以上ヲ製造スルノ計畫ヲ有セサルカ本社ニ於テハ生産量制限及東亞トノ協定問題ハ工場設立許可不許可トハ別個ノ問題ト看居ルノミナラス右二點ノ保障ヲ書面ニ殘スコトニ不同意ナル次第ナリト述ヘタルニ付當方面ニ於ケル目下ノ狀況上右二箇ノ點ニ同意

三 二月九日付、作成局課不明

「佛國財團ノ對滿投資計畫ニ關スル八田「ドウ」ル」會談ニ付大淵滿鐵支社長ヨリ柳井課長ニ對スル電話要領」

本 省 3月1日後8時發

第一三八號(極秘)

佛宛往電第三九號ニ關シ

其後「ドリル」ト滿鐵トノ話合ハ順調ニ進行シ大要別電第一三九號ノ通りノ組合契約案ヲ作成シタルカ右ニ對シテハ關係各省何レモ異存無ク二月二十八日林滿鐵總裁ト「ドリル」トノ間ニ調印ヲ了シタリ

本件組合ハ貴電第二二號(關東軍參謀長發關參滿第四一號電)ノ會社設立案ト同様滿洲國ノ都市計畫ニ關シ佛國ノ資本及技術ヲ入ルル前提タルヘキ基礎機關ニシテ(從テ何等獨占權及優先權等ノ問題ヲ包含セサルハ勿論ナリ)現在國際政局ノ大勢ニ鑑ミ之カ成功ヲ助長スルハ極メテ緊要ナリト認メラル

尙「ド」ハ三月九日當地發米國經由歸朝シ本國財團ト打合ヲ遂ケタル上右財團中ノ有力會社ノ主腦者ヲモ同伴シ更ニ

滿洲國ニ赴ク豫定ナル由

以上滿洲國側へ御傳へアリ度

右中央軍部ト協議濟

別電ト共ニ在佛大使ニ轉電セリ

(別電)

本省 3月1日後7時20分發

第一三九號(極秘)

一、本組合ハ佛國財團ト滿鐵ヲ當事者トシテ設立セラル

ニ、本組合ハ日本語ニテハ「滿洲企業組合」ト稱シ佛語ニテ

ハ SYNDICAT POUR L'ETUDE ET LA REALISATION D'ENTREPRISES EN MANCHOUKUO(S.F.R.E.M)トス

三、本組合ノ目的ハ滿洲國ニ於テ都市建設關係ノ事業其他兩當事者間ニ合意成レル事業ヲ行フニ在リ

四、差當リ大連及巴里ニ事務所ヲ置ク

五、双方各々二十萬圓ヲ限度トシテ出資ス將來右限度以上ニ出資セントスル場合ハ豫メ双方ノ合意アルコトヲ要ス又特別ノ協定アル場合ノ外双方ノ出資額ハ均等ナルヘキモ

二 滿洲國をめぐる列國との關係

方乃至滿洲國ニ於テ佛國其他外國資本ヲ利用セントスル場合却テ厄介物トナル惧アリ反之佛國財團ノ事業ヲ其當初ノ計畫ニ引戻ストセハ當ニ斯ノ如キ不利ナキノミナラス同財團ノ成立ノ由來及從來ノ經緯ニ鑑ミルニ國都建設事業引受位ノ力ハアルモノノ如クナルヲ以テ此際ノ措置振トシテハ大体左記三案ヲ考慮シ得ル處諸般ノ關係ニ鑑ミルニ第二案ニ依ルコト得策ト認メラル

(註、國都建設事業ニ對スル投資ニ付テハ佛國財團代表者巴里出發前ノ彼我ノ内交渉ニテハ五年措置、廿ケ年年賦償還トシ之カ償還ノ割合及利率等ハ現地ニ於テ協議スルコトトナリ居レリ)

第一案

本件日佛合辦會社ノ成立ヲ見合セ當初ノ計畫通り佛國財團ヲシテ差當リ國都建設事業ノ一部ニ投資セシメ場合ニ依リテハ哈爾濱ニ於ケル水道事業ニモ投資セシムルコト

第二案

佛國財團側ニ於テ本件事業ニ對スル日本政府ノ保護ノ保障ヲ必要トシ其結果右第一案ニテ満足セサル場合ニハ我政府ノ態度ヲ「コミット」スルコトナクシテ事實上右要求ヲ滿

ノトス、利益ノ分配ハ出資額ニ比例シテ之ヲ行フ

六組合ノ役員ハ双方全然同數ヲ任命ス

七組合ノ存續期間ヲ三十ケ年トス、但双方ノ合意ニ依リ右期間内ト雖解散スルコトヲ妨ケス

(付記一)

日佛合辦滿洲投資會社ニ關スル措置振ノ件(昭和八年二月八日内閣、外務、大藏、陸軍、海軍、拓務、各省係官協議ノ結果決定)

本件會社設立案ハ滿洲問題ニ對スル國際政局展開策ノ一トシテ大局上頗ル有意義ナルモノト認メラルル處右ニ關シ今次佛國財團代表者ヨリ提出アリタル試案ハ當初巴里ニ於ケル彼我ノ内交渉ニ於テ豫定セラレタル新京國都建設事業等ノ請負ノ外金融的方面即將來ニ於ケル佛國資本ノ誘致等ヲモ目的トナシ居レリ

然ルニ本件佛國財團ノ金融的背景ハ津島財務官ノ調査等ニ依リニ將來佛國ノ巨大ナル資金ヲ誘致シ得ルカ如キモノニ非サル趣ニテ從テ同財團ト滿鐵トノ間ニ前記試案ノ如ク金融ノ目的ヲモ有スル合辦會社ヲ設立セシムルコトハ將來我

足セシムル爲メ合辦會社設立ノ代リニ單ニ佛國財團ト滿鐵ト共同スル形式(例ヘハ組合ノ組織ノ如シ)ヲ採ラシメ主トシテ佛國財團ヲシテ第一案所載ノ事業ニ投資セシムルコト

第三案

本件日佛合辦會社設立案ヲ見合スコト諸般ノ關係上面白カラサル場合ニハ右合辦會社ノ定款ニ於テ其目的ヲ局限シ第一案所載ノ事業ノミニ投資スルコトトシテ其ノ設立ヲ認ムルコト

(付記二)

佛國財團ノ對滿投資計畫ニ關シ有田次官ト八田滿鐵副總裁トノ會談要録

(昭和八年二月九日)

二月九日有田次官ハ八田滿鐵副總裁ノ來訪ヲ求メ本件ニ關シ二月八日内閣外關係五省係官協議會ノ決定ヲ手交シ右書類ニ所載ノ第二案ニ依リ「ドウリル」ト談合ヲ進メラレ度キ旨ヲ告ケ更ニ谷亞細亞局長及柳井亞細亞局第三課長ヨリ之カ説明ヲ爲シ且右第二案實行ノ態様ニ付テハ滿鐵側ニ於テ「ドウリル」トモ御交渉ノ上可然御考究アリ度ト述ヘタ

二 満州国をめぐる列国との関係

ルカ八田副總裁ハ之ヨリ「ドウリル」ト會談ノ答ニ付其ノ際本件第二案ノ「ライン」ニテ懇談スルコトトスヘク何等具体案ヲ得タル上ハ更ニ御協議申上クヘシト答ヘタリ尙右會談ノ際八田副總裁ノ談話中主ナル點ハ左ノ通一、本件佛國財團トノ提携ハ政治的ニ頗ル意義アルヲ以テ此際滿鐵トシテハ廿萬圓位ノ捨テ金ハ敢テ辭スルモノニ非ス此種組合ノ成立スルコト丈ケニテモ重要ナル政治的効果アル次第ナリ

ニ從テ滿洲ニ於ケル自分（八田副總裁）ト「ドウリル」トノ會談ノ際同席ノ十河理事ノ如キハ自分ニ對シ之ヲ即決スヘシト述ヘタル程ニテ「ドウリル」ト會談後滿鐵ハ重役會議ヲ開キテ之ヲ可決シタルカ自分ハ本件ハ敢テ政府ニ經伺ノ要モナシト考ヘタル次第ナルモ結局爲念中央ノ意嚮ヲ確カムルコトトナリ其ノ結果本計畫ノ實現ハ今日迄遲延シタルナリ滿鐵トシテハ「ドウリル」カ確實ナル人物ナルコトサヘ確ナラハ大ニ本計畫ヲ促進シ度意向ナリ三、滿洲國カ建國早々ノ今日都市計畫、水利水道等ノ公共施設ニ巨資ヲ投スルノ餘裕ナキハ已ムヲ得サルコトニシテ例ヘハ哈爾濱松花江堤防ハ客年中水害ニヨリ崩壞シタル

ルニ付右出來ノ上ハ更ニ外務省側ニ提示協議申上クヘシ

70 昭和8年3月7日

在ハルビン森島（守人）総領事より
内田外務大臣宛（電報）

滿洲國經濟發展のため鉄道建設材料供給など援助の用意ある旨ポーランド領事申入れについて

ハルビン 3月7日後発
本省 3月7日後着

第一四四號

本官發滿宛電報

第一三三號

當地波蘭領事「ダグラス」及次席領事「キワトコフスキー」七日震災見舞ノ爲當館ヲ來訪ノ際館員ニ對シ目下滿鐵ニ於テ滿洲國諸鐵道ノ委任經營並ニ新設ヲ爲シ居ル處日波友好關係ニ鑑ミ協力シテ滿洲國經濟ノ發展ニ盡シ度鐵道材料其ノ他重工業方面ニ於テ援助ノ用意ヲ有スルニ付滿鐵又ハ滿洲國側ニ於テ必要ノ品目數量等通報アルニ於テハ本國政府ヘ申遣ルヘシ執レ詳細追テ懇談致度ト述ヘ居タル趣ナリ就テハ本官回答ノ都合モアルニ付勿論然ルヘク滿鐵並ニ滿洲

儘未タ修理セサル狀況ナルカ他方滿鐵トシテモ目下大鐵道計畫ヲ樹テ居ル此ノ際公共施設ニ充テ得ル財源ナキ處之等ノ施設カ佛國財團ノ力ニ依リ實現スルニ於テハ滿洲國國民ノ福祉ハ現實ニ増進セラルル譯故王道主義ノ具体化トシテ人民ニ悅ハレ滿洲國ノ基礎ヲ固ムル所以トナルヘシ四、都市計畫、水道等ノ事業ハ國防ノ問題トハ關係ナク外國側財團ニ行ハセルニハ恰好ノモノナリ殊ニ佛國ハ此ノ種事業ニ付テハ其ノ技術ハ世界ニ冠タリ

五、滿洲ニ於ケル「ドウリル」トノ交渉ニ付テハ小磯參謀長、坂谷總務廳長、大橋外交次長等ト充分連絡シタリ

（付記三）

佛國財團ノ對滿投資計畫ニ關スル八田「ドウリル」會談ニ付大淵滿鐵支社長ヨリ柳井課長ニ對スル電話要領

（昭和八年二月九日）

二月九日八田滿鐵副總裁「ドウリル」ト會談ノ結果二月八日內閣外關係五省係官協議會ノ決定第二案ニ依リ本計劃ヲ進ムルコトニ話合纏マリ「ドウリル」ヨリノ提案ニ對シ滿鐵側ハ書面ヲ以テ回答スルコトトシ目下右同答案作製中ナ

國側ト打合置キ相成度シ

尙滿洲國在留波蘭人ハ三千五百ニ達シ在哈同國商業會議所ハ夙ニ滿洲國ニ好意ヲ表シ波滿經濟提携ヲ主張シ來レルモノナリ

大臣、支、北平、奉天ヘ轉電セリ

71 昭和8年3月16日

在滿洲國武藤大使より
内田外務大臣宛（電報）

付屬地内事業經營に關する滿鉄への保証事項に
關し英米煙草トラスト側と合意成立について

新京 3月16日後発
本省 3月16日後着

第二五〇號（極秘）

往電第二四五號及關東長官發本使宛電報第七號ニ關シ關東廳內務局長ト英米煙草代表者ト旅順ニ於テ三回會談ノ結果生産制限及東亞トノ提携問題ハ先方ノ誠意ニ任シ前記關東長官來電第七號ノ通り保證書ヨリ右二問題ニ關スル條項ヲ削除シ（尤モ機械ヲ六臺ニ制限スル事ハ存置ス）先方ノ希望ヲ容ルルヲ可トスル域ニ達シタリ即チ往電第一六七號

列記ノ保證條項(ニ)ヨリ「生産高一ヶ月一千箱五十萬本」ノ一句ヲ又同(五)全体ヲ削除スルニアリ本省ニ於テハ右ニテ先方ノ希望ヲ容ルル事ニ取扱ヒ御異儀^議無キ事トハ存スルモ爲念至急何分ノ儀御回電アリ度シ
尚往電第二四五號冒頭十三日トアルハ十一日ノ誤ナリ
關東長官、支、奉天へ轉電セリ

編注 右保証書は同月二十七日署名された。

72 昭和8年3月29日 内田外務大臣より
在満州国武藤大使宛(電報)

台頭營における空爆事件など米国人伝道施設に
対する日本軍の軍事行動に関し実情調査方訓令

別電 三月二十九日発内田外務大臣より在満州国武藤大使宛第二二六号

右事件に関する在本邦米國大使の覚書要領

本省 3月29日後9時発

第二二五號

二十九日米國大使有田次官ヲ來訪シ口頭申入ニ代フル趣旨

第二二六號

河北省台頭營ノ米人宣教師 Charles Kauto ノ北平米國大使館ニ對スル報告ニ依レハ日本軍ハ三月九日木頭燈ニ於テ同十一日双山子ニ於テ夫々米國「ミツション」ヲ占據セリ三月二十一日在天津米國總領事ハ日本總領事ノ注意ヲ喚起セル處日本總領事ヨリ軍側ニ調査ヲ求メ置キタル旨回答アリタルモ其ノ後何等ノ通報ニ接セス
又其ノ後「カウツト」ノ報告ニ依レハ三月二十四日午前九時日本ノ一飛行機台頭營ノ「ミツション」用地内(米國旗ヲ掲揚セリ)同人住宅附近三二個ノ爆彈ヲ投下シ「ミツション」ノ堀、窓硝子及烟突破損セルカ其ノ際支那人九名死亡セルモ「カウツト」夫妻ハ負傷セサリシ由
「カウツト」ノ感想ニ依レハ「ミツション」及之ニ隣接セル民家ニ對シ爆撃スヘキ挑發的理由ナク又事實右爆撃ニ依リ何等軍事上得ヘキ所ナカリシ趣ナリ
在北平米國大使ハ日本大使館ニ對シ日本軍カ凌源在任外國人ニ對シ空中爆撃ヲ英文「ピラ」投下ニ依リ豫告シ外國旗掲揚方及避難方ヲ求メタルニモ顧ミ日本飛行機操縦者ハ「カウツト」ノ掲揚セル米國旗ヲ認メサリシモノト推定セ

ナリトテ要領別電第二二六号ノ如キ覚書ヲ提出セルニ付テハ至急実情御取調ノ上回電アリ度又今次ノ熱河攻畧ニ際シテハ在留外國人ニ對スル保護極メテ周到ニ行ハレ今日追何等ノ苦情ヲ聞カス寧ロ賞讃ノ声ノ高カリシ次第ニモ顧ミ別電ノ内容ニシテ事実ナルニ於テハ甚タ遺憾ト存セラルルニ付將來斯種出來事ノ再發防止方軍側ト懇談ヲ遂ケラレ度(尙台頭營爆撃ノ件ハ北平U、P、ヨリ米國方面へ電報セラレ倫敦「デーリー」エクスプレス」北平通信モ之ヲ掲載シ居ル趣ニテ米國々務省極東部長ヨリ出淵大使ニ對シ注意喚起ノ次第アリ又在英大使在「シアトル」領事等ヨリモ本件実情ニ付照會アリタリ)

別電ト共ニ支、北平、天津ニ轉電シ支ヲシテ南京ニ轉報セシメタリ

(欄外記入)

發電ト全時ニ至急陸軍省ニ送ルコト スミ

(別電)

本省 3月29日後9時発

ラルル旨ヲ緊急ノ書翰ヲ以テ申送ルト共ニ前記ノ事實ヲ直ニ軍側ニ傳達方及米國人ノ生命財産保護方ヲ要求セリ

73 昭和8年3月30日 内田外務大臣より
在満州国武藤大使宛(電報)

満州国旅券検査規則公布は非承認國人の入国
取締が目的との連合通信報道につき照会

本省 3月30日後9時0分発

第二三一號

二十九日東京各新聞ハ新京發聯合通信トシテ滿洲国政府ハ滿洲国ヲ承認セス全国ト協力スル意志ナキ諸外國ニ對シテハ門戸解放ノ必要ヲ認メサルヲ以テ之等諸國家ニ屬スル外國人ノ入国ヲ取締ル爲山海關滿洲里安東大連其他国境各地ニ旅券検査所ヲ設置スルコトナリタル趣ヲ報道シ中ニハ「滿洲国ノ門戸閉鎖」「非承認國ニ對スル第一次ノ強硬策」等ノ標題ヲ附セルモノモアリ右ハ先般貴大使ヨリモ報告アリタル通り滿洲国ニ於テ諸外國全様外國人入国規則及国境旅券検査官設置ヲ實行セントシツ、アルヲ誇大ニ報道セルモノナリト認メラル、處此ノ辺ノ消息並本件旅券検査規則

ハ既ニ公布セラレ實施期日決定セラレタル次第ナリヤ等爲
念回電アリタシ
米及在欧各大使並在支公使へ轉電セリ

74 昭和8年3月31日
在満州国武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

満州国旅券検査規則非難の報道に関し同国政
府内の非承認国への感情について

新 京 3月31日後発
本 省 3月31日後着

第三三五號(極秘)

貴電第二三一號ニ關シ

旅券検査規則ハ四月一日公布、六月一日實施ノ豫定ナル趣
ノ處右規則ニ關聯シ外交部方面ニ於テハ御來示ノ新聞報道
ノ如キ言説ヲ爲シタルモノナク右ハ恐ラク通信員ノ興味本
位ノ誇張的報道ノ結果ナルヘシト爲シ居レリ但シ部内一部
ニハ一面非承認國民ニ對シ實質上待遇ニ手心ヲ加フルコト
カ滿洲國ノ承認ヲ促進スル一方法ナリト爲スト共ニ他面非
承認國ニ對シテ好シテ好意ヲ示スノ必要ナシトノ論アルカ

爲通信員等ニ於テ自然右ノ空氣ヲ看取シ本件規則ニ結着ケ
タルコトハアリ得ヘシ

75 昭和8年4月1日
在満州国武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

台頭營における日本軍の米国人伝道施設に対
する空爆事情について

新 京 4月1日後発
本 省 4月1日後着

第三三七號

貴電⁽¹⁾第二二五號ニ關シ

支那大部隊ハ臺頭營ヲ根據地トシ隨時界嶺口方面ニ現ハレ
我方ヲ攻撃シ執拗ニ挑戰的態度ニ出テ居リ我方トシテハ自
衛上支那側直接ノ策源地ヲ攻撃セサルヲ得サル次第第二十三
月二十四日我飛行機ハ午前九時半臺頭營中央附近ニ軍馬五
〇頭及多數ノ部隊ヲ認メタルヲ以テ之ヲ爆撃セリ低空飛行
ハ支那兵ノ攻撃ヲ受ケ危險ナルヲ以テ我飛行機ハ上空中高
度以上ニ於テ行動ス
從テ當時國旗ヲ認識スル能ハサリシ趣ナリ⁽²⁾

木頭橙及双山子米國「ミツシヨン」占據ノ件ハ目下調査中
尙臺頭營ニ對シテハ支那側力挑戰的態度ヲ續クル限り軍側
トシテハ自衛上今後モ爆撃ヲ行フ筈ニテ該地附近ノ外國人
ノ速ナル撤退ヲ希望シ居レリ
因ニ支那兵ハ我方ノ攻撃ヲ免カルルノ一策トシテ外國人居
住地附近ヲ選ヒ駐屯スルヲ常トスルモノナルニ付外國人側
ニ於テモ充分注意ノ要有リ
北平、天津、支、奉天、錦州へ轉電セリ

76 昭和8年4月3日
在シカゴ武藤(義雄)領事より
内田外務大臣宛(電報)

満鉄の米国業者への機械発注に関する松岡全
権の意見転達について

別 電 四月三日発在シカゴ武藤領事より内田外務大
臣宛第二七号
右松岡全権意見

シカゴ 4月3日後発
本 省 4月4日前着

第二六號

松岡全権ヨリ

別電第二七號次官宛電報ノ件ニ關シ

將來斯ル實利的方面ニ於ケル偏頗ノ措置カ相當我滿蒙政策
ニ對シ根強キ反(感)ヲ招クニ至ルヘキコトハ申上クル迄モ
ナキ事故何卒閣下ニ於テモ御高配ヲ仰キ度シ

(別 電)

シカゴ 4月3日後発
本 省 4月4日前着

第二七號

松岡全権ヨリ有田次官へ

左ノ通山本條太郎氏へ御傳ヘヲ請フ

Consulting engineer Perrin 及同事務所(員)Kohlhaas(先
年鞍山ニ雇ハレタル技師)ト紐育ニ於テ會談シタル處滿鐵
ハ先般精巧品ノ「シート」、「バー」、「ブルーム」製造機械
購入ノ件ニ關シ獨逸ニノミ問合セラ發セラレタル由ナルカ
「スペシフィックーション」次第ニテハ米國ニ於テモ獨逸ト
同値ニテ作り得ルノミナラス種類ニ依リテハ獨逸ヨリモ更
ニ良品ナルモノヲ提供シ得ルノ自信アリ(或ハ曩ニ精巧品

ノ機械ヲ獨逸ヨリ購入シタル關係ヨリナルヤモ知レサル處
夫ト之トハ無關係ナルコトヲ附言セリ)若シ出來得ル事ナ
ラハ米國ニモ右賣込ニ付獨逸ト同一ノ機會ヲ與ヘラレンコ
トヲ希(望)ス殊ニ今日ノ米國實業界ハ悲況中ニアリテ「ス
チール」事業界モ甚タシキ打撃ヲ受ケ居ルコト御承知ノ通
ナレハ如斯機會ヲ與ヘラルルニ於テハ之ヲ「アプレシエー
ト」スヘシ現ニ右獨逸ニ問合ノ事情知レ巨ルヤ米國機械業
者等ノ間ニ於テハ之ヲ以テ偏頗ナル仕打ナリトシ滿鐵ニ對
シ反(感)ヲ抱クモノスラアル有様ナルカ如斯反感ヲ緩和ス
ルコトハ滿鐵ニ取リテノミナラス滿蒙問題其ノモノニ付テ
モ有利ナルヘシ云々ト述ヘ居タリ

右滿鐵ノ注文締切ハ四月十五日トナリ居ル由ニ付テハ拙者
ニ於テモ兩人ノ話ニ同感ナルニ付尊台ニ於テハ Perin 事
務所及 Kolhaas ト從來ノ御關係モアルコト故ニ何卒此ノ
際至急林總裁ニ御注意アリ右締切ノ時期ヲ相當延期スルト
共ニ米國ニモ競争賣込ノ機會ヲ與フル様御配意ヲ仰ク但シ
敍上獨逸ヘノ單獨注文カ誤傳ナリトセハ其ノ旨ヲ説明シ置
キ度ク桑港出帆迄ニ御返電ヲ得度シ

此ノ事ハ日米關係上相當重大ナル事項ト存スルニ付敢テ電

77 昭和8年4月4日

内田外務大臣より
在滿州国武藤大使宛(電報)

滿州国旅券検査規則公布は同国の門戸開放政
策を放棄するものとの米国紙論評について

本省 4月4日後4時20分發

第二三九號

在米大使來電第二七八號

三十一日紐育「ヘラルド、トリビューン」ハ滿洲國政府ハ
山海關、「ポグラニチナヤ」、安東、大連等ニ同國ニ對シ好
意ヲ有セサル人々ヲ排斥スル爲メ旅券検査所ヲ設置スヘク
東京日日ニ依レハ右ハ滿洲ニ投資ノ機會ヲ求ムル多數外國
商人ヲ排除スルコトトナルヘシト報シタル三十日東京發特
電ヲ揭クルト共ニ之ニ斯ル行動ハ若シ事實ナレハ滿洲國政
府ハ曩ニ遵守ヲ誓ヒタル門戸開放政策ヲ明白ニ放棄スルモ
ノナリトノ註釋ヲ加ヘ注意ヲ惹キタル爲メ新聞側ヨリ問合
セアリタルニ付滿洲國政府ニ於テ諸外國同様旅券規則及國
境旅券検査官設置ヲ實行セントシツアルコトカ誇大ニ報

道セラレタルモノト認メラレ滿洲國ニ於テ門戸開放主義ヲ
放棄スルカ如キコトハアリ得ストノ趣旨ノ説明ヲ不取敢與
ヘ置キタリ

78 昭和8年4月5日

内田外務大臣より
在中国中山公使館一等書記官宛(電報)

台頭營における米國人伝道施設への空爆事件
に關し米国公使に空爆事情の説明および遺憾
の意表明方訓令

本省 4月5日後4時30分發

第四八號

在滿大使發本大臣宛第三三七號ニ關シ

(欄外記入) 我軍カ台頭營ヲ爆撃セシハ事實ナルモ右ハ軍事上ノ必要ニ
出テタルモノニシテ故意ニ教會ヲ狙ヒタルコトナク又被害
事情及程度ニ付テハ詳細ナル現地調査ヲ要スルモ同地ハ依
然支那軍ノ勢力下ニアリテ急速ニ之ヲ爲シ得ヘキ見込ナキ
ヤニ認メラルル處何レニセヨ我カ軍事行動ニ依リ損害ヲ與
ヘタルコト絶對ニナシトハ斷言出來サルヲ以テ貴官ハ此際
一應米國公使ニ對シ右趣旨ノ下ニ今回ノ被害ニ對シ甚タ氣

79 昭和8年4月5日

在滿州国武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

木頭橙および双山子での米國人伝道施設に對
する日本軍占拠の事実無根について

新京 4月5日後發
本省 4月5日後着

第三四二號

貴電第二二五號ニ關シ
米國「ミツシヨ」所屬財産占據ノ件ニ付軍側調査ノ結果
左ノ通り

日本軍ハ平和ノ住民、殊ニ外國人ノ生命財産ニ對シテハ最
善ノ注意ヲ拂ヒ居リ本件ニ關シテモ當時米人牧師其ノ他ハ
不在ナリシヲ以テ日本軍ハ三月九日木頭燈ニ同十三日双山
子ニ於テ教會管理人又ハ代理布教師ノ承諾ヲ得宿泊シタル
事アルモ占據シタル事實絕對ニ無シ尙木頭燈教會管理人張
海亭及双山子代理布教師陳郎先ノ證明書郵送ス
北平 支、天津、奉天、錦州へ轉電セリ

80

昭和8年4月6日 在中国中山公使館一等書記官より
内田外務大臣宛(電報)

台頭營での米國人伝道施設空爆事件に際する
我が方軍事行動事情を米國公使了解について

北平 4月6日後發
本省 4月6日後着

第一五五號

(一)滿洲國カ旅券検査所ヲ設クルハ國內秩序擾亂ヲ目的トス
ル不良分子ノ入國ヲ取締ラントスルニ外ナラス外國人企業
ノ勃興及外國資本流入ヲ歡迎スルハ滿洲國當局ノ從來常ニ
言明シ居ル處ニシテ現ニ營口ニハ相當大規模ノ英國人經營
ノ綿布染色工場ノ新ニ設立セラルルアリ又北滿ニ於テハ建
國宣言以來米及波蘭人ニ依リ製粉製糖及豆油業ノ發展顯著
ナルモノアリ又日本ノ治下ニ服スル鐵道附屬地ニ於テハ企
業ノ性質上日本人ノ既存企業ニ相當好意ヲ與フヘキモノニ
テモ最近日本當局ヨリ外國會社ニ工場設置ヲ許シタル實例
アリ(英米煙草會社工場設置許可ノ件ナルモ會社名及事業
ノ性質ハ當分秘密トシ置キ度シ)

滿洲國ノミナラス前記ノ如ク日本側モ亦滿洲ニ於テ從來門
戸開放機會均等ノ方針ヲ嚴守シ居レルハ右ニ依リテモ立證
セラルル次第ナルカ左ニ今後ノ方針ヲ記述センニ

(二)滿洲國建國宣言ハ一九三二年三月一日ナルカ滿洲國輸出
入額ノ過半ヲ占ムル大連港ノ同年ノ輸出入狀況ヲ見ルニ輸
出ニ付テハ一九三一年ノ六割強増輸入ニ付テハ同ク十一割
二分強増入港船舶ニ付テモ同ク四〇八隻ヲ増加シテ四九
十九隻ニ及ヒ其噸數ニ於テ七十七萬四千六十八噸ヲ増加一

貴電第四八號ニ關シ

六日米國公使ニ面會シ御訓令ノ趣旨ヲ述ヘタル處同公使ハ
米國側ノ申入ハ日本軍ノ行動ヲ問責(「アツキユーズ」スル
意ハ毛頭ナク從來日本軍カ米國人ニ對シ與ヘラレタル保護
ヲ多トシ居リ今回臺頭營攻撃ノ已ムヲ得サル事情モ充分了
解シ居ル次第ナリ只今ノ御話ニ依リ本國政府モ充分満足ス
ルコトナルヘク損害ハ殆ント言フ程ノ事モナキ程度ナリト
答ヘ尙米國側ニ於テ日本軍ノ行動ヲ「アツキユーズ」スル
意ノ無キコトニ付誤解無キ様希望スト繰返シ述ヘタリ
滿、支、天津、南京へ轉電セリ

81

昭和8年4月6日 在滿洲國武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

滿洲國への門戸閉鎖非難に対しては同國對外
貿易狀況より反駁すべき旨意見具申

新京 4月6日後發
本省 4月6日後着

第三四七號

(1) 貴電第二三九號ニ關シ

千〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
千八十八萬四千五百六十六噸ヲ示セリ

支那側ニ於テハ各種ノ手段ヲ以テ滿洲國貨物ニ對シ重稅ヲ
課シ又ハ不當ナル取扱ヲナシ居レルニ拘ラス一九三二年ニ
於ケル支那船舶ノ大連入港ハ前年ニ比シ實ニ二百三十三隻ノ
増加ニシテ八百四十二隻ニ達ス歐米諸國ノ船舶モ亦前年ニ
比シ相當隻數ヲ増加シ居レリ

大連稅關ノ收入ハ一九三二年ニハ前年ノ十二割二分強ヲ増
セリ

現時未曾有ノ世界經濟的不況ノ時代ニ於テ斯ノ如キ旺盛ナ
ル經濟的發展ヲナシ居ルモノ何レニアリヤ右ハ滿洲國カ獨
立以來一方門戸開放機會均等々ノ方針ヲ遵守シ他方治安ノ
確保交通ノ安全購買力ノ増進企業ノ發展ニ努力セル結果得
タル賜ナルコトハ滿洲國側ニ於テ痛感シ居ル處ナリ然レハ
今後何カ故ニ本件旅券検査等ニ藉口シ右方針ヲ抛擲シ如上
ノ旺盛ナル經濟的發展ノ趨勢ヲ阻止センヤトハ滿洲國側ノ
意見ナリ

御見込ニ依リ歐米方面ニ轉電アリ度シ
支、天津、奉天、哈爾濱へ轉電セリ

二 滿洲國をめぐる列國との関係

82 昭和8年4月10日 内田外務大臣より
在米国出淵大使宛(電報)

満州国承認問題に言及したとされるキャッス
ル前米国國務次官の講演内容確認方訓令

本省 4月10日後6時30分発

第七一號

貴電第三〇七号ニ関シ

九日東京各新聞紙ハ七日「フィラデルフィヤ」發電通通信
トシテ「キヤツスル」ハ本件演説ニ於テ「スチムソン」原
則ハ侵畧ニ依リ獲タル領土ノ不承認主義ヲ声明セルモ米国
ハ斷ジテ滿洲国ヲ承認セズト述ベタルニハ非ズ時ト情勢ノ
変化ニ依リ問題全部ニ變動ヲ與フルコト有ルベキコトヲ述
ベタル旨報道シ居レリ右英文御回電相成度シ

83 昭和8年4月11日 内田外務大臣より
在サン・フランシスコ若杉(要)総領
事宛(電報)

米国業者への機械発注に関する松岡全権の意
見に対し満鉄側の措置振りについて

84 昭和8年4月11日 在米国出淵大使より
内田外務大臣宛(電報)

前米国國務次官の講演内容確認について

ワシントン 4月11日前発
本省 4月11日後着

第三一二號

貴電第七一號ニ關シ

費府ノ政治社會學會ニハ當館ヨリ加瀬書記官ヲ出張セシメ
タルカ七日ノ「キヤスル」ノ太平洋ニ於ケル米國ノ政策ト
題スル講演ハ同人モ傍聴シ居リ同講演ハ往電第三〇七號ノ
點ノ外ニモ種々率直ニ種々所見ヲ披瀝セル節アリ聴衆ノ注
意ヲ惹キタルモ御來示ノ如キ趣旨ノ個所ナク同地ニテハ似
寄リノ「コンメント」モナカリシ趣ナリ又「キヤ」カ講演
ノ際用ヒタル「テキスト」(未公表中ニモ同趣旨ノ個所ナ
シ爲念右「テキスト」ニ依リ「キヤ」カ米國ノ不承認主義
ニ關シ論シタル數節英文ノ儘別電ス(「テキスト」全文飛行
便ニテ郵送)

第一八號 本省 4月11日発

松岡全権へ

米國市場ニ對スル滿鐵ノ機械註文發出方ニ關スル「シカゴ」
發貴電ニ關シ當方ヨリモ滿鐵側ニ對シ注意ヲ喚起シ置キタ
ル處今般滿鐵ヨリノ通報ニ依レハ本件機械類購入ニ關シ米
國ニ註文ヲ發セサリシハ爲替關係等モアリ米國品ヲ高價ト
認メタルニ因ル次第ナルカ今次貴電ニ依リ米國ニ於テモ略
獨逸ト同値ニテ此等機械類ヲ購入シ得ルコト判明シタルニ
依リ四月八日三井、三菱、大倉ヲ通シ Mesta Machine Co.
United Engineering and Foundry Co. Morgan Engineer-
ing Co.ノ三米國會社ニ對シ獨逸側ニ出シタルト同様ノ「ス
ペシフィケーション」ヲ送り機械購入ノ問合ヲ爲スコト(締
切期日ハ四月末トシタル由)ニ取計ヒタル由ニテ滿鐵トシ
テハ米國側ニ對シ差別待遇ヲ與フル意思毛頭ナキハ勿論場
合ニ依リテハ米國ノ中古品ヲ購入スルモ差支ナキ意向ナル趣
ナリ就テハ敍上ノ次第御含ノ上可然米國側ニ御説明アリタシ
山本氏ト打合濟

85 昭和8年4月12日 在奉天中野(高一)総領事代理より
内田外務大臣宛(電報)

岫巖において匪賊による米国人宣教師ニール
セン誘拐事件発生について

奉天 4月12日後発
本省 4月12日後着

第八二號

本官發滿宛電報

第七〇號

十二日當地米國總領事館々員來訪シ十一日頃岫巖(安東管
内)居住米人宣教師「エヌ、ニールセン」(N. Nielsen)匪賊
ノ爲拉致セラレタル趣ナルニ付テハ同人奪回ノ爲貴館、關
東軍及滿洲國官憲ノ助力ヲ仰キ度旨申出アリタリ
大臣、支、北平、安東へ轉電セリ

86 昭和8年4月13日 在仏国長岡(春一)大使より
内田外務大臣宛

仏国において我が方啓発活動に従事する經濟
記者リオティーより同國經濟發展國民協會会

(欄外記入)

ベシト自家廣告ヲ爲シ居ルモ同人ハ極東其モノニ就テハ未ダ何等ノ知識經驗モ無ク又其ノ信用ニ付テモ疑アルニ付本使ハ同人ニ對シ相當「デスカレーシング」ノ應接ヲ爲シ置ケリ就テハ前記「リオウテイ」ノ滿鐵總裁等ニ宛テタル書翰モ其ノ含ミニテ御傳達相成様致度
尤モ滿洲國顧問ニ關スル當地ノ空氣ハ前述ノ通ナル上其ノ間ニハ國際間ノ嫉妬ナル微妙ナル心理モ作用シ居ル様認メラレ從テ英米人顧問ノ外佛人モ採用セラレタリト云フコトトモナラバ當方一般ヲシテ滿洲國ニ對シ更ニ一段ノ興味ヲ有スヘク政治的ノ效果ハ多大ナルモノアル可シト思考ス
就テハ此ノ點ヲモ考慮ノ上客年十二月壽府發往電第七一號申進ノ次第二關シ滿洲國側ニ於テ主義ノ問題トシテ佛人顧問僱聘ノ意ナキヤ否ヤ御確メノ上御回示相成度シ尙「リオウテイ」ハ從來トモ佛滿經濟提携ニ付盡力方申出居ル處(同人ハ過般成立ノ滿洲企業組合ノ存在ヲ知ラズ)同人ノ目的トスル「Comite de Forge」ノ如キ有力ナル團體ヲシテ佛滿企業提携ニ當ラントノ意嚮ヲ有シ居レル模様ナレルヲ以テ今般滿洲ヨリ歸佛シタル「ドリル」

長を満州国顧問に推薦の書簡轉達について
機密公第二五三號
(接受日不明)
昭和八年四月十三日

在佛特命全權大使 長岡 春一
外務大臣伯爵 内田 康哉殿

「ピエール、リオウテイ」書翰轉送並ニ滿洲國
佛人顧問僱聘方及滿洲企業組合ニ關スル件

本件ニ關シ當方所見左ノ通り申進スルニ付御詮議ノ上何分ノ儀御回示相仰キ度此段申進ス

一、聯盟脫退通告ニ件ヒ起ルコトアルベキ當國輿論ノ變動ニ處センカ爲當國啓發關係事務ニ付益々意ヲ用フル要アルヲ認メ豫テヨリ從來ノ關係者タル「レイ」「カーネギー」財團ニ於テ「エスカラ」ニ對抗シ六回ニ亘リ講演中「プリッソ、デマイエ」(各地ニ於テ講演特ニ「フランマンソン」方面ニ力ヲ注グ)「グロンダイス」(チリテキ協會等智識階級相手ニ講演ス)「ラ、ポマレード」及「ルジヤンドル」(各種新聞等ニ寄稿)「ピエール、リオウテイ」(上院外交委員會等ニテ講演)等ノ諸氏ニ材料ヲ提供シ講演又ハ新聞雜誌寄稿ニ依リ我方ノ立場ヲ闡明セシメ來リタルカ右諸氏

ハ克ク其ノ目的ヲ遂行スルト共ニ佛國ニ於テ新興滿洲國トノ各般ノ關係殊ニ兩國間ノ經濟關係ヲ増進スルノ必要アルコトヲ力説スル處アリ其講演ハ大体ニ於テ同情ト好感トヲ以テ傾聽セラレ相當大ナル效果ヲ收メツツアルモノノ如ク脫退ノ惡影響ト認ムヘキ事態存在セザルノミナラズ當地東方商業會議所方面ニテハ滿洲國ニ「ミツシヨ」派遣ノ議スラアリ又英米人ガ顧問トナリ居ルニ對シ佛國ヨリモ之レヲ出スノ要アリトノ意見相當強クナリ居ル模様ニテ同國顧問タランコトヲ希望シ當館ニ「アプローチ」シ來ルモノ増加スルノ狀況ナリ。

現ニ最近「リオウテイ」ハ本使ニ對シ「ドーデー」ナル者ヲ滿洲顧問ニ推薦スルト共ニ別添林滿鐵總裁及小磯關東軍參謀長宛同人推薦狀轉送方依頼越セリ

右「ドーデー」ハ現ニ經濟發展國民協會(Association nationale d'expansion économique)ノ會長ヲ勤メ居リ本人並ニ「リオウテイ」ノ語ル處ニ依レバ其職務上佛國財界ノ有力ナル人物ニ知合多ク此等企业家ヲ説キテ極東ニ投資セシメ得ル便宜ヲ有シ居リ將來滿鐵等ガ佛國ニ於テ社債ヲ募ル等ノ場合ニハ極メテ有用ナル働ヲ及ボシ得

ニ對シ企業組合ハ滿洲ニ於テ獨占排他的ニ仕事セントスルモノニ非ザルニ付他ノ團體ニ於テ希望有ラハ之ヲ抱擁スヘキモノト思考スト前提シ「コミテ、ド、フォルジュ」ノ名ヲ試ミニ出シタルニ「ドリル」モ勿論他ノ團體ノ參加ハ歡迎スル處ナルモ先般成立ノ企業組合ハ未ダ設立早ナナルヲ以テ今直ニ「コミテ、ド、フォルジュ」ノ如キ有力團體ヲ加フル時ハ却テ之ニ全部ヲ乗取ラルル處有リ依テ先ツ現在ノ組合ヲ健全ニ發達セシメ其基礎鞏固トナリタル上ニテ徐ニ他ノ有力團體ヲ參加セシムル事トシタシト申居レリ依テ當方ニ於テハ先ツ現在ノ企業組合ヲ護リ立ツル方針ニテ進ム可ク從テ他ノ個人若クハ團體ヨリ滿洲ニ於テ企業希望申出ツル場合ニモ右方針ノ下ニ然ル可ク應酬スルツモリナルニ付本省若クハ滿洲國側ニ於テモ他ノ團體等ヨリ直接滿洲投資若クハ企業ノ申出アル場合ニハ右ノ御含ミノ下ニ然ル可ク御取扱有之様致度シ

(欄外記入)

大橋次長意見

「ドリル」ニ在佛滿洲國代表ノ名義タケ与フル事可然

87 昭和8年4月14日 在中国中山公使館一等書記官より
内田外務大臣宛(電報)

遼河河口の海賊による英国船員拉致事件解決
への我が方尽力方につき英国公使要請について

北平 4月14日後発
本省 4月14日後着

第一六五號

四月十三日附私信ヲ以テ英國公使ヨリ左記ノ通り申出アリ
タリ

昨夜話セル牛莊事件、即チ三月二十九日戎克ニ乗レル海賊
遼河タロニ碇泊中ノ英船南昌丸ヲ襲撃シ英人船員四名ヲ拉
致セル事件ハ御承知ノ事ト思考ス四月三日前記船員ノ一人
他ノ三人釋放ノ爲ノ身代金ヲ要求セル海賊頭目ヨリノ書面
ヲ持參シ牛莊ニ歸來セリ、次テ被拘禁船員ノ一人ヨリ海賊
ノ脅迫の態度ニ鑑ミ速ニ身代金ノ支拂方ヲ督促セル手紙到
着セリ、其ノ後更ニ牛莊附近ニ居ル海賊ナリト知ラレ居ル
海賊ヨリ通信アリタリト承知ス

右ノ如ク海賊トノ聯絡附キタル以上問題ハ前記監禁者ヲ如
何ニシテ釋放スヘキヤニアリ右方法ニ付テハ地方滿洲國及

滿、支ヘ轉電セリ

88 昭和8年4月16日

内田外務大臣より
在滿洲國武藤大使宛(電報)

英国船員拉致事件に対し滿洲國対外信用発揚の
ため同国の適切なる措置につき指導協力方訓令

本省 4月16日後8時20分発

第二九九號

北平發本大臣宛電報第一六五號ニ關シ

人質及海賊ニ關スル其後ノ情報及各方面(英國側ヲ含ム)ニ
於テ救出ニ關シ今日迄ニ執レル措置振ニ付御取調ノ上同電
アリ度

尙對外的ニハ本件ノ如キハ滿洲國行政機關ニ於テ取扱フノ
建前ヲトルヲ要スルコト當然ナルヘキ處本件ハ取扱振宜シ
キヲ得ルニ於テハ滿洲國ノミナラス延イテハ我方ノ對外信
用ヲ傷クルヲ防クノミナラス却テ之ヲ發揚スル機會トモナ
ル次第ニ付若シ滿洲國側ノミニテ迅速且有效ニ本件ヲ處理
シ得ル見込ナシトセハ我方ニ於テ之ニ對シ適切ナル指導協
力ヲ與ヘナルヘク速カニ救出ノ目的ヲ達スルト共ニ之ニ依

日本官憲間ニ協議中ナルカ如キモ是等官憲ハ必要行動ヲ執
ル責任ヲ回避セントスル傾アルヤニ見受ケラル、四月八日
在牛莊英國副領事 Clarke ハ奉天中央部官憲ニ私電ニテ日
本官憲ヲ現場ニ派遣シ本事件ヲ處理セラレ度旨申出タル處
四月十日附ヲ以テ右ニ對シ近時滿洲國ノ警察行政大ニ改善
セルヲ以テ右事件ハ主義上滿洲國行政機關ニ於テ取扱フヘ
キモノナル旨ノ回答ニ接セリ然シナカラ滿洲國官憲ニ於テ
本件ヲ處理スル模様ナク又假令之ニ委ストスルモ同國官憲
ニ於テ效果ヲ舉ケ得ヘキ見込ナキカ如ク一方前記三人ノ海
員ハ海賊ノ手ニアル事既ニ二週間餘ニ及ヒ居リ其ノ生命危
殆ニ瀕シ居ルニ付釋放方ニ付有效ナル手段ヲ講スル事時々
刻々迫レル緊急事ニシテ右有效手段ハ牛莊ヲ事實上支配セ
ル日本官憲ニ俟ツノ外途ナシト確信ス

就テハ滿洲國ト協力シ又ハ日本側單獨ニテ最善ト認メラ
ル方法ニ依リ出來得ル丈ケ速ニ前記監禁者釋放ノ爲日本政
府ヨリ本件ヲ「完全ニ擔當シ得ル充分ナル權限」ヲ有スル
モノヲ送ルカ又ハ牛莊ニ在ルモノノ内ヨリ任命セラルル事
緊急ノ必要ナリ

右英國公使申出ニ對スル回答振り御回示ヲ請フ

リ英國側ノ勝手ナル言分ノ出鼻ヲ挫クコトトモ致度就テハ
軍側ト懇談ヲ遂ケラレ至急必要ナル手配ヲ講スル様御配慮
相成度

訓令トシテ冒頭引用電報ト共ニ牛莊ニ轉電アリ度

北平、支ニ轉電セリ

89 昭和8年4月18日

在ニュー・ヨーク堀内総領事より
内田外務大臣宛(電報)

前米國國務次官講演に關する報道の反響およ
び滿洲國門戸開放問題が國際經濟會議予備交
渉の議題となるとの米國紙報道について

ニュー・ヨーク 4月18日後発
本省 4月19日前着

第一〇九號(後廻電報)

十四日「サン」紙ハ前「ニュー・ハンプシャー」州選出上院
議員 George H. Moses ノ同日附華府特電トシテ大要左ノ
如キ通信ヲ掲ケタリ

過日費府政治學會席上「キヤツスル」前國務次官カ政治的
統一國家トシテ滿洲國ヲ承認スルニ何等差障リ無シトノ立

論ヲ爲シタルニ對シ國務省ニ於テハ兎モ角外交團ノ一部ハ相當驚愕シタルモノノ如シ然レ共右ハ單ニ明確ナル事實ヲ宣明シタルモノニ過キス其ノ議論タルヤ正當且自明ノ理ナリ滿洲國內ニハ幾分不秩序ノ存在スルトスルモ同國カ廣ク國權ヲ確立シ郵便、商業、教育、司法等ニ付主權ヲ行使シ居ル證據ハ充分ニシテ同國カ日本ノ支配下ニ獨立セリトノ事實ハ之カ承認ノ基礎條件ヲ阻害スルモノニ非ス米國ハ各種ノ感情上ヨリ現在迄露國承認ヲ拒否シ居ルモ同問題ノ如キハ現在米國ニ取り直接重要ナル意味ヲ含ムモノニ非ス然レ共今同華府ニ開カル可キ經濟會議ニ關スル下打合會ニ於テハ右滿洲國承認問題ニ關聯シ米國ニ取り最も重要ナル門戸開放主義モ論議セラルルニ至ル可ク此ノ米國ニ依リ開放セラレタル門戸カ最近漸次閉鎖セラレツツアル時ニ際シ日本ノ代表カ滿洲國ノ爲ニ力開放ノ保障ヲ與フル用意有ルヤ否ヤ注目シテ待ツ可シ

在米各館ニ郵報セリ

90 昭和8年4月26日

在米出淵大使より
内田外務大臣宛(電報)

91 昭和8年4月30日
在ハルビン森島總領事より
内田外務大臣宛(電報)

拉賓鐵道敷設に伴う北滿鐵道横斷工事に關シ
ソ連側抗議の場合の対応方針について

ハルビン 4月30日後発
本省 4月30日後着

第二七四號(極秘)
本官發滿宛電報
第二三七號

拉賓線敷設ニ伴フ東支鐵道東部線横斷工事ハ御了知ノ通五月十日前後ニ着手ノ豫定トナリ居ル處右横斷ハ架橋ニ依ルモノニシテ且横斷場所ニ於テハ東支側トシテモ別段作業ヲ行ヒ居ラサルヲ以テ東支ノ汽車運行ニハ固ヨリ業務ニモ何等支障ヲ與ヘサル次第ナルモ横斷場所ハ東支附屬地ニ屬スル當市郊外舊哈爾濱所在停車場用地内(軌條兩側ノ所謂鐵道用地ニアラス)ニアル外東支ノ電柱ヲ一、二移轉スル必要アル爲(本工事ハ電線ノ切換ニ依リ一時間位ニテ完了ノ由)蘇聯邦側ヨリ何等抗議アルヘキハ東支蘇聯邦側ヨリ最近ニ同李督辦^(滿カ)ニ對シ東支兩側ニ於ケル土木工事ニ付質問ノ次第

滿洲國非承認國には門戸開放を適用せずとの駒
井同國參議聲明への米國紙非難論調について

ワシントン 4月26日後発
本省 4月27日前着

第三八六號

二十五日東京發A、P及紐育「タイムス」特電ハ何レモ滿洲國參議駒井德三ハ滿洲國ハ門戸開放並機會均等ヲ約シタリト雖モ右ハ相互的ノモノニシテ同國ヲ承認セル國ニ對シテノミ適用有リト語レルカ駒井氏ノ地位ニ鑑ミ注意ス可キ言明ナリト報シ右ハ二十六日ノ紙上ニ「滿洲國門戸閉鎖セントス」等ノ見出ノ下ニ掲ケラレ一般ノ注意ヲ惹キ居ルノミナラス此ノ種ノ公然タル聲明ハ當國ニハ面白カラヌ印象ヲ與ヘ時節柄種々ノ望マシカラヌ影響ヲ生スル虞モ有之ニ付最近ノ機會ニ於テ滿洲國當局ヨリ外國通信員ニ對シ別ニ適當ノ聲明ヲ與ヘ當國新聞ヘ通信セシメララル様然ル可ク御配慮ヲ希望ス

紐育ヘ轉電シ在米各領事(「ホノルル」ヲ含ム)ヘ暗送セリ

アリタル等ニ鑑ミルモ明カナルヘシ然レトモ右トテモ一應抗議ヲナスニ止マリ結局泣寢入ニ終リ事故ヲ惹起スルノ惧レ全然無カルヘク滿洲國側トシテハ交通部ヨリ近日中東支ニ對シ一方的通告ヲナスニ止ムル意嚮ナル趣ナルカ蘇聯側最近ノ遣方ニ徴スレハ本件ニ付テモ我方ニ抗議ヲ提出スルコトモ想像シ得ヘシ右ノ場合ニハ事項ノ性質上蘇聯トシテハ東京又ハ莫斯科ニ於テ取扱ノコトト思考スルモ萬一本官ニ對シ何等申越ノ際ニハ本件工事ハ滿洲國ノ事項ニシテ滿鐵ハ單ニ工事ヲ請負ヒ居ルニ過キサレハ滿洲國ニ申入アリ度旨ヲ以テ應酬スル意嚮ニ付御含置相成度尙洮昂線ノ東支横斷ノ際ニハ事前相當期間蘇聯ニ對シ交渉ヲ試ミタルモ諒解ヲ得サリシ爲一方的通告ニ依リ工事ヲ完了セルモノト承知シ居ル處爲念當時ノ經緯大要電報相顧度シ
大臣、露ヘ轉電セリ

92 昭和8年5月2日

内田外務大臣より
在米出淵大使他宛

滿洲國における外国商人の現状に関する説明
資料送付について

昭和八年五月二日

外務大臣伯爵 内田 康哉

在米國特命全權大使 出淵 勝次殿

在カナダ臨時代理公使 川村 博殿

在サン・フランシスコ總領事 若杉 要殿

在ニュー・ヨーク總領事 堀内 謙介殿

在ロス・アンゼルス領事 佐藤 敏人殿

在ポートランド領事 中村 豊一殿

在シアトル領事 内山 清殿

在シカゴ領事 武藤 義雄殿

在ニュー・オルレアンス領事代理 佐藤 由己殿

在ヴァン・クーヴァー領事代理 野々村 雅一殿

在ニュー・ヨーク大使館商務書記官 首藤 安人殿

滿洲国ニ於ケル外國商人ノ現狀ニ關スル説明資料送付

ノ件

滿洲国ニ於ケル外國商人ノ現狀ニ關スル説明資料トシテ在
滿洲国帝國大使館作成ノ英文資料及本省作成ノ「滿洲国ニ
於ケル歐米人ノ活動」各一部送付ス

Open Door in Manchoukuo

The import trade of Manchuria through the port of Dairen had shown a considerable decrease in 1931 for all countries in comparison with that of the previous year, the decrease being in the case of Japan from ¥85,700,000 to ¥68,000,000 and in that of the United States from ¥16,000,000 to ¥9,000,000. Since the establishment of Manchoukuo, however, the situation has gradually improved as may be seen from the trade figures of Japan, which increased to ¥63,000,000 for the period from March to August, 1932, from ¥29,000,000 in the corresponding months of 1931.

An exception to this general trend was the decrease, during the same period, of the American figures from ¥1,200,000 to ¥1,000,000.

But such an increase or decrease was not solely limited to these two countries. As for the increase, in the instance of China, her trade advanced during the same period from ¥12,000,000 to ¥19,800,000, British trade

from ¥800,000 to ¥1,600,000, Soviet from ¥380,000 to ¥800,000, and French from ¥30,000 to ¥190,000. As for the decrease, the United States was not the only country which sustained the loss; Germany, for example, also suffered a decrease from ¥1,800,000 to ¥1,000,000.

In view of this, it is a distorted conclusion to hold that the comparison between the import figures of the U.S. and Japan, which are favourable to the latter and unfavourable to the former, evidences some tampering with the open door in Manchuria; an inference which entirely ignores the variegated returns of other countries. Let us compare, article by article, the import trades of these two countries in the above mentioned period of 1932.

A general advance is noticed in practically every article imported from Japan. In the case of the U. S. her trade suffered a slump in some articles such as Machinery, medical material, drugs, flour, and tobacco. But one can not fail to find out, even by a casual glance over the

figures, the remarkable advance in the imports of paper and petroleum -- the increase being ten times in paper and six times in petroleum. What does this mean?

It is obvious that the above change which is very irregular in it characteristic was by no means an outcome of the closing of the "door" on the part of Manchoukuo, but was, in main, brought about by the operation of natural economic causes or by peculiar local conditions which prevailed or are now prevailing in Manchuria. The probable factors which contributed to the increase of the Japanese trade in Manchuria will be as follows;

- (1) The low exchange rate of Japanese yen.
- (2) Japanese merchandise, which was formerly subjected to an unfair restraint on account of the anti-^(discriminations) Japanese discrimination on the part of the old militarist regime, has now regained its natural position wherein it can compete with foreign goods on equal terms.

(3) The effort on the part of the Japanese traders to recover, in Manchuria, the losses they are suffering in the middle and southern parts of China as the result of the anti-Japanese boycott.

(4) The demand for Japanese goods such as Japanese sake by the local Japanese population, which has increased greatly since the incident of September 18, 1931.

The decrease in the import returns of certain American goods may be accounted for by the following factors;

(1) The high exchange rate of dollar;

(2) Under the old regime, the business of American firms in Manchuria as well as that of German concerns, consisted primarily in supplying mechanical implements to arsenals and other military establishments; so that it is inevitable that they have lost most of their business with the downfall of the Chang regime.

Despite of these circumstances, the enhanced demand for such commodities of popular use as paper and petroleum must clearly demonstrate to the American businessmen that the new State of Manchuria offers them an almost unlimited market for the future development of their trade. The truth is that, the Manchurian market which was ^(arbitrarily) closed to some extent under the former administration has come, with the advent of Manchoukuo, to be literally opened for a free and fair competition; a land of equal opportunity for all nations. Indeed, it is not too much to say that the services rendered by the Japanese advisers to Manchoukuo has done much toward the realization of this end.

昭和八年一月十日

滿洲國ニ於ケル歐米人ノ活動

通商局第二課

滿洲國ニ於ケル歐米人ノ活動

概觀 昭和六年度ニ於ケル銀安ニヨル取引不振ト事變ノ勃發トハ、滿洲ニ於ケル歐米人ノ活動ニ殆ンド致命的打撃ヲ與ヘタルガ、滿洲國ノ成立ヲ契機トシ其ノ營業方針ハ根本的ニ變更ヲ來シ、即チ相場ノ動搖ヲ免ルル爲從來ノ金建取引ヲ銀建ニ改ムルト共ニ、對官廳主義ヲ棄テ新ニ一般商工業者ヲ相手トスル方策ニ轉ジ奉天ヲ中心トシテ恢復ノ氣運顯著ナルモノアリ又滿洲國ノ財政確立セラレ治安ノ維持略爲ルヤ、諸外國ノ關心漸次集リ、最近北滿ニ於ケル各國ノ投資熱ノ如キ頓ニ旺盛ニ赴キ、米國ヲ筆頭トスル列國資本戰ノ展開ヲ見ントシツツアリ。今滿洲國ニ於ケル歐米人ノ活動ヲ概言スレバ次ノ如シ。

一、英國

滿洲ニ於ケル英國人ノ活動ヲ代表セル奉天英商ノ營業狀態ヲ見ルニ事變以後依然振ハザルモノ多ク、殊ニ英商中各種機械類、銅、鐵類、汽車、自動車等ヲ取扱フモノハ、從來舊軍閥ト特殊關係ヲ結ビテ營業シ來リタルタメ、軍閥ノ崩解ハ之等英商ニ大打撃ヲ與ヘ賣掛金ノ回收サヘ目下ノ所見込ナキ狀態ナリ。然レドモ七年十月以後ハ奉山、

瀋海兩鐵路局ヨリノ註文ニヨリ稍々活氣ヲ呈スルニ至レリ。滿洲ニ於ケル三大石油商トシテ知ラレタル在奉亞細亞石油公司ハ蘇聯石油ノ壓迫ニ加フルニ銀暴騰ノ影響ヲ受ケ、日本金建ニテ販賣シ居タル關係ヨリ欠損ヲ受ケ、一時ハ營業範圍ノ縮少說サヘ傳ヘラレタルモ取引建値ヲ現大洋ニ變更シ、暫ク今後ノ推移ヲ靜觀スルコトトナレリ。コノ外各種煙草、砂糖、牛乳等ノ販賣ニ從事スル商社ハ匪賊ノ跳梁尙止マザル爲メ、奧地各縣トノ交通不便ヲ極メ賣行不振ニ陥リ居タルモ右兩鐵道ノ開通後ハ商況稍々活況ヲ呈スルコトナレリ。最後ニ滿洲ニ於ケル英國人ノ活動中特ニ注目スベキハ、奉天ニ於テ費用二十萬圓ヲ投ジテ建築中ナリシ滙豐銀行(香上銀行)ノ最近落成セルコトニテ、近ク事務所ヲ移スト共ニ、コレヲ機會ニ預金部、貸出部ヲ擴張スベク計畫中ナリ。因ニ七年九、

十兩月ノ大連ニ於ケル滿洲國對英國ノ貿易ハ輸出五百一十一萬、輸入五十六萬九千圓ニシテ、コレヲ前年同期ニ比較スレバ輸出四百三萬七千圓、輸入三十九萬二千圓ヲ著増セリ。

ニ、米國

奉天ニ於ケル代表的米國商社ハ七社アル處、自動車販賣

ヲ主トスル商會以外ハ滿洲事件ノ結果甚大ナル影響ヲウケ七年ノ賣上高ハ前年ニ比シ六割以上ノ減少ヲ示セリ。然レドモ事變後ハ舊顧客ノ注文回復シタルト、市政公署、瀋海、奉山兩鐵路局等ヨリノ大口注文ニヨリ、自動車ヲハジメ電氣材料、鐵道材料、機械等ヲ取扱フ商社ハ相當繁榮ノ狀態ニアリ。又滿洲ニ於ケル三大石油商社ニ屬スル美孚、德士古ハ奧地兵匪ノ跳梁烈シキト蘇聯石油ノ猛烈ナル賣込競争トニヨリ賣行不振ノ狀態ニアリシガ、瀋海線ノ開通後ハ全沿線ヨリ注文相當アリテ賣行増加シ居レリ。然レドモ奉天ニ於ケル米國商社ノ前途ニ關シテハ、在滿日本人ノ愛國心ニヨル國產品ノ愛用ニヨリ日本品ト競走ナキ石油、自動車等ノ營業以外ハ將來發展ノ見込ナシトノ悲觀的觀測モ一部ニ傳ヘラレ居レリ。

次ニ哈爾濱ヲ中心トスル北滿ニ於ケル米國人ノ活動ヲ見シ、曩ニ米國資本ニヨル哈爾濱附近ノ阿什河製糖工場ノ再開ヲ觀タルガ之ニ次ギ同地製粉界ニ重キヲナセル松花江火磨ハ打續ク不況ノタメ、近年殆ンド休業ニ近キ操短ヲ續ケ居タルモ、コノ間同地紐育ナショナル・シチー・バンクヨリ約二十萬米弗ノ融通ヲ受ケ、コレガ爲事實上

奉天ニ於ケル佛國商社ハ機械、銅、鐵類、火藥等ヲ取扱ヒ從來主トシテ舊軍閥相手ニ營業シ居タル爲メ、事變後ハ一頓座ヲ來シ商取引殆ンド不可能ニ陥リ、從來ノ利益金ヲ店ノ經費ニ充當シ漸ク店舗ヲ維持シツツアリシガ、新國家成立以來弗々注文アリ、最近ハ各方面ヘ賣込運動ヲナシツツアリ。

北滿ニ於ケル佛蘭西人ノ活動ヲ見シ、滿洲國ノ生誕ト共ニ逸早く佛國資本家ハ露西亞銀行代表メッセ氏ヲシテ滿蒙投資ノ調査ヲ行ハシメタルガ、佛國資本家モ亦北滿ニ於ケル鑛山、交通ニ着眼シオレルダケニ、一般社會ヨリ多大ノ關心ヲ拂ハレ居レリ。尙七年九、十兩月ノ大連ニ於ケル滿洲國對佛蘭西ノ貿易ハ輸出六萬二千圓、輸入二萬三千圓ニシテ、コレヲ前年同期ニ比較スレバ輸出ハ二萬七千圓ヲ増加シ、輸入ハ一萬七千圓ヲ減少シ居レリ。

四、獨逸

奉天ニ於ケル獨逸商中各種機械、銅、鐵類、汽車、自動車等ヲ取扱フモノハ事變後大顧客タル東北軍閥ノ崩解ト不況トニヨリ大打撃ヲ蒙リ、營業振ハズ、休業說ヲ傳ヘラレタルモノモ多ク、目下ノ所店舗ノ現狀維持ニ努メツ

殆ンド同銀行ノ統制下ニアリシガ、七年十一月十四日開カレタル株主總會ハ一部株主ノ反對ヲ押切り右銀行直系ノ米國產業會社ニ三十三萬米弗ニテ讓渡スルコトヲ決議シ、ココニ同製粉工場ハ各實共ニ米國資本ノ手ニ移ルニ至レリ。コノ他紐育市銀行團一行ハ滿蒙視察團ヲ組織シテ建設途上ニアル滿洲國ニ調査ニ來リ、哈爾濱ヲ中心トシテ西部線、東部線及ビ呼海線方面ニ廣汎ナル調査ヲ試ミタル模様ナリ。コノ視察團ハ紐育シチーバンクノ主宰ニナルモノニテ、主トシテ鑛山、農業機械及ビ自動車ニ對スル投資調査ヲ行ヒタルモノニテ、滿洲國ガ交通網ノ擴充、鑛山ノ開發、農業振興ニ主力ヲ注ギ居レル折柄多分ノ期待ヲ抱キタルモノノ如シ。

尙七年九、十兩月ノ大連ニ於ケル滿洲國對米國ノ貿易ハ輸出三十七萬二千圓輸入三十七萬二千圓ニシテコレヲ前年同期ノ輸出九十四萬七千圓、輸入五十六萬二千圓ニ比較スレバ輸出入共ニ減少セルモ、豆粕ノ輸出ハ前年ニ比シ二倍以上ニ増加シ、又輸入ニ於テハ鐵及鋼ハ前年ニ比シ五倍ニ、機械類モ亦多少ノ増加ヲ示シ居レリ。

三、佛蘭西

ツアリ。又藥品類醫療器具等ヲ取扱フ商社モ軍閥ノ崩解ト諸醫院ノ閉鎖トニヨリ營業振ハサリシモ事變後ハ市内各醫院ノ復活セルト、最近ハ各鐵路局、警備司令部軍醫處、警察廳衛生課等ヘ納品スルニ至リタルタメ著シク活氣ヲ呈スルニ至レリ。尙七年九、十兩月ノ大連ニ於ケル滿洲國對獨逸ノ貿易ハ輸出三十八萬圓、輸入七十五萬二千圓ニシテ、前年同期ニ比シ、輸出ハ四十三萬五千圓ヲ輸入ハ十三萬圓ヲ減少セリ。

五、チエッコ・スロヴァキア

機關車、汽車、各種機械類ヲ取扱フ在奉シュコダ商會ハ一方工廠ヲモ有シ諸機械ノ製作、修繕等ヲナシ、事變前舊軍閥トノ特別關係ニヨリ莫大ナル利益ヲアゲタルモ、事變後ハ軍閥ノ崩解ニヨリ二度マデ營業ヲ縮少シ機會ヲ待チ居タルガ新滿洲國ノ成立以來弗々取引アリ、最近瀋海、奉山兩鐵路局ヨリノ注文モウケルニ至リタルモ未ダ舊狀ヲ恢復スルヲ得ズ、往年ノ莫大ナル利益金ニヨリ漸ク維持シツツアリ。

又チエッコ國投資ノ一ヲ代表スル在哈シュコダ造船所ハ、從來閉鎖ノ嚆アリ、數ヶ月前マデハ格安ニテ手放ストサ

二 満州国をめぐる列国との関係

へ稱セラレ、一、二資本家ノ下檢分サヘ行ハレタルモ、最近時局ノ推移ト共ニ對滿洲國投資ガ漸ク安全確實化シ、各國資本ガ暗中飛躍スルニ至リ既得權ノ放棄ハ以テノ外ニテ、寧ロ地盤ノ確保、擴張ヲ計ルベシトナシ、從來ノ態度ヲ變更シ、同造船所ノ擴張計畫ヲ進メツツアリ。

六、露西亞

在奉蘇聯石油會社ハ各種石油ヲ奉天市場ニ販賣シ專ラソノ販路ノ擴張ニ努メツツアルガ、該會社ハ英、米兩國石油會社ノ營業方針ニ倣ヒ、販路擴張ヲ圖ルベク奉天、安東、營口、長春等ノ商業主要地ノ滿洲國商人ト一手販賣ノ代理店ヲ特約シ、以テ各種石油ノ擴張販賣ヲナスコトトナレリ。而シテ目下販賣サレ居ル同社ノ價格ヲ比較スルニ美孚、亞細亞及德士古ノ三大石油會社ノ價格ヨリ格安ナルタメ、一般小賣商ハ競ツテ蘇聯石油會社ノ石油ヲ販賣スルタメ、右三石油會社ハ蘇聯石油會社ノ進出以來徹底的ニ壓迫サレ、全ク營業不振ノ狀態ニ在リ、英米ノ三石油會社ハ今後販賣方法ヲ改善スルニ非ザレバ滿洲ニ於ケル石油販賣權ハ遠カラズシテ蘇聯石油會社ニ獲得サルルニ至ルベク觀測セラル。

共ニ川崎ヨリ外國通信員ニ對シ同様海外ニ電報スル様取計ラハシメタリ

94 昭和8年5月3日 在滿洲國武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

駒井声明を取消す滿洲國外交部声明について

新 京 5月3日後発
本 省 5月3日後着

第四五六號

既電ノ在東京U、P通信員宛五月二日附外交部聲明左ノ通滿洲國ハ獨立主權國トシテ其ノ内外ノ政策ヲ決定スル上ニ於テ何者ノ掣肘ヲモ受クルモノニ非スト雖其ノ建國以來屢聲明シタル門戸開放ノ主義ニ關スル限り未タ嘗テ變更シタルコトナク將來ニ於テモ何等カ已ムヲ得サル特殊ノ事態ニテモ發生セサル限り之ヲ變更スルノ意思ナシ昨年中某國保險會社ヨリ門戸開放問題ニ付一、二苦情出テタルモ右ハ凡テ誤解ナルコト判明シ其ノ後何等ノ不平アルヲ聞カス諸外國カ安價ニシテ良質ナル物品ヲ當國ニ輸入シ且自由ナル投資ニ依リ我國資源ノ開發ニ對シ協力センコトハ滿洲國ノ希

滿洲事變以來蘇聯邦ノ對滿貿易ハ極メテ消極的ナリシ所、滿洲問題ヲ中心トシテ日蘇間ニ低迷セル暗雲モ漸次解消ノ氣運ニ向ヒタルヲ以テ、蘇聯邦ハ再び北滿市場ニ自己生産品ノ販路ヲ求ムルニ至リ西部線ノ復舊ト共ニ蘇聯商品ノ輸入開始サレタリ。尙七年九、十月ノ大連ニ於ケル滿洲國對露西亞ノ貿易ハ輸出四千圓、輸入二十六萬六千圓ニシテ、コレヲ前年同期ニ比スレバ輸出ハ三萬圓ヲ減少シ、輸入ハ九萬圓ヲ増加セリ。

93 昭和8年5月2日

在滿洲國武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

滿洲國外交部による駒井声明取消し措置について

新 京 5月2日後発
本 省 5月2日後着

第四四八號

貴電第三八四號ニ關シ

本件聲明取消ニ付キテハ外交部ニ於テ從來門戸開放遵守方再三宣言シ居ル關係上強ヒテ其ノ必要無カルヘシトテ多少難色アリタルモ結局新京發一日國通ヲシテ放送セシムルト

望シテ已マサル處ニシテ現ニ滿洲國ハ舊來ノ關稅法ニ基キ日本ノミナラス諸國ヨリ盛ニ物資ヲ輸入シ居リ今後開發ノ進展ト共ニ益、増スヘク且某國資本家中ニハ眞面目ニ投資方ヲ考慮シ居ルモノアリ抑々當國ノ建設事業ノ進行上他國ノ承認ノ有無ノ如キ寸毫ノ影響アルモノニアラサルニ付此ノ際強テ他國ノ承認ヲ希求スルノ必要モナク從テ承認セサル國ニ對シ「ボーコツト」若ハ報復ヲ爲ス如キ子供瞞シノ態度ニ出ツルヲ欲セサルモ當國ヲ承認シテ新ニ當國ト如何ナル契約ニテモ爲シ得ル地位ニアル國家カ頑固ニ承認ヲ拒絕シテ事實上開放ノ實質鮮カリシ舊時代ノ地位ヨリシカ保持シ得サル國ニ比シ有利ノ地歩ヲ占ムヘキハ自然ノ數ナリ

95 昭和8年5月3日 在米國出淵大使より
内田外務大臣宛(電報)

滿洲國の門戸開放主義遵守を有田次官に確認の旨米國國務省発表について

ワシントン 5月3日後発
本 省 5月4日前着

第四一二號

三日國務省ハ「ブルー」ヨリ同日有田次官トノ會談ノ結果ナリトテ駒井參議過日ノ新聞會談ハ「オウソリテイ」無キ會談ナル趣ニテ滿洲國ノ門戸開放主義ハ嚴守セラルヘシト電報シ來リタル旨ヲ發表セリ

96 昭和8年5月4日 在英国松平大使より
内田外務大臣宛(電報)

英国下院での駒井声明問題質疑状況などについて

ロンドン 5月4日後発
本省 5月5日前着

第一九七號
往電第一七三號ニ關シ

一日下院ニ於テ保守黨及労働黨議員ヨリノ質問ニ對シ「ボールドウイン」ハ自分モ本件新聞記事ヲ見タリ駒井氏ノ「ステートメント」ハ條約所定ノ門戸開放ヲ維持ストノ日本政府及現滿洲官憲ノ累次ノ聲明ニ明カニ背馳セリ若シ右カ日滿當局ノ意圖ヲ示スモノトセハ英國政府ハ當然前記原則擁護ノ爲執リ得ヘキ措置ヲ講スヘシ然レトモ目下ノ處自分ハ斯ノ如キ報道ニ接シ居ラス將又前述日滿當局ノ保證ニ鑑ミ

右ハ信シ難シト思惟スル旨答辯セリ又三日ノ「テレグラフ」ハ大橋カ同紙特派員ニ對シ滿洲國ハ門戸閉鎖主義ヲ執ル意思無ク現行條約ノ許ス範圍内ニ於テ調整方考量中ナルモ之ニ依リ英國ノ貿易ヲ阻害シ又ハ最惠國條款ヲ廢棄スル事無カルヘシ尙滿洲國ト他國トノ間ニ直接通信ノ途無キ爲誤報傳ヘラルル結果トナルナリ云々ト述ヘタリトノ大連電報ヲ掲載セリ尙三日 H. St Clair Smallwood 中佐ハ倫敦商業會議所極東部會ニテ滿洲國ニ於ケル英國通商ニ關シ演說シタルカ其ノ節當館ヨリ同氏ニ通報シ置キタル貴電合第八八號滿洲國ノ門戸開放主義不變更ノ主旨ヲ紹介スルト共二日本ハ滿洲國ト近接セル關係上常ニ經濟上ノ利益ヲ得ヘキモ英國商人モ亦滿洲ニ於ケル新シキ機會ヲ利用スルニ努ムルニ於テハ等シク注文ヲ取ルヲ得ヘシ余ハ英國政府カ滿洲國ノ市場調査ノ爲特ニ商業視察團派遣方考慮セン事ヲ提議スル旨ヲ演說シ右記事ハ四日ノ「タイムス」及「ガーディアン」ニ掲載セラレタリ

米ヘ轉電セリ

97 昭和8年5月5日 在米出淵大使より
内田外務大臣宛(電報)

国内旅行制限など満洲国の差別的待遇により
英国商社同国引揚げとの米国紙報道について

ワシントン 5月5日後発
本省 5月6日後着

第四一九號

四日北平發U、P並天津發紐育「タイムス」特電(「アーベンド」)ハ一英國商會支配人ノ言トシテ日滿官憲ハ滿洲國ノ門戸開放維持ヲ約言シ居ルモ事實同國ノ門戸ハ急速ニ閉鎖セラレツツアリ成程滿洲國政府ハ表向門戸ヲ開放シ居ルハ事實ナルモ英國商會ニ對シ色々面^向到ナル取扱ヲ爲シ殊ニ商會員ノ國內旅行ニ對シ堪ヘ得サル障害ヲ設ケ最早取引ヲシ得サル狀態ニ在リ現ニ極東ニ於ケル最大ノ英國商社タル香上銀行及「ジャーデイン、マヂソン、コンパニー」ヲ始め數數ノ英國商會ハ在滿支店引揚ノ手配中ニテ這般ノ事情ハ英本國政府モ良ク承知スト報シ居レリ

98 昭和8年5月10日 在天津桑島總領事より
内田外務大臣宛(電報)

英国商社満洲国引揚げの米国紙報道に關し通
信員に差別的待遇は誤解の旨説明について

天津 5月10日後発
本省 5月10日後着

第二六一號

昨九日「アーベンド」來訪セルニ付米來電第四一九號同人通信ニ關シ夫レトナク尋ネタル處右通信内容ノ事實ハ同人ニ於テモ他ヨリ聞知シ居リシカ通信ハ「イーキンス」ヨリ送ラレシモノナル旨辯明セルヲ以テ本官ハ思付ノ儘建設勿々ノ滿洲國ノ現狀ニ於テハ獨リ外國銀行商社ノミナラス日滿兩國ノ銀行會社モ一律ニ其ノ營業思ハシカラサルコト或ハ有之ヘク將又國內旅行ニ付テモ軍事輸送又ハ土匪未タ肅正セラレサル等ノ爲地方ニ依リテハ幾分ノ制限ヲ受クルコトアルヘキモ之等ハ一般的ニシテ敢テ外國人ニノミ限リタル事ニアラス然ルニ之等ヲ以テ同國カ外國商社又ハ商會員ニ對スル差別的待遇ヲ爲スモノナリトスルハ甚タシキ誤解ナリト説明セシニ同人ハ納得セシ模様ナリ

尙昨九日汎太平洋協會「フオード」來訪右「ア」ノ問題ト全然關係ナク滿洲國カ名實共ニ門戸開放セラレンコト頗ル望マシク殊ニ米國方面ノ空氣ハ之ニ依リテ一變スヘク延テ同國ノ滿洲國承認ヲ促進セシムル所以タルヘキヲ疑ハサル旨語り居タリ御參考迄

支、北平、滿、奉天、哈爾濱ニ轉電セリ

支ヨリ上海ニ轉報アリタシ

99 昭和8年5月10日 在滿州國武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

英国商社滿州國引揚げの米國紙報道に対する
反駁要領について

新 京 5月10日後發
本 省 5月11日前着

第四九三號

米發貴大臣宛電報第四一九號ニ關シ

(一)英商會員ノ國內旅行ニ對シ絶エサル障礙ヲ設ケ最早取引ヲ爲シ得サル狀態ニ在リトノ點

英商會員ノ國內旅行ニ對シ滿洲國成立以來何等新タニ障

碍ヲ設ケタルコトナシ或ハ來ル六月一日ヨリ實施スヘキ國境主要地點ニ於ケル旅券検査所ノ設置等ヲモ考慮ニ容レ爲シタル苦情カトモ思惟セラルモ右ハ從來外國人カ支那入國ニ際シ受ケ居レル旅券ノ検査程度以上ノ拘束ヲ加ヘントスルニ非ス況ンヤ其ノ料金ノ如キハ現行支那ノ徵收スルモノヨリモ輕少ナリ滿洲國建設以來商用ノ爲歐米諸國人ノ來滿旅行スルモノ鮮カラサルモ當方面ニ於テ嘗テ此ノ種苦情ヲ唱ヘタルモノナシ

(二)香上銀行及「ジャーデンマデソンカンパニー」其他ノ支店引揚準備中トノ點

今迄ノ處此ノ種風評ハ當方面ニ於テハ寧ロ否認セラレ居ル有様ナルカ實情ヲ示セハ舊政權時代排日ノ爲壓迫セラレタル日本商社カ舊政權沒落後右壓迫ヨリ逃レタル關係上活動力舊時ニ倍加シタルハ事實ニシテ之ト「コンマーシャルベイス」ニ於テ外國商社カ競争スルコトハ舊時ニ比シ困難ナルヘキハ當然ナリ蓋シ舊政權時代ニ於テハ大筋外國商社ハ特別ノ努力ヲ拂フコトナク舊政權ト結托シ賄賂取引ニ依リ莫大ノ利益ヲ收メ居タリシモノナリ正常ナル商取引基礎ニ復歸シタル現時ニ於テ在來ノ商社カ

苦境ニ立ツハ已ムヲ得サル所ナリ尤モ優秀ナル頭腦ヲ有シ努力ヲ惜マサル歐米商人ニ執リテハ滿洲國ノ基礎確立ト共ニ其ノ商業的活動ハ實ニ洋々タル將來ヲ有ス現ニ御承知ノ通一英國大商社ハ最近其ノ分工場ヲ滿洲ニ設置セント

シツツアリ北滿ニ於テモ歐米人ノ企業熱又盛ナルモノアリ

(三)(イ)大連港ハ例年滿洲國ノ對外貿易ノ六割強ヲ占ムル故同港ノ貿易狀態ハ滿洲國ノ夫ヲ反映スルモノナルカ歐米兩大陸諸國ニ對スル同港ノ輸出額ヲ見ルニ一九三一年ニハ七四、五二二千圓ト爲リ更ニ本年一、二兩月ノ輸出額ヨリ推セハ一九三三年ニハ少クトモ九五、九七八千圓ト爲

ルヘシ右諸國ヨリノ輸入額ヲ觀ルニ一九三一年ニハ九、

六五二千圓ナリシモノ一九三二年ニハ一一、〇九七圓ト

爲リ更ニ一九三三年ニハ一一、二兩月ノ統計ヨリ推シ少ク

トモ二二、六九二ト爲ルヘシ又一九三三年ニ於ケル大連入

港ノ歐米諸國船舶ハ一九三一年ニ比シ相當隻數ヲ増加セリ

(ロ)一九三二年十二月末ニ於ケル新京地方ニ於ケル歐米人

數ハ前年同期ニ比シ四四九人、齊々哈爾濱ニ於テハ同シク

一二八人ノ増加ヲ示セリ

(ハ)目下新京地方ニ運轉セラレ居ル常用自動車約二千有ル

處此等ハ建國以來米國ヨリ直接又ハ日本ヲ通シ輸入セラレタルモノニシテ此ノ外英米獨三國ヨリ商社又ハ日滿官憲ノ輸入シタルモノノ内寫眞機、騰寫機、電話機等多額ニ上リ居レリ

(四)若シ日滿官憲カ外國人ノ商業的活動ニ障礙ヲ加ヘ居ルモノトセハ右ノ如キ對滿歐米諸國ノ貿易力増加スルコト有リ得可キヤ又歐米ノ大會社カ新ニ工場設立ヲ目論ミ得可キヤ又外國人ノ來住スル者前記ノ如ク増加スヘキヤ又門戸開放機會均等ニ關スル滿洲國側ノ方針ハ過日ノ聲明書ノ通ナリ

要スルニ具體的事實ヲ指摘スルコト無キ此ノ種非難ハ舊政權ノ沒落ニ伴フ不自然ナル取引ノ終滅ニ因リ自己支店ノ衰勢ヲ本國本店ニ對シ覆ハン爲ノ口實ニ外ナラス曩ニ英國銀行乃至保險會社ニ對スル日滿官憲ノ營業ニ對スル干涉ノ風評ト其ノ軌ヲ一ニスルモノト認ム

(五)本電滿洲國側ト協議濟尙貴電第三七七號ニ付テハ目下爲念調査中ナルモ右不取敢電報スルニ付米等ニ轉電シ然ル可ク利用セシメラレ度シ

支、北平、奉天、天津、哈爾濱ヘ轉電セリ

100 昭和8年5月15日 在奉天峰谷(輝雄)総領事より
内田外務大臣宛(電報)

満州国側におけるニールセン急速救出の困難
なる事情を米國領事に説明について

奉天 5月15日後発
本省 5月15日後着

第一三七號

本官發滿宛電報

第一一五號

往電第九七號ニ關シ

最近米人入質「ニールセン」ノ許ヨリ入質ノ一名タリシ支那人岫巖ニ歸來シ至急身代金ヲ送付セサレハ入質ヲ更ニ奧地ニ連レ行クヘシトノ書狀ヲ携ヘ且「ニ」ハ老齡ト身心ノ疲勞ノ爲痛ク弱リ居ル旨語レル趣ヲ以テ十五日當地米國領事ヨリ何トカ急速救出方重ネテ申出アリタルヲ以テ我守備隊側ニテハ今日迄最善ノ努力ヲ拂ヒ居ルモノナルコトヲ告ケ置キタルモ爲念守備隊司令部側ニ右米國側申出ヲ傳ヘ懇談シタルカ守備隊側ニテハ同地方ノ守備隊ハ匪賊討伐一般治安維持ノ爲重大任務ヲ遂行中ニテ殊ニ高粱^粟繁茂期前速ニ

在滿大使發貴大使宛電報第七号ニ関シ

本件佛國兩銀行及「プロツサール、モパン」社ノ計劃ニ関シテハ曩ニ客年十一月廿四日附機密公第六六三号貴信報告ノ次第アル處「ドリル」滯滿中大橋次長ヨリ「ド」ニ對シ右會社ヲモ「ド」關係「シンヂケート」ニ參加セシムル様勸説シ「ド」モ「モパン」ノ如キハ極東ノ事業ニ經驗深キコトニモアリ之カ參加ニ異議ナキ旨ヲ答ヘタル趣ナルカ其後「ド」ト滿鐵側トノ契約調印後更ニ滿洲國側ヨリ此ノ際「モパン」側ヲ無視シ事業ヲ進ムルトキハ彼等ニ於テ妨害行爲ニ出ツルコト無キヲ保シ難キニ付右參加方更ニ「ド」ニ交渉アリ度旨申出ノ次第モアリタルニ依リ当方ヨリ「ド」ニ對シ右參加實現方勸説シタルカ其ノ際「ド」ハ当省係官ニ對シ「モパン」等モ同ク佛國會社ノコトニモアリ之カ參加方ニ付テハ固ヨリ異存ナキモ今次「ド」ト滿鐵トノ契約ハ当分極秘ニ附スルヲ要スルニ付同人巴里歸着ノ上同地ニ於テ「モパン」側等ト談合スルコトトシ度又「モパン」側ヨリ何等「アプローチ」シ來ルコトト思考スト述ヘタル由ナリ爲念

之ヲ掃蕩スヘキ諸般ノ必要ニ迫ラレ居ルヲ以テ右一般任務許ス最大限度ニ於テ其ノ一部ヲ割キ公安隊警察隊約八十名ヲ督勵シテ過般來人質ヲ擁シ居ル鵬匪ヲ追求中ナルカ之レ以上ハ目下ノ處同守備隊ノ關スル限り手ノ下シ様無シトノコトニテ右ハ事情已ムヲ得サル所ト存シタルヲ以テ其旨直ニ米國領事側ニ申入レ置ケリ尙岫巖出張中ノ米國副領事「ホール」ヨリ自分(ホ)現地出張ノ爲匪賊側ニ却テ脚下ヲ見ラレタル感アルニ付(此ノ點ハ現地ニ於ケル我軍側ニテ當初ヨリ懸念シ居タル所ナリシ由ナリ)歸奉方當地米國領事ヘ電報アリタルヲ以テ軍側ト打合セノ上最近ノ飛行便ニテ歸奉セシムルコトトセリ

大臣、北平、支ヘ轉電シ牛莊ヘ暗送セリ

101 昭和8年5月16日 内田外務大臣より
在仏國長岡大使宛(電報)

對滿投資を希望する仏國モパン社の満州企業組合への参加問題に対するドリル意向について

本省 5月16日後8時30分發

第一〇六號(極秘)

102 昭和8年5月22日 在滿州國武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

石井國際經濟會議全權携帶の満州國門戸開放主義に関する説明資料中の最惠国税率均霑問題への疑義について

新京 5月22日後發
本省 5月22日後着

第五三八號

亞細亞局第三課ニ於テ作成シ參考トシテ石井子爵ニ同課ヨリ提出シタル「滿洲國ニ於ケル門戸開放主義ニ關スル考察」中(三)ノ(イ)關稅上ノ差別待遇問題中滿洲國不承認國ハ日滿間關稅率ノ互惠協定ニ均霑シ得サルコトトナルモ已ムヲ得サルヘキ趣旨記載セラレアル處右ハ從來ノ外務省及滿洲國側ノ方針乃至聲明ノ趣旨ト根本的ニ杆格^格シ居ルモノト認メラルモ本省ニ於テハ右ノ如キ方針ヲ有セラルル次第ナリヤ何分ノ儀御同電アリタシ

米ニ轉電セリ

昭和8年5月24日 内田外務大臣より
在米国出淵大使宛(電報)

石井國際經濟會議全權携帶資料中の満州国税
率均霑問題に関する解釈について

本省 5月24日後9時12分發

第一三六号

満宛第四一七号(二十四日后)

貴電第五五八号ニ関シ

係官ニ付取調ヘタル処大要左ノ通

一、本件調書ハ滿洲國ニ於テ門戸開放機會均等主義カ如何ナル程度迄實行セラレ又如何ナル程度迄新ナル事態ニヨリ制約ヲ受クヘキヤニ関スル實狀ヲ其儘記載セル「レジュメ」ニシテ(機密扱)石井子爵出發ノ際參考資料ノ一トシテ隨員ノ携行セルモノヲ當省係官ヨリ貴館々員執務上ノ便宜ニ供スル爲送附セルモノナリ

二、右調書中「……日滿間ニ互惠協定ノ如キモノ締結セラレ然モ日本以外ノ外國ニ於テ滿洲國ヲ承認セス右日滿間ノ互惠協定ニ均霑スルノ方法ヲ講セサル場合ニハ日本品ニ比シ差別待遇ヲ受クルモ已ムヲ得サルヘシ」トアルハ過般關係

省ノ間ニ協議決定セル「滿洲國關稅一般方策ニ関スル要綱」(機密扱)(四月二十八日附通一機密第一七一号公信参照)ノ

(二)ニ「滿洲國關稅ハ最低稅率ニヨルヲ原則トスルモ我國トノ間ニハ特定品ニ對スル關稅率ヲ協定シ(中略)万一我國以外ノ外國トノ間ニ稅率ノ協定ヲ爲スカ如キ場合ニ於テモ我國トノ協定稅率ニ付テハ無條件ニテ之ヲ外國ニ均霑セシメサルコト、ス」トアル趣旨ニ外ナラス

尙右「要綱」作成ノ經緯及之カ取扱振リニ関シテハ前記關係省協議會ニ出席セル貴館々員ニ於テ承知ノ筈ナル本件要綱(二)ノ趣旨ハ滿洲國トシテハ今後最惠國待遇ニ付有條件均霑主義ヲ採ルノ建前ニ出ツルコト諸般ノ關係上得策ナリト認メタルニヨル次第ナリ委細公信

米ヘ轉電セリ

104

昭和8年5月26日 在滿州国武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

石井國際經濟會議全權携帶資料中の満州国税
率均霑問題に関する解釈をめぐり意見具申

新京 5月26日後發
本省 5月26日後着

第五六六號

貴電第四一七號ニ關シ

(一)日本以外ノ列國カ滿洲國ヲ承認セサル間ニ於テ之等列國ニ對シ滿洲國ヲシテ門戸開放機會均等々ノ方針ヲ以テ臨マシメ承認國タル本邦ト未承認國タル列國トノ間ニ關稅率ニ關シテモ差別待遇ヲ爲サシメサル御方針ナルハ最近貴電第三四四號御訓令ニ依ルモ疑ノ餘地無ク又滿洲國自身モ此ノ方針ナルハ建國ノ際ノ宣言列國政府ニ對スル通告文並ニ外交部數次ノ聲明(往電第四五六號)ニ依ルモ疑問ノ餘地無シ

(二)次ニ「滿洲國關稅一般方策ニ關スル要綱」ノ二ハ前記(一)記載ノ日本以外ノ列國カ未承認國タル間ニ於ケル關稅上ノ關係ヲ律セントスルモノニアラスシテ外國カ承認國トナリタル後又ハナラントスル場合ニ當該外國カ滿洲國ト關稅協定ヲ爲スニ當リ滿洲國ヲシテ之トノ協定ニ於テ有條件均霑主義ヲ執ラシメントスル趣旨ナルコトハ前示要綱ノ二ノ立案セラレタル經緯及當館員ノ出席セル貴地各

省協議會ニ於ケル討議振ニ徴スルモ將又理論上ヨリスル

モ極メテ明瞭ナリ要スルニ前記要綱ノ二ハ稍遠キ將來ニ

對處スヘキ方針ヲ定メタルモノナリ

而シテ前項(一)及(二)ニシテ誤無キ以上貴電第四一七號ハ係官ニ於テ現時ノ如ク列國ノ未承認時代ニ對處ス可キ方針ト將來列國カ承認國トナリタル曉ニ對處ス可キ方針トヲ穿違ヘ前者ニ對シ後者ニ對スル方針ヲ以テ説明シタルモノナリト解スルノ外無ク右調書(三)ノ(ハ)ノ如キ書振リヲ爲ス時ハ事態ニ通セサル者ニ執リテハ現在承認國タル日本ト未承認國タル列國トノ間ニ關稅上ノ差別待遇アリトモ已ムヲ得ストスルノ趣旨ニ解セラルル處有ル可シ

過般駒井參議ノ「インターヴュー」ニテモ少ナカラス海外ニ不良ノ反響ヲ與ヘ貴電第三四四號ノ御訓令アリタル次第ニテ本件調書ハ係官限りノ意見ニテ又機密取扱ナルモ石井代表一行ノ携行セル以上之ニ依リ海外ニ説明セラルル事無キヲ保セス再ヒ駒井參議ノ場合ニ勝ル誤解ヲ惹起スルヤヲ虞ルルニ付然ル可ク御訂正方御配慮ヲ希望ス

石井代表既ニ華府到着ノ趣ナルニ付御郵送アル可キ貴信ヲ俟タス不取敢右電報スル次第ナリ御諒承ヲ請フ

米へ轉電セリ

105 昭和8年5月29日

内田外務大臣より
在仏国長岡大使宛(電報)

滿州企業組合設立に関するドリル側準備状況

調査方訓令

本省 5月29日後7時30分発

第一一〇號(極秘)

本大臣発在滿大使宛電報第一三八号ニ関シ
滿洲企業組合設立ニ関スル滿鉄側ト「ドリル」トノ契約ニ
拠レハ五月四日ヲ以テ第一回出資期日ト定メアル處、右期
日モ既ニ経過セル一方、在滿大使發貴官宛電報第七号「ブ
ロツサール、モパン」側トノ關係モアリ少クトモ本件企業
組合設立ニ関スル佛國「シンジケート」側ノ準備進捗程度
等至急承知シ度ニ付右御取調ノ上結果回電アリ度
在滿大使ニ轉電セリ

106 昭和8年6月1日

在仏国長岡大使より
内田外務大臣宛(電報)

ドリル側財団の組合幹部構成をめぐる内紛お
よびモパン社参加問題に関するインドシナ銀
行重役の談話について

パリ 6月1日後発
本省 6月2日前着

第二五四號(極秘)

貴電第一一〇號ニ關シ

一、佛國側ハ五月五日第一回拂込ヲ了シ又同二十二日 le
chemin de fer du nord の Moyrand 氏 vice president ニ
選任シ其ノ旨各五月八日及同二十六日滿鐵宛電報濟ノ趣ナリ
二、佛國組合側ノ準備ニ付テハ其ノ後幹部ノ構成ニ付組合員
ノ利害相反シテ意見一致セス延ヒテ或ハ組合ノ内容改造ノ
必要アルヤノ趣ニテ相當紛糾ヲ來シ居ル様子ナリ當館トシ
テハ甚タ心外ニ存シ居ルモ速ニ組合ヲ健全ナル基礎ノ上ニ
置キ一日モ早く仕事ニ着手スルニ非サレハ滿洲國側トシテ
モ差迫レル仕事ハ或ハ他ノ團體ニ引受ケシメサルヲ得サル
ニ至ルヘキ旨警告ヲ與ヘツツアル次第ナリ
三、駐滿大使來電第七號「ブロツサール、モパン」トノ問題
ニ付テハ五月十八日印度支那銀行重役會長「ド、ラ、シヨ

二 滿州国をめぐる列国との関係

ーム」氏當館ニ來訪ノ上「ブ」側ヨリ滿洲事業ニ付報告ノ
次第アル處一方滿洲企業組合ナルモノ成立ノ報道モアルニ
付テハ果シテ「ブ」側ヲ援助シ差支ナキモノナリヤ大使館
ノ意嚮ヲ承知シ度旨申出アリ當方ヨリ組合成立ノ今日ナレ
ハ印支銀行モ之ニ合流シ得レハ甚タ結構ト思ハルルニ付一
應右組合ノ佛國側關係者ト談合セラルルコトヲ希望スル旨
答ヘ置キタリ

越⁽²⁾ヘテ五月三十一日其ノ結果ヲ確メシメタル處「ド、ラ、
シヨーム」氏ハ實ハ大使館ノ御注意ニ基キ組合側ニ接觸ヲ
試ミタルモ未タ其ノ代表者ト會見不能ニテ一方 Banque
de Paris et des Pays-Bas 側ヨリ聞ク處ニ依レハ組合ハ目
下内訌ヲ生シ居ルヤノ噂アル趣ニ付其ノ成行ヲ靜觀シ居レ
リ然レトモ話合着クニ於テハ印支銀行トシテモ何時ニテモ
参加スヘク將又哈爾濱水道若ハ羅津港灣事業投資ヲ要スル
モノニテ「ブロツサール」側トノ話合進ムニ於テハ條件次第
ニテハ「ブ」側ヲ援助スル事モ考ヘ居レリト答ヘタル趣ナリ
四、右ノ如キ事情ニ付組合カ事業ニ着手シ得ル迄ニハ尙ホ多
少ノ時日ヲ要スヘキニ依リ現地ノ事情ニ顧ミ「ブ」側ヲシ
テ組合トハ獨立シテ速ニ事業ヲ引受ケシメラルル事必要ナ

ルニ於テハ其ノ話合ヲ進メシメラルル事モ一策ナリト認ム
滿へ轉電アリ度シ

107 昭和8年6月10日

内田外務大臣より
在滿州国武藤大使宛(電報)

ニールセン急速救出のため我が方尽力方米國

政府要請について

本省 6月10日後6時40分発

第四七七號

奉天發貴大使宛電報第一七〇號ニ關シ

本十日米國大使館員係官ヲ來訪シ米國政府ハ「ニールセン」
ノ安全ニ重大ノ関心ヲ有シ日本政府ニ於テ全人ノ迅速救出
ヲ見ル様充分盡力アラムコトヲ望ム旨申出テタルヲ以テ係
官ヨリ斯種救出事業ノ困難ヲ述ヘタル上本件ニ関シ滿洲國
側及之ニ協力スル關東軍等ニ於テ種々努力ヲ重ネ來レルコ
ト御承知ノ通ナルカ御申越ノ趣ハ早速關係ノ向ヘ傳フヘキ
旨告ケ置キタル趣ナルニ付可然御取計相成度

奉天、安東ニ轉電アリタシ

支、北平へ轉電セリ

昭和8年6月13日 内田外務大臣より
在満洲国武藤大使宛

満洲国作成による同国事情紹介映画「新興満洲
国ノ全貌」の対外啓発への利用方法について

報二普通第二三一號

昭和八年六月拾參日

外務大臣伯爵 内田 康哉

在満洲国

特命全權大使 武藤 信義殿

満洲国作成対外啓発用映画ニ関スル件

先般満洲国總務庁情報處ニ於テ滿鉄ニ依頼シ満洲事情啓発
用トシテ「新興満洲国ノ全貌」ト題シ全五巻ヨリナル映画
ヲ作成シ近ク之ヲ欧米各国ニ配布方計畫シ居ル趣ノ処右配
布計畫ニ付テハ貴方ニ於テ相談ニ乗ラレ要スレバ我カ方在外
公館ノ協力其ノ他ノ方法ニ依リ利用上十分ノ效果ヲ擧グ
ル様特ニ御配慮相煩度爲念申進ス

尙「リットン」委員会渡満ノ際作成セル「フィルム」ハ当
時壽府ニ於テ短縮編輯シ直シタル上「コピー」作成欧米諸
国ニ送付シ極メテ好結果ヲ擧ゲタル次第アリ御承知トハ存

適用ニ關スル大使館通商課ノ考察

一、專賣制度ニ關連シ門戸開放、機會均等ノ主義ノ適用ニ關
スル満洲國ノ義務

満洲國ハ其ノ建國ノ宣言ニ於テ門戸開放、機會均等ノ主
義ヲ嚴守シ外國人ニ依ル満洲國資源開發、通商貿易ノ増
進ニ對シテハ常ニ之ヲ歡迎スル旨及ヒ前記方針ヲ嚴守ス
ル上ニ於テ政府ハ充分ノ責任ヲ負フヘク三千萬民衆ニ對
シテ其ノ誓ヲナス可キ旨宣言シタリ又三月十二日謝外交
總長カ満洲國內ニ領事ヲ有スル十七ヶ國及其他三十五ヶ
國ノ外務大臣ニ對シ送りタル獨立通告書ニ於テハ満洲國
ハ國際法及國際慣例ノ示ス處ニ從ヒ中華民國カ條約ニ依
リ負擔セル義務ハ其儘繼承ス可キコト及滿洲國內ニ於ケ
ル外國人ノ經濟的活動ニ對シテハ門戸開放主義ヲ嚴守ス
可キ旨通告シタリ前記建國ノ宣言及外交總長ノ通告ハ其
ノ性質ニ於テハ單ニ満洲國ノ一方的宣言ニシテ條約ノ如
ク満洲國ニ對シ之ヲ嚴守ス可キ法律上ノ義務ヲ負擔セシ
ムルモノニ非サルモ其ノ宣言ヲ撤回セサル限り満洲國ハ
尠クトモ道德的ニハ之ヲ嚴守スヘキ義務アルモノト言ハ
サル可カラス其後満洲國政府ノ名ニ於テ本件ニ關シ特別

ズルモ申添フ

尚又「シカゴ」博覽會ニハ「フィルム」利用ノ機會多キ趣ナリ

109 昭和8年6月21日

在満洲国武藤大使より
内田外務大臣宛

満洲国專賣制度との關連で門戸開放主義適用問
題を研究した大使館作成調書の送付について

公機密第五七二號

(接受日不明)

昭和八年六月二十一日

在満洲國

特命全權大使 武藤 信義

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

満洲國專賣制度ニ關スル係官ノ研究送付ニ關スル件

本年六月十五日附公機密第五四七號末段ニ於テ申進メ置キ
タル満洲國專賣制度ニ關スル當館係官ノ研究何等御參考迄
別添送付ス

本信寫送付先 在支公使、在奉天、哈爾濱各公館長

專賣制度ニ關連シ満洲國ノ門戸開放、機會均等主義ノ

ノ意思表示アリタルコト無シ唯五月初旬満洲國駒井參議
カ新聞記者ニ與ヘタル「インタヴュー」ニ於テ満洲國
ヲ承認セサル國ニ對シテハ門戸開放、機會均等ヲ實施セ
サルカ如キ意見ヲ表明シ外國ニ於テ相當反響アリタル事
例アルノミ。而モ其際ニ於テハ帝國政府ハ直チニ之カ取
消ヲナサシムルコトニ方針ヲ決セラレ之ニ基キ満洲國政
府ニ於テハ再ヒ其ノ建國ノ宣言、外交總長ノ通告ノ趣旨
ヲ變更スルノ意思ナキコトヲ聲明シタル次第ナリ今前記
満洲國ノ宣言セル國是ヲ解剖スルニ謝外交總長通告文第
三項即チ中華民國ノ條約上ノ義務ヲ繼承スルモノトセハ
中華民國カ一八五八年佛支天津條約第十四條ニ於テ中華
民國カ諸外國ニ對シテ負ヘル義務即チ中華民國領土内ニ
於テハ如何ナル特權アル商會社モ之カ設立ヲ許與スル
コト無カルヘク又中華民國官憲ハ自由競争ヲ阻害ス可キ
一切ノ事情ヲ除去スルカ爲努力ス可キコトヲ約束セル義
務及一八四四年米支望厦條約第十五條ニ於テ「輸出入品
ノ購賣若クハ販賣ニ從事スル合衆國人民ハ專賣其他ノ有
害ナル束縛ニ依リテ其ノ業務ヲ妨害セラルコト無シ」
ト規定セルヨリ生スル中華民國ノ義務及中華民國ト他ノ

若クハ地方官憲ト共同經營スル權利ヲ他國ノ國民ヨリ奪
フカ如キ獨占權又ハ優先權」ヲ要求スルコト無カル可ク
各自國民ノ之ヲ要求スルコトヲ支持セサル可キコトヲ規
定シ居レリ若シ滿洲國政府ニシテ其ノ專賣ヲ政府自ラ之
ヲ行フ場合ニハ前記佛支條約、米支條約ニ基ク滿洲國政
府ノ責任以外日本政府ノ關與スルコトコトニ非サルカ如キ
モ若シ其ノ專賣ヲ日本ノ特權會社等ヲシテ實行セシメ其
ノ特權會社ノ性質カ開放のナラサル場合(即チ其ノ職員
カ滿洲國人以外日本人ノミナル場合等)ニハ日本政府ノ
責任ヲ生スルコトナル可シ更ニ又諸外國ヨリ之ヲ見レ
ハ滿洲國ハ日本帝國ノ勢力下即チ或ル意味ニ於ケル「ス
ワイヤ、オブ、インフルエンス」ヲ構成スルモノトモ見
ラレ(滿洲國ハ日滿議定書ニ於テハ或ル程度ノ防守同盟
ヲ結ヒ其ノ領土内ニ日本帝國ノ軍隊ヲ駐在セシムルコト
ヲ認メ居ルノミニシテ兩國ノ關係ハ在來ノ國際慣例上新
規ノモノト認メラル)門戶開放、機會均等主義カ「エイ」
國務卿ニヨリ提唱セラレタル經緯ヨリ見ルニ租借地及勢
力範圍内ニ於テ排他的處置ノ講セラルルコトヲ防カムト
スル趣旨ヨリ出テタルニモ鑑ミ滿洲國內ニ於テ日本帝國

諸國トノ間ニアル最惠國待遇ヨリ生スル其他ノ諸國ニ對
スル中華民國ノ同様ノ義務ヲ滿洲國モ當然之ヲ繼承セル
モノト言ハサルヘカラス更ニ滿洲國カ建國宣言ニ於テ聲
明シタル門戶開放、機會均等ノ主義ヲ嚴守ス可キ義務ナ
ルモノハ極メテ抽象的ニシテ其ノ内容ハ漠然タルカ如キ
モ現時門戶開放、機會均等ニ付最モ明確ナル定義ヲ與ヘ
居ル支那ニ關スル九國條約第三條前段ニ於テ記載セラレ
タルカ如キ事項ノ實現ヲ防止スル爲同條約第三條後段ニ
於テ中華民國カ負ヘル義務ヲ滿洲國ニ於テ繼承セルモノ
ト解釋ス可キナリ若シ滿洲國ノ前記義務ニシテ有效ナル
モノトスレハ專賣制度ナルモノハ假令滿洲國ニ於テ條約
違反トハナラサルモ(滿洲國ヲ承認セルハ帝國ノミナル
ヲ以テ嚴格ナル意味ニ於ケル條約違反ハ帝國ニ對シテノ
ミ存在シ得ル譯ナリ)尠クトモ建國ノ宣言等ニ依リ滿洲
國カ他國ニ對シ負ヘル道德上ノ義務ニ違反スルモノト結
論セサル可カラス

三、滿洲國政府ノ專賣制度實施ニ關連スル帝國政府ノ諸外國
ニ對スル義務
滿洲國カ支那内部ノ崩壞ニヨリ自發的ニ成立シ其ノ成立

ニ對シテハ帝國政府ハ何等關與スル處無シ即チ滿洲國ノ
獨立ニ關シテハ日本帝國ハ九國條約第一條ニ違反スルコ
ト無シ又前記自發的ニ發生シタル滿洲國ヲ帝國カ之ヲ承
認シ帝國ノ關スル限り滿洲國カ支那ト別個ノ獨立國トナ
リタル以上滿洲國ニ對シテハ九國條約ハ適用セラレス即
チ滿洲國ニ關スル限り帝國ハ九國條約ヲ遵守ス可キ義務
ヨリ解除セラレタルモノナリトノ議論モ立チ得ヘキモ尠
クトモ九國條約ノ他ノ締約國カ此議論ニ贊同セサル限り
又滿洲國成立前滿洲ナル地域ニ對シ門戶開放、機會均等
ノ主義ヲ實施スルコトニ帝國カ屢次贊同シタル行懸リ上
更ニ又帝國ノ根本政策トシテ門戶開放、機會均等ヲ滿洲
國ニ適用スルコトカ正當ナリト云フ建前ヲ維持セラルル
限り(前記駒井參議「インターヴュー」事件ニ對スル處置
振りヨリ見ルモ明カナリ)條約上ハ兎モ角トシ尠クトモ
道德上諸外國ニ對シテ九國條約規定ノ義務ヲ滿洲國ニ關
シテモ諸外國ニ對シテ負ヘルモノト言ヒ得ヘシ其ノ義務
ナルモノハ九國條約第三條ニ於テ明カニ規定セラレ同條
(ロ)ニ於テハ「支那ニ於テ適法ナル商業又ハ工業ヲ營ムノ
權利又ハ公共企業ヲ其ノ種類ノ如何ヲ問ハス支那國政府

ハ排他的處置ノ講セラルルコトヲ防ク可キ義務ヲ負擔シ
居ルモノト言ヒ得ル次第ナリ
前記滿洲國及帝國ノ義務ナルモノハ何レモ條約上ノ根據
ニ基ク明確ナル法律の性質ノモノトイフヨリハ寧ロ道德
的ノモノ即チ日滿兩國ノ主張ト諸外國ノ主張トノ間ニハ
相當ノ開キヲ當分繼續シ然モ法律的ニ解決スルノ方法ナ
キ(日本以外ノ利害關係國カ滿洲國ヲ承認スル迄ノ間ヲ
意味ス)性質ノモノニシテ必スシモ現在之ニ絕對的ニ束
縛セラルルモノトハ言ヒ難シ然レ共若シ諸外國ノ側ヨリ
見テ條約違反又ハ門戶開放、機會均等ノ主義ニ違反スル
モノト認メラルルカ如キ處置即チ專賣制度ノ如キモノカ
滿洲ニ於テ實行セラルル場合ニハ必スヤ諸外國政府ハ之
ヲ重要視シ假令條約違反ナリトシテ(コノ場合ニ於ケル
相手國ハ中華民國及ヒ日本ナルヘシ)正式ニ抗議ヲ申込
マサルモ輿論殊ニ諸新聞ハ必スヤ滿洲ノ門戶ハ閉鎖セラ
レタリ等種々非難ノ聲ヲ高クスルモノト想像セラレ現ニ
駒井參議意見發表ノ際ニ於テモ各國一流新聞カ非難的論
說ヲ掲ケ又ハ英國議院ニ於テ質問カ發セラレ「ボールド
ウイン」樞府議長カ其ノ影響ノ重大ナルコトヲ答辯シタ

110

昭和8年6月22日 在米出淵大使より
内田外務大臣宛(電報)

昭和製鋼所の外国製品購入に関し宣伝的效果
の観点から米商への配慮方意見具申

中央集權ノ下ニ自ラ自己ヲ守ルノ能力ヲ有シ居リ何時迄モ
非友誼的國家ニ對シ自國ノ現狀ニ即セス又世界ノ現實ノ
狀況ニ適合セサル主義ヲ自發的ニ實行シ自繩自縛、其ノ
産業開發ニ支障ヲ來シテ迄之ヲ守ルノ必要アリヤ否ヤハ
更ニ檢討スルノ要アルニ非サヤトモ考ヘラル即チ國際情
勢ヲ觀察シ建國三、四年ノ頃ヲ見計ヒ前記滿洲國ノ立場
ヲ卒直ニ説明シタル後滿洲國ニ對シテ友誼的關係ニア
ル(滿洲國ヲ政治的ニ承認セル國、政治的ニ承認セサルモ
滿洲國ニ對シテ友誼的態度ヲ保チ居ル國)ト非友誼的國
家(例ヘハ聯盟ニ於テ討議シ居レル滿洲國「ボイコット」
ノ主義ニ賛成シ之ヲ實行ニ着手スルカ如キ國)トヲ區別
シ尠ク共滿洲國ヲ承認スル國ニ對シテハ最惠國待遇ヲ許
與スヘキモ然ラサル國ニ對シテハ相互主義ノ立場ニ於テ進
ム様國策ヲ變更スルノ必要招來スルニ非サヤト思考セラル

111

昭和8年6月26日 在仏國長岡大使より
内田外務大臣宛(電報)

仏國對滿投資問題は我が方連盟脱退後政治的
効果が薄れたためドリル側財団を内紛解消ま

第五八六號
曩ニ昭和製鋼所ヘノ「ローリング、ミル」賣込ノ爲渡日セ
ル Charles Michie ヨリ製鋼所側ニテ獨逸製品ニ重キヲ
置ク爲困難アル事情ヲ申越シタル處技術的關係乃至商談ノ
内容如何ハ別トシ今日ノ場合同人ノ代表スル如キ米國ニ於
ケル大會社製品ノ賣込成就スルコトハ滿洲國方面ノ開發ニ
米國側ノ利益均霑ノ好適例トシテ一般ニ好影響アルヘシト
察セラルルニ付製鋼側ニ於テモ此ノ點考慮ヲ拂フ様可然御
配慮ヲ請フ
(欄外記入)
事情返電ノコト

ワシントン 6月22日後発
本省 6月23日前着

ルニモ鑑ミ極メテ明瞭ナリト思考セラル他面滿洲國政府
ハ建國以來王道政治ナルモノヲソノ「モットー」トシ來
リタル建前上專賣セラルル物資ノ性質上或ハ民衆ノ一般
福利ト背馳スルカ如キコト無キニシモ非ラス滿洲國ノ善
政ヲ諸外國ニ諒知セシメ其ノ健全ナル發達ヲ如實ニ知ラ
シメ以テ徐ロニ諸外國カ滿洲國ヲ承認スルノ氣運ニ導カ
ムトスル方針ハ日滿兩國ニ於ケル嚴然タル根本國策ナル
ヤニ認メラルルニモ不拘之ニ背馳スルカ如キ處置ヲ執リ
建國日尙淺キ滿洲國ヲシテ其ノ方針ヲ誤ラシムルカ如キ
ハ滿洲國指導ノ地位ニ在ル日本帝國トシテ充分考慮スル
ノ必要アリト認メラル

之ヲ要スルニ專賣ノ實施ハ法律的ニハ結局佛支條約、米
支條約ニヨル滿洲國ノ義務ニ歸スルモノナルモ道德上ハ
日滿兩國共種々ノ支障アルヤニ認メラレ更ニ政策上ヨリ
之ヲ見ル時ハ諸外國ニ於ケル反響及之ニ伴フ日滿兩國ノ
國際的地位等ヲモ考慮ニ容ルルノ要アリ
勿論過去ニ於テモ中華民國カ條約ニ違反シテ專賣ヲ行ヒ
之ヲ他國カ默過シタル事例無キニ非ラス又滿洲國ノ國防
上絕對ニ必要ニシテ又例ヘハ石油ノ如ク其ノ開發ニ巨大

ノ資本ヲ要シ其ノ資本獲得ノ方法トシテ專賣ノ外收入ノ
方法無キモノ即チ産業開發上絕對ニ必要ナリト認メラ
ルモノニ付テハ其ノ方面ヨリ説明ノ方法モ立チ得ヘキカ
トモ思考セラル又專賣スル物ノ種類其ノ方法ニ依リ影響
ノ大小ニ差違アル可ク即チ或ハ石油ノ如ク英米露等ノ特
ニ關心ヲ有スルモノニアリテハ其ノ影響ヲ充分研究スル
ノ要アリ又政府自ラ專賣ヲ行フ場合ハ特殊會社ヲシテ之ヲ
行ハシムル場合ニ比シ其ノ影響尠カル可シトモ想像セラル
結局專賣ヲ行フカ否カノ問題ハ日滿兩國政府ノ「腹ノ問
題」ニシテ門戸開放、機會均等ト言フモ元々滿洲國自身
ノ聲明(帝國政府ハ之ヲ支持シ來レリ)ニ過キス而カモ今
日迄滿洲國ハ忠實ニ之ヲ實行シ來リタルニ非サヤ然ルニ
諸外國ハ啻ニ滿洲國ヲ承認セサルノミナラス常ニ滿洲國
ヲ白眼視シ現ニ壽府ニ於テハ滿洲國「ボイコット」ノ方
策ヲ研究シ居ルヤニモ傳ヘラレ更ニ現時ノ世界各國ノ對
外經濟政策ヲ看ルニ開放的ヨリ益々排他的ニ進ミツツア
リ此ノ時世ニ於テハ他國ノ蠶食ヲ防止シ得サル無秩序ナ
ル中華民國ノ如キ國ニ於テコソ門戸開放、機會均等モ必
スシモ時代晩レナラサル可キモ現ニ滿洲國ハ嚴然タル中

で相手としない方針について

付記 六月二十九日付、亜細亜局第三課作成

「哈爾濱市水道計劃ニ關スル件」

パリ 6月26日後発

本省 6月27日前着

第二八九號(極秘)

往電第二五四號及第二六九號ニ關シ

佛「サンヂカ」側ヨリ「ド、フール」ノ署名ヲ以テ、
Presidentトシテ「モアラン」及其ノ他ノ役員選任ノ通知アリタルハ冒頭往電ヲ以テ報告ノ通りナル處之ヨリ先「ドリル」ハ「モアラン」ニテハ滿鐵ト對立セシムルニ足ラスト爲シ單獨ニテ斡旋ノ結果「アバス」通信社重役會長「レオンレニエ」ニ於テ「サンヂカ」引受方内諾ヲ取付ケタル趣ニテ五月二十二日「モアラン」ヲ選任シタル「サンヂカ」會合ニ於テ「レニエ」引入ノ件ヲ突然披露シタルモ多數決ニテ「モアラン」選舉セラレシ以來「ドリル」歸巴後兎角面白カラサリシ「ドリル」「ドフール」ノ關係全ク疎隔スルニ至リタル様子アリ此ノ間双方ヨリ當館ニ對シ別々ニ他方ニ對スル不平ヲ述ヘ來リ居リシモ當館トシテハ組合ノ内訌

ニ付何等裁斷ヲ與フル立場ニ在ラサル旨ヲ述フルト共ニ切ニ双方ノ間ニ自發的ニ妥協點ヲ見出サンコトヲ望ム旨及「モアラン」「レニエ」兩氏ノ會見ニ依リ大局的見地ヨリ兩氏ノ間ニ了解成立スル様取運フコト然ルヘキ旨勸告シ置キタルニ拘ラス其ノ交渉モ未タ成果ヲ見サル模様ナリシカ十九日ニ至リ「ドリル」ヨリ

佛「サンヂカ」内ニ面白カラサル人物アリ之ヲ除キ組合ノ財政的政治的背景ヲ強ムル爲「レニエ」ヲシテ組合ノ「パトロナージュ」ヲ取ラシムルコトト爲シタルカ本使ニ於テ所謂面白カラサル人物ヲシテ組合ノ事業ヲ行ハシムルコトヲ望ムニ於テハ「ド」ハ其ノ意ニ從フノ外ナシトノ意味ノ書面ヲ送り來レリ

依テ二十日「ド」「デ」兩人ヲ當館ニ招キ澤田參事官ヨリ當館トシテハ「サンヂカ」設立當初提出ノ書類ニ從ヒ今日迄兩氏ヲ對等ノ佛組合代表者トシテ取扱ヒ來リタルニ今双方ヨリ全然矛盾セル通知ニ接シ何レカ組合ノ意志ナリヤヲ決スルニ苦シム立場ニ置カルルカ如キハ甚タ遺憾ニ耐エス當館トシテハ「サンヂカ」内部ノ紛糾一掃セラレ速ニ組合カ事業ヲ開始シ得ルニ至ルコトヲ切望スルモ假令「サンヂカ」

内部ニ妥協成立スルモ滿鐵カ佛組合内ノ最近ノ面白カラサル經緯ニ關スル報告接手ノ結果如何ナル決定ヲ爲スカハ其ノ自由ナル處ニ了解アリタキ旨ヲ言渡シ置キタルカ更ニ右言渡ノ趣旨ヲ書翰ニ認メ二十三日附ヲ以テ右兩人ニ夫々通告シ置キタリ

何レ委細ハ公信ニテ報告スヘキモ右様ノ次第二テ當方トシテハ折角滿鐵トノ間ニ契約成立シタルコトナレハ是非共有効ニ活動セシメタシト存シ其ノ趣旨ニテ側面ヨリ妥協促進方勸告シ來リタル次第ナル處抑々客年本件話合ノ當初ニ於テハ聯盟トノ關係頗ル機微ナリシ爲出來得ル限り滿洲國ノ立場ヲ有利ニ導ク見地ヨリ該「サンヂカ」ノ内容充分ナラサリシモ當初事業ノ目論見ニモ鑑ミ之ヲ推舉セル次第ナルカ聯盟脱退後ノ今日トナリテハ寧ロ事業本位ニ考量シ政治的果實ハ其ノ副産物トシテ收納スヘキモノト思ハレ旁事業着手前ヨリ斯ル内紛ヲ生スル様ニテハ其ノ前途モ危マルルヲ以テ他ノ佛國企業團ノ希望アラハ廣ク之ヲモ包含セシムルコトトシ今後「モアラン」ト「レニエ」トノ妥協力如何ナル形ニテ成立スルカノ見据付ク迄本件「サンヂカ」ヲ相手トセヌ方針ニ出ツルコト然ルヘシト認ム

尙滿鐵側ヨリハ當地坂本ニ對シ前顯佛側選任ノ役員ノ地位人物内探方訓令シ來リタル趣ナルニ付テハ滿鐵側ニ對シテモ本電ノ次第然ルヘク御通報アリタク今後ノ處置振ニ付テハ當方ヨリノ意見ヲ待タシムル様致サレタシ

(付記)

(昭和八年六月廿九日)

哈爾濱市水道計劃ニ關スル件

本件ニ關シ六月二十九日滿洲國大橋外交部次長ノ柳井亞細亞局第三課長ニ對スル談話要領左ノ通

「ドリル」關係財團ニ關シテハ在佛長岡大使發大臣宛電報ノ如ク同財團内部ニ紛爭生シ居ル次第モアリ「ドリル」側ノ爲何時迄モ引張ラルルカ如キハ面白カラス此ノ際英米ノ資本家ヲモ引入レ open bidding ヲ行ハシムルコト適切ナルヘシト思考シ居ル次第ナリ實ハ本日米國大使館參事官「ネヴィル」ト會見ノ際哈爾濱水道工事ヲ持出シ兎ニ角一應 Foundation Co. ヲシテ prospectus ヲ提出セシムルコト可然旨樣勸説シタル處「ネヴィル」ハ早速之ヲ本國ニ電報スル旨申居リタルカ一方 Dorman Long & Co. ノ Frank

Freeman ニ對シテモ「エドワーズ」ヲ通シ同様勸説スル所存ニテ又印度支那銀行ト關係アル Boisorion d'Ollivier ニ對シテモ右ト同一ノ方針ニテ應酬スヘシ尙支那外債ノ滿洲國側負擔分ニ對スル積立金ハ National City Bank ニ預入ルコトニ取計中ナリ

112 昭和8年7月3日 内田外務大臣より
在滿洲國武藤大使宛(電報)

滿洲國石油輸入關稅率の区分方法に差別的待遇ありとの在本邦米國大使館よりの抗議につき事情調査方訓令

本省 7月3日發

第五四四號

在本邦米國大使館ヨリ滿洲國稅關ニ於テハ日本ヨリノ燈火油(Kerosene oil)ニ對シテハ輕油(Light oil)トシテ稅番五〇六ヲ適用シ從價一割二分五厘ヲ賦課シ其稅額十「ガロン」ニ付銀五十仙ナルニ拘ラス右日本產ノモノヨリモ比重高キ「ソコニー、バキウム」會社外三外國會社ノ燈火油ニ對シテハ稅番四九五ヲ適用シ稅額約銀二弗八十九仙ヲ徵收シ居

リ其間ノ稅關側ノ取扱ハ極メテ不公平ナル旨當業者ヨリ陳情アリタル趣申出アリ就テハ同大使ヘ回答ノ都合モアルニ付本件ニ關スル滿洲國稅關ノ取扱振リノ実情至急御取調結果同電アリタシ
關東長官ヘ轉電セリ

113 昭和8年7月7日 内田外務大臣より
在スウェーデン山口(光)公使館事務取扱宛(電報)

ニールセン救出への我が方尽力方につき在本邦デンマーク代理公使要請について

本省 7月7日後8時30分發

第三七號

五日在本邦丁抹代理公使ハ谷亜細亞局長ヲ來訪シ本年四月匪賊ニ依リ拉去セラレタル滿洲國奉天省岫巖(Hsiao yen)宣教師「エヌ、ニールセン」(同人ハ元丁抹人ニシテ米國ニ歸化セルモノ)ノ救出ニ關シ日本政府ニ於テ盡力アリタキ旨申出テタルヲ以テ同局長ハ斯種救出作業ノ極メテ困難ナルコト、之ニ拘ラス滿洲國當該官憲及全國ノ治安維持ニ協

滿洲國石油輸入關稅率の区分方法について

新 京 7月10日後發
本 省 7月10日後着

第七三四號

貴電第五四四號ニ關シ

財政部ニ付調査ノ結果左ノ通

燈油(稅番四九五)及輕油(稅番五〇六)ヲ區別スル標準トシテハ從來稅關ニ於テハ比重三九ヲ以テセシカ前者ノ稅率ハ後者ノ夫レニ比シ著シク高率ナル爲昨年未頃ヨリ比重ニ於テハ輕油ニ分類セラルヘキ燈油ノ分溜礦油ヲ輸入スル者増加シ來レル處此ノ種ノ礦油ハ前記比重區別法ヲ適用スルトキハ稅番五〇六ニ依ル一般石油ニ比シ遙ニ低率ナル輸入稅ヲ課セラレ而モ其ノ用途ハ石油ト同一ナルヲ以テ稅番四九五ニ依ル申請ノ石油トノ間ニ均衡ヲ失スルモノアリ茲ニ於テ燈油ニ「照明用ニ供スル礦物性成油」ナル定義ヲ與フルコトトシ本年一月十四日ヨリ從來ノ比重區別法ヲ廢シ燃燒試驗(Burning test)ニ改メ該試驗ニ依リ燈用ニ適スルモノヲ燈油、然ラサルモノヲ輕油ニ分類スルコトニ改メ繼續今日ニ至レリ唯本分類法改正以前ニ滿洲國ニ輸入ノ目的ヲ以

二 滿洲國をめぐる列國との關係

114 昭和8年7月10日 在滿洲國武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

カスルノ立場ニアル在滿日本官憲ニ於テ既ニ「ニールセン」救出ニ非常ノ努力ヲナシ來リ居ルコト等ヲ告ケタル上本件ハ滿洲國ニ申入レラルヘキ筋合ナルカ折角ノ御申出ニ付在滿帝國大使館側ニモ然ルヘク措置方訓令シオクヘキ旨答ヘ置キタル趣ナリ尙ホ在奉天總領事來電ニ依レハ四日同地米國總領事館ヨリ最近北平ニ於テ丁抹公使ヨリ米國公使ニ對シ「ニ」救出ノ爲必要アラハ丁抹側ニ於テ多少ノ身代金支拂ノ用意アル旨話アリタル趣ヲ以テ右ニ關スル意向ヲ承知シタキ旨申出アリタルヲ以テ關係ノ向トモ協議ノ上身代金支拂ハ今後同種ノ事件誘発ノ虞アルヲ以テ不得策ト思考スルモ今後交渉ノ模様ニ依リ多少ノ涙金程度ノモノノ支出ノ必要等起ラハ改メテ申入ルヘキ旨回答シ置キタル趣ナリ尙其ノ際米國側ヨリ在奉天丁抹人宣教師「ラズムツセン」ヲ岫巖ニ派シ「ニ」救出ニ從事セシメ度旨ノ申出アリタルカ右ハ救出ニ何等ノ助トナラサルノミナラス途中ノ治安狀況ニモ顧ミ中止セシメタル由

第七九二號(大至急)

本省 9月7日後4時20分發

右我が方公表案

使宛第七九三號

別電 九月七日發内田外務大臣より在満州国菱刈大

表案および満州国側公表案への訂正方について

116 昭和8年9月7日

内田外務大臣より
在満州国菱刈(隆)大使宛(電報)

カラサル様存セラレ從テ目下折角「アエロ、フランス」ノ
重役會開催ヲ督促シ居ル次第ナリ貴電後段ニ關シ坂本ヲ招
致シ事情ヲ問ヒタル處同人ハ當方ニ於ケル滿鐵ノ一般事務
ニ付打合ノ爲一時歸朝ヲ命セラレ九月月上旬出發ノコトナ
リ居ル趣ニテ「コテイ」ヨリ坂本ノ出發前日佛親善特ニ滿
洲企業等ニ付懇談シタキ旨坂本ノ友人タル「ファイガロ」營
業部長ヲ通シテ申込ミ來リ居リ近ク會見ノ手筈トナリ居ル
モ具体的ニ何ヲ提議セントスルカハ未タ判明セサル趣ナリ
滿ヘ轉電アリ度シ

第三八〇號(極秘)

パリ 8月19日前發
本省 8月20日前着

ドリル側財団のアエロ・フランスに対する満
洲企業組合の権利譲渡案について

115 昭和8年8月19日

在仏国沢田臨時代理大使より
内田外務大臣宛(電報)

テ大連埠頭ニ陸揚ケセラレ居リタル燈用礦油四萬箱ニ達シ
居タルニ鑑ミ滿洲國稅關ニ於テハ分類方法改正以前ニ仕出
港ヨリ發送セラレタルモノニ限り特ニ從來ノ方法ニ依リ處
理シ得ルコトセリ
故ニ現在輸入セラルル燈用礦油ハ稅關ニ於テ燃燒試驗ノ結
果照明用トシテ使用ニ耐フルモノハ其ノ比重、價格ノ如何
ニ拘ラス悉ク稅番四九五ノ適用ヲ受ケ居ル次第ナルニ付本
件日本ヨリノ燈火油ニシテ燈油トシテ使用セラルル礦油ナ
ルニ拘ラス尙稅番五〇六ノ適用ヲ受ケ居ルモノアリトセハ
右分類方法改正前發送ノ分ノ殘部ニ外ナラス
(轉電先脫?)

貴電第一八〇號前段ニ關シ

佛「サンジカ」ノ内紛ハ七月十三日附往信機密第四一四號
ヲ以テ報告ノ如キ事情ニテ其ノ後モ「ドリル」側ト「ドユ
フル」側トノ間ニ自發的ニ妥協セシムル様指導シ居タル處
八月七日ノ「サンジカ」側總會ニ於テ(一)組合ハ「アエロ、
フランス」ニ滿鐵トノ契約ヨリ生スル一切ノ權利義務ヲ十
萬法ト共ニ引渡シ滿洲企業組合ノ事業三年間ニ發展セル場
合ニハ一定數ノ「アエロ、フランス」ノ株券ヲ取得ス(二)「ア
エロ、フランス」ハ四十五萬法ヲ Union industrielle de
credit(「アエロ、フランス」ノ關係銀行)ハ五十五萬法ヲ出
資シ合セテ滿洲企業組合ヘノ佛側出資ヲ爲ス旨ヲ骨子トス
ル讓渡案ヲ決議署名シタル趣ニテ「ドリル」來館右ノ次第
ヲ報告スルト共ニ右決議ハ其ノ内「アエロ、フランス」側
ノ重役會ニ提出其ノ承認ヲ經タル上ニテ確定スルモノニテ
其ノ上ニテ當方ニ正式ニ通知スヘキ旨申居リタリ「アエロ、
フランス」ノ社長ハ從來「アバス」通信ノ社長トシテ政治
的ニモ有力視セラレ居ル外經濟界ニ於テモ其ノ後當方ニテ
調査シタル處ニ依レハ信用確實ナル趣ニテ同氏ヲ主腦トス
ルコト確定ノ上ハ滿鐵ト肩ヲ並ヘテ事業ニ當ラシテ恥カシ

往電第七八八號ニ關シ

「當方公表文案別電第七九三號ノ通り(英文モ作成ノ予定
ナリ)尙ホ公表文中ニ身代金支出ノコトヲ記載スルハ斯
種人質事件ヲ獎勵スル結果トナル虞アルニ付右記載方ヲ
不可トスル意見モアルヘキ處身代金ノ明確ナル金額ヲ記
載スルコトハ避クルヲ要スヘキモ身代金ノ分擔ニ付滿英
兩國間ニ押問答アリタルモ滿洲國側ニテハ人道的見地ヨ
リシテ右分擔ノ問題ヲ後日ニ譲リテ救出ヲ敢行シタル事
實ヲ發表セサレハ往電第七七二號ノ如ク英國側ニ對スル
日滿側ノ立場ヲ有利ナラシムルノ目的ニ資スルコト少キ
一方身代金ノ支出ハ(金額ハ詳カナラストスルモ)滿洲ニ
於ケル匪賊一般ニハ殆ト公然ノ祕密トナルヘシト想像セ
ラルルニ付寧ロ此ノ際限リトシ將來ノ方計ヲ明示スルコ
ト有利ト考ヘ別電ノ通リトセル次第ナリ

三、貴電第一〇〇八號ノ(二)關シ「此ノ種不注意又ハ過失ニ依
ル人質ニ付テハ」云々ノ點ハ「今後ハ其ノ種不注意又ハ
過失ニ依ル人質ニ付テハ滿洲國ハ治安維持上當然ノ措置
ハ執ルヘキモ身代金ノ支出等匪賊ニ對シ何等カ利益ヲ與
フル結果トナル手段其ノ他特別ノ面倒ハ一切之ヲ執ラ

レ人質三名モ後者ニ奪ハルルニ至レルカ滿洲國側及大畑大尉ハ引續キ救出ニ腐心シ或ハ使者ヲ間斷ナク派出シテ匪賊トノ接洽ヲ試ミ或ハ匪賊ノ縁戚ヲ人質トシテ英人々質ノ釋放ヲ促ス等凡有ル方法ヲ用ヒタルモ匪賊ハ盤山灣ノ葦深キ地帯ヲ日々轉々シ居ルヲ以テ彼等ノ居所ヲ突止ムルコトノミニテモ極メテ困難ナルノミナラス一旦彼等ト接洽シ得タル場合ト雖モ百萬圓ノ身代金其ノ他法外ナル要求ヲナス有様ニテ匪賊トノ交渉ニ依ル救出ノ目的ヲ達スルコト至難ト認メラレタルニ付滿洲國側ニテハ四月下旬ニ至リ武力奪回ヲ決意シ六月初旬使者ヲ派遣シテ匪賊トノ間ニ最後ノ交渉ヲ行ヒ決裂ノ場合ニハ愈々武力奪回ヲ決行スルコトトセリ然ルニ右計畫ハ不幸ニシテ事前ニ匪賊ノ探知スル所トナリ直ニ該計畫ヲ實行セハ人質ヲ殺害セラルル虞アリタルヲ以テ滿洲國側ニ於テハ右計畫ヲ一時中止シ引續キ使者ヲ匪賊ノ許ニ派シテ救出ノ端緒ヲ得ルニ努力セリ然レ共匪賊トノ交渉ニ依ル救出ノ目的ハ依然トシテ達成セラレサリシニ付七月中旬ニ至リ滿洲國側ニ於テハ愈々討伐ヲ決行スルコトトシ海邊警察隊員三百名ヲ警備艦艇五隻戎克十隻ニ乗船セシメ盤山灣ニ向ケ出動セシメ又陸上部隊トシテ警察隊及自

ス」註、治安維持上當然ノ措置ヲ執ルノ責任ハ此ノ種人質事件ニ付テモ免ルルコト能サル次第二テ右責任追回避スルコトハ支那側ニ利用セラル、不利モアリ」ト云フカ如キ趣旨トスルコト適當ナルヘク又右趣旨ハ滿洲國側ヨリ發表スルニ止メ當方公文ニハ記載セサル方日滿聯合ノ印象ヲ避クル所以ト存ス尤モ別電第七九三號ニハ念ノ爲メ記載シ置キタルカ貴方ニテ右見解ニ同意ナレハ削除スルコトト致度

三新聞掲載禁止解除ノ時期ハ本公文ノ發表及前記滿洲國側發表ト同時トスルコト適當ナルヘク該時期ハ貴方ニ於テ決定ノ上本電ニ對スル回電中ニ御記載相成度將又解除ノ程度ニ付テハ救出成功ノ上ハ奉天發本大臣宛電報第三一號ノ如ク「政府發表以外ノモノハ」トスルハ廣キニ失スルニ付前記「ノ次第二モ顧ミ」身代金ノ金額ニ關スル事項以外ノモノハ云々」トスルコト可然ト存ス就テハ關東軍、關東廳、滿洲國等關係ノ向ト御打合ノ上以上諸點ニ付何分ノ儀至急回電アリ度

陸軍ト打合ズミ

別電ト共ニ奉天、牛莊ヘ轉電セリ

(別電)

第七九三號(大至急)

本省 9月7日後5時10分発

「英國太古洋行所有汽船南昌號昭和八年三月二十九日正午頃遼河河口約二哩ノ沖合ニ於テ水先案内人ヲ待合セ中二隻ノ大型船舶ニ分乗セル十數名ノ匪賊來襲セリ當時船員ノ大部分ハ甲板ニ於テ麻雀遊戲中ナリシ處船長ハ匪賊ノ襲撃ト見ルヤ急遽出帆命令ヲ發シタルモ船員等カ船至ニ逃ケ込ミタル爲出帆不能トナレル由ニテ匪賊等ハ發砲掠奪ヲ行ヒタル上英人船員四名ヲ拉致シテ何レヘカ逃走セリ

急報ニ接シ滿洲國海邊警察隊ハ奉天省警務廳指導ノ下ニ急遽搜索ヲ開始セルカ四月三日ニ至リ船員中ノ一名ハ匪賊ヨリノ書狀(本書狀ニハ百万円ノ身代金及多量ノ武器彈藥ノ提供ヲ要求スル旨記載シアリ)ヲ携ヘ營口ニ歸來セリ

「我方ニ於テハ滿洲國側ニ協力シテ極力前記外國人人命ノ救助ヲ行フコト、シ不取敢驅逐艦一隻ヲ營口ニ派スルト共ニ滿洲國側ノ救出措置ヲ援助セシムル爲營口憲兵隊分隊長大畑憲兵大尉ヲシテ右ノ任務ニ當ラシムルコトトセリ

曩ニ英人船員ヲ拉致セル匪賊ハ四月中旬他ノ匪賊團ニ襲ハ

衛團ノ聯合部隊ヲ出動セシムルト共ニ日本守備隊數百名モ之ニ協力出動シ且飛行機二臺ヲ以テ匪情偵察及海陸戰隊ノ連絡ニ當ルコトトシ七月十五日拂曉ヲ以テ總攻撃ヲ開始シ匪賊ニ多大ノ損害ヲ與ヘタルモ遂ニ人質ヲ救出スル能ハス且匪賊ノ行衛一時不明トナレルヲ以テ十七日一先ツ討伐ヲ中止スルト共ニ其ノ後ハ五日乃至一週間ニ一回宛使者ヲ派シテ執拗ニ人質ノ釋放ヲ勸告シ來レルカ匪賊等ハ依然トシテ巨額ノ身代金ノ要求ヲ續ケタリ然ルニ八月下旬ニ至リ少額ノ身代金ヲ以テ人質ヲ釋放スル意向ヲ通シ來レルカ當時ノ情勢ハ此ノ機ヲ逸スレハ再ヒ救出ノ時機ニ遭遇スルコト困難ナリト認メラレタルヲ以テ滿洲國トシテハ元來斯種人質救出ニ付テハ身代金ヲ出ササルコトニ方針ヲ立テ居ルニ依リ英國側ト種々折衝セルモ容易ニ合意ヲ見ルニ至ラサリシ処若シ身代金ノ負擔率等ニ關スル論議ニ時日ヲ空費スルニ於テハ匪賊側ニ於テ再ヒ人質ヲ連行シテ奥地深く潛入セントスル氣配アリ寸刻ノ猶餘ヲ許ササル狀況ナリシヲ以テ我方ニ於テハ右ハ人道ニ默視スルニ忍ヒストナシ滿洲國側ニ對シ身代金負擔問題ハ後日ノ決定ニ讓ルコトトシテ此際全力ヲ擧ケテ救出ノ實現ヲ圖ラムコトヲ勸告セル處滿洲國

一切之ヲ爲ササル方針ノ趣ナリ

117 昭和8年9月8日

内田外務大臣より
在独国永井(松三)大使宛

独国人ハイエより対満投資のための日独満合
弁銀行設立方我が方陸軍省に提議について

亞三機密第六八號

昭和八年九月八日

外務大臣伯爵 内田 康哉

在獨國

特命全權大使 永井 松三殿

獨乙人「フエルデイナンド、ハイエ」ノ對滿投資計劃
ニ関スル件

獨乙人 Ferdinand Heye ナル者過日陸軍省ニ出頭シ独乙對
滿投資誘致機關トシテ滿洲ニ於テ日滿合弁ノ滿蒙銀行ヲ設
立スル計劃ヲ有スル旨並ニ右ニハ独乙製鋼「トラスト」等
ノ資本的背景アル旨陳述シタルカ、之ニ對シ陸軍省係官ニ
於テハ本件ニ関スル實情判明セサルニ付当方トモ協議ノ上
兎毛角現地ヲ視察スルコト可然旨同人ニ申聞ケ置キタル次

側モ之ニ同意シタル結果營口地方警察署長ハ大畑大尉ヲ同
道裝甲車ニ乗シテ匪賊代表者ノ滞在地ニ人質ノ身柄引取ノ
爲出發シ、、、、、救出ノ目的ヲ達成スルヲ得タリ
三、事件發生後六ヶ月ニシテ今回漸ク救出措置ニ成功セル次
第ナル處右成功ハ前述ノ通滿洲國側ノ異常ナル努力ノ結果
ニシテ主任者タル奉天警務廳長ノ苦心ハ固ヨリ海邊警察隊
及關係各縣警察カ現地ニ於ケル救出作業ニ際シ拂ヘル異常
ナル努力ト其ノ經驗セル辛酸トハ到底筆紙ニ盡シ難キモノ
アリ又前記滿洲國側作業ノ援助ニ當レル在滿日本文武官憲
特ニ大畑營口憲兵分隊長ノ勞苦モ亦忘ルヘカラサルモノア
ル次第ナリ而シテ此等ノ努力ハ滿洲國ノ治安維持ヲ計ル一面
高潔ナル人道上ノ見地ヨリ爲サレタルモノナルコト勿論ナリ
尙滿洲國トシテハ本件身代金分擔問題ニ付テハ引續キ英國
側ト折衝ノ筈ナルト共ニ從來發生セル匪賊ノ外國人人質拉
致事件ノ多クカ被拉致者側ニ於ケル重大ナル過失又ハ不注
意ニ基ケルモノナルニモ顧ミ今後發生スヘキ斯種人質事件
ニシテ前記ノ如キ不注意又ハ過失ニ基クモノニ對シテモ出
來得ル限り救出ニ努力ヲ爲スヘキハ勿論ノ次第ナルモ例ヘ
ハ身代金ヲ支出スルト謂フカ如キ特種ノ面倒ヲ見ルコトハ

119 昭和8年9月8日

在滿洲國菱刈大使より
内田外務大臣宛(電報)

英國船員拉致事件解決の際の我が方公表案修
正方稟請

新 京 9月8日前発
本 省 9月8日前着

第一〇三五號(至急)

貴電第七九二號ニ關シ

身代金ニ言及スルコトニ付テハ關東軍並滿洲國側ト極力協
議シタル處何レモ從來ノ行懸上承諾シ得サル立場ニアルヲ
以テ貴電第七九三號公表案ハ枉ケテ左記ノ通り修正スルコ
トニ御詮議ヲ仰ク

尙發表ノ時期ハ貴方及當方ニ於テ在營口領事ヨリ引渡終了
ノ旨電報ニ接シタル上直ニ之ヲ行フコトト致度シ

記

貴電第七九三號中

(一)後段「、、、、續ケタリ然ルニ」ト「八月下旬」ト
ノ間ニ「一方滿洲國側ハ更ニ討伐計畫ヲ立直シタルヲ以テ
匪賊ニ於テモ解決ヲ長引カシムルノ不利ヲ悟リタルモノト

二 滿洲國をめぐる列國との關係

118 昭和8年9月8日

在滿洲國菱刈大使より
内田外務大臣宛(電報)

拉致事件の英國船員救出解放について

新 京 9月8日前発
本 省 9月8日前着

第一〇三四號(至急)

當地憲兵隊司令部ヘノ入電ニ依レハ英人人質ハ無事救出セ
ラレ本七日午後八時三十分盤山ニ到着シ明日營口ニ歸着ノ
豫定ナル趣ナリ右不取敢

見へ」ト挿入シ又「意嚮ヲ通シ」ヨリ「營口地方警察署長ハ」迄ヲ削リ其ノ代リニ「來ル迄ニ至リタルカ滿洲國側トシテハ飽迄身代金ヲ出スヲ不可トスルノ方針ヲ堅持スルト共ニ既定ノ討伐方針ヲ遂行シタル處匪賊側ニ於テモ遂ニ日滿双方ノ強硬ナル態度ニ屈シ人質ヲ投出スニ至リタルヲ以テ」ヲ挿入ス

奉天、牛莊へ轉電セリ

120 昭和8年9月8日

内田外務大臣より
在英国松平大使宛(電報)

英国船員拉致事件解決における身代金に関する事項が英国新聞紙上へ掲載されないよう配慮方訓令

本省 9月8日後4時10分発

第二五五號(至急)

在滿大使發本大臣宛電報第一〇三四號ニ關シ

營口ニ於テ英國側へ人質ノ身柄引渡終了ト同時ニ(一)滿洲國

側ニテハ外交部總長談話ノ形式ニテ「滿洲及日本官憲ノ多大ノ努力ノ結果救出ヲ見タルヲ喜ブト共ニ「ボーレー」事件ト謂ヒ今回ノ事件ト謂ヒ被害者ノ過失カ事件發生ノ重要ナル原因ヲ爲シ居リ而モ其ノ結果滿洲地方官憲カ多大ノ勞力ト時間トヲ費サシメラレ居ルハ遺憾至極ニテ外國居留民側ニ於テモ一層警戒シ慎重行動方ヲ希望ス滿洲國政府トシテハ從來共此種事件ノ絶滅ヲ期スル爲多大ノ努力ヲ以テ匪賊討伐ヲ實行シツツアリ」トノ趣旨ヲ發表シ一方(二)外務省ヨリ本件發生以來救出ニ至ル迄ノ経緯ヲ相當詳細ニ敘シ本件救出ノ成功ハ滿洲國側及之ニ協力セル我方ノ異常ナル努力ノ結果ニシテ且是等ノ努力ハ滿洲國ノ治安維持ヲ計ル一面高潔ナル人道上ノ見地ヨリ爲サレタルモノナルコトヲ強調セル公表文ヲ出ス筈ナルカ右(一)(二)共身代金ヲ提供ノコトニハ一切言及スルコトヲ避ケタリ就テハ貴國新聞紙上ニモ身代金ニ關スル一切ノ事項掲載セラレサル様御配慮相成度

在滿大使へ轉電セリ

121 昭和8年9月16日

広田外務大臣より
在英国松平大使宛

英国船員拉致事件に關シ我が方責任に言及し

た英國側口上書およびこれに対する回答書送

付について

亞一機密第九三號

昭和八年九月拾六日

外務大臣 廣田 弘毅

在英国

特命全權大使 松平 恒雄殿

營口附近ニ於ケル匪賊ノ英人船員拉致事件ニ対スル日

本ノ責任ニ關スル件

營口英人人質救出問題ニ關シ客月二十一日英國代理大使重光次官來訪ノ際別添甲号写口上書ヲ提出セルカ右口上書中ニハ日本側ノ責任及日本側ノ約束云々ノ記載アル處救出成功ニ先チ右ノ点ヲ反駁スルハ面白カラスト認メ救出實現迄回答ヲ差控エ居リタルカ這般救出ヲ了シタルヲ以テ右責任及約束云々ノ点ニ付別添乙号写ノ通口上書ヲ以テ回答シ置ケリ

右御參考迄申進ス

(別添甲号)

AIDE MÉMOIRE.

Capture by brigands of three British officers
off Newchwang on March 29th, 1933.

On July 30th Captain Obata informed Mr. Clarke that General Hashimoto, his chief commanding the Japanese gendarmerie in Manchuria, had informed him that if \$20,000 were provided from British sources, he (General Hashimoto) would endeavour to obtain from the Manchukuo authorities any remaining sum necessary to effect the release of the three officers of the s. s. "NANCHANG". Captain Obata also stated that if this sum were not forthcoming there would be a risk of the negotiations failing, whereas with it he believed he could effect release.

On August 5th, in accordance with instructions, Mr. Clarke made it clear to Captain Obata that it is the Japanese and Manchurian authorities whom the British Government and public opinion in Great Britain hold

responsible, by whatever means are possible, for the safe release of the captives. In reply to Mr. Clarke Captain Obata stated that he was virtually powerless unless funds were provided from the British side and that he had repeatedly applied to Changchun for funds but had been unsuccessful in obtaining them.

On August 10th Captain Obata informed Mr. Clarke that he had received further funds, but they fell far short of the amount required by the brigands.

In these circumstances Captain Obata on August 15th again renewed to Mr. Clarke the suggestion that British sources should provide a further sum, but at the same time declined to tell Mr. Clarke what sum he himself already had available.

On August 16th Mr. Clarke learned from intermediaries that if the brigands did not receive the sum they required, they proposed to leave the area and hand over the captives to Tengtiemei, a notorious brigand leader operating in south-east of Fengtien province. At the

same time Captain Obata informed Mr. Clarke that the funds which the authorities had placed at his disposal were insufficient, but that if an additional \$10,000 were guaranteed from British sources, "there would be a very good chance of effecting release."

It remains to add that the British Embassy understand that as the crops are now high, there is nothing, if the present negotiations now fail, to stop the brigands making good their escape into the mountains, where they would be safe from pursuit for an indefinite further time.

The British Embassy have been repeatedly assured by the Gaimusho authorities that the latter are only too anxious to secure the release of these three unfortunate officers. The British Government, and through them the British public, have accepted these assurances without any hesitation; accordingly the Embassy feel convinced that they will not be misunderstood if they point to the disastrous shock which would be produced in the mind

of the British Government and public if they were left to derive an impression that in a matter affecting the lives of three helpless and unfortunate men the performance of the Japanese authorities had been less than their promise.

The British Embassy are happy to record that they have always laboured in the friendliest and frankest collaboration with the Gaimusho authorities to prevent unnecessary misunderstandings arising on one side or the other. Their services remain at the fullest disposal of the Gaimusho in this respect. In turn they feel convinced that the Gaimusho would deplore equally with them and will now take the promptest and most effective measures to prevent the further jeopardising of these three lives, particularly as all the available information shows that their safety could now be assured by the guarantee of so small a further sum as \$20,000.

21st August, 1933.

(別添ニ号)

亞一普通第一五六號

昭和八年九月拾六日

口上書

昭和八年三月二十九日營口附近ニ於テ匪賊ノ爲拉致セラレタル南昌號乗組英國人船員救出問題ニ關スル八月二十一日附英國大使館口上書ノ一節ハ、「クラーク」副領事カ訓令ニ依ル趣ヲ以テ大畑大尉ニ對シ、英國政府及英國輿論ニ於テハ有ラユル手段ヲ講シテ右人質ノ安全ナル救出ヲ計ルコトカ日本及滿洲官憲ノ責任ナリトナシ居レル旨述ヘタル趣記載シアリ。本件ハ畢竟滿洲國領域内ニ在ル外國人保護ノ問題ナリ。而シテ日滿兩國間ニハ治安維持ニ關シ特殊ノ條約關係ハアルモ右ハ日滿兩國間ノ關係ニシテ、帝國政府トシテハ之カ爲滿洲國領域内ニ於ケル外國人ノ保護ニ付當該外國ニ對シ責任ヲ負擔スヘキコトヲ約シタル次第ニアラサルコトハ茲ニ指摘ヲ要スベシ。尙英國大使館ハ前記口上書中ニ於テ、人命救助ニ關スル帝國官憲ノ措置カ其ノ與ヘタル約束ニ照シ不十分ナルモノアリトノ印象ヲ英國政府及公衆カ受ケタル場合合同政府及公衆ノ心裡ニ與フヘキ打撃ニ付指摘セラレ居ル處、帝國官憲ト

シテ右様ノ約束ヲ與ヘタルコトナク又斯ル約束ヲ爲スヘキ筋合ニモアラス。將又帝國官憲ニ於テ本件人質事件發生當初ヨリ滿洲國側ノ救出作業ニ不斷ノ協力ヲ爲シタルハ専ラ崇高ナル人道上ノ見地ニ基キタルモノニシテ他ニ何等ノ意圖ニ出テタルモノニ非ス。右ノ事實ハ如何ナル犠牲ヲ拂フモ右救出ノ機會ヲ逸セサルコトニ努メタル日本當局ノ態度ニ依リテ已ニ明カナルベシ。

122 昭和8年9月16日 在滿州国菱刈大使より
広田外務大臣宛(電報)

満州国石油輸入関税率の区分方法見直しに關する英米石油会社の請願について

新京 9月16日後發
本省 9月16日後着

第一〇八七號
往電第七三四號ニ關シ

「十四日亞細亞石油、「ソコウニ」、「バキウム」、「テキサス」各石油會社代表者來訪係官ニ對シ語レル處左ノ通現在税關ニ於テ使用シ居レル燃燒試験ハ尙不完全ニシテ

滿洲國人力價格低廉ナル限り煤煙ノ有無ニ付比較の無頓着ナルヲ利用シ燈火用ニ供セラルルニ拘ラス尙燃燒試験ニ際シ輕油(税番五〇六)トシテ分類セラルルカ如キ種類ノ石油ヲ輸入スルモノアリ就中日本商人ハ近距離ニアル本國ノ大油田工場ト聯絡ヲトリ特ニ前記ノ如キ種類ノ石油ヲ製造輸入スルモノ鮮カラサルニ反シ英米石油商社ハ本國ノ遠距離ナルト其ノ製品カ大量生産ニヨリ劃一品ナル爲到底如斯キ手數ニ出ツルコトヲ得ス結局總テ税番四九五號ニヨリ關稅ヲ支拂ハサルヲ得サル現狀ナル爲著シク日本石油業者ノ壓迫ヲ受ケ居ル次第ナリ

元來斯ノ如キ不合理ナル結果ヲ生スルハ滿洲國石油輸入税率ノ立方カ非科學的ナルニ起因スルモノニシテ例ヘハ日本ノ關稅率ノ如ク比重ニヨリ階級的ニ多クノ税率ヲ作り置ケハ斯ノ如キ不合理ハ生セサル次第ナルカ將來滿洲國ノ石油輸入關稅カ合理的ニ改正セラルル迄ノ間(英米石油業者ニ於テ特ニ税率ノ低下ハ希望シ居ラス)ノ臨時措置トシテハ現在ノ燃燒試験ヲ廢止シ再ヒ比重試験ニ變リ舊標準比重 Baume 三九ヲ三〇ニ改正適用セラレンコトヲ希望ス

ニ、財政部ニ對シ前記英米石油業者ノ希望ヲ傳達シタル處財政部係官ハ専門技師ヲシテ研究セシメタル上何分ノ回答ヲナスヘキ旨約セリ

奉天へ轉電セリ

123 昭和8年9月21日 広田外務大臣より
在滿州国菱刈大使宛(電報)

米國著名土木会社の満州国土木建築事業引受け方申越しにつき満州国側意向回電方訓令

本省 9月21日後1時50分發

第八五六號

一、紐育ニ於ケル著名ノ大土木建築會社 Stone and Webster ニ於テハ滿洲國ニ於テ何等土木關係事業ヲ引受度意嚮アリ目下歐米旅行中ノ辯護士増島六一郎博士ヲ通シ書面提出ノ次第アリタル趣ヲ以テ中央軍部係官ヨリ當方ニ移牒シ來リタル處右書面ハ同會社ヨリ滿洲國當局ニ宛テラレタルモノニシテ(The Competent Authorities of Manchukuo ト記ス)同社カ土木建築事業ニ關シ獨特ノ經驗アル大會社ナルコトヲ詳述シタル後は等事業ノ遂行ニ付

滿洲國ノ爲何等役立チ得レハ欣幸トスヘク若シ又滿洲國當局ニ於テ何等特定ノ計劃ニ付腹案ヲ示サルニ於テハ同社ハ之ニ對シ definite proposal ヲ爲シ滿洲國當局ノ考慮ニ資スヘキ旨ヲ述ヘ同社々長 Muhlfeld 之ニ署名シ居レリ(書翰寫郵送ス)

尙右書翰ニ添ヘ提出アリタル資料ニ據レハ同社ハ當初主トシテ水力並ニ火力ノ發電所建設ヲ請負ヒ來リシカ漸次發展シテ現在ニ於テハ建築、土木、電氣等ノ各事業ニ關スル數個ノ傍系會社ヲ抱擁セル頗ル大規模ノ組織ヲ有スルモノノ如シ

ニ、右書面申出ノ次第ハ之ヲ大橋次長ニ傳達シ置キタルカ同次長トシテハ目下佛國側ニ於テ二個ノ對滿投資團對立競争シツツアルニ加ヘ今回更ニ米國方面ヨリ此ノ種申出ニ接シタルハ頗ル興味アルモノト言フヘク場合ニ依テハ何等カノ具體的事業(例ヘハ新京都市計劃若クハ哈爾濱ノ水道計劃ノ如キモノ)ヲ中心トシテ是等諸外國資本家ノ間ニ自由競争ヲ行ハシムルモ一案ナルヘシトノ意見ナリ

三、尙前記書面ノミニテハ「ス」社ノ意嚮カ單純ナル事業請負ヲ目的トスルモノナリヤ或ハ長期信用設定ノ用意ヲモ

有スルモノナリヤ等明ナラサル次第ナルモ此ノ點ハ今後ノ應酬振其ノ他ニ依リ次第ニ判明スヘク旁々貴地軍部トモ御連絡ノ上滿洲國側ニ可然御傳達相成結果回電アリタシ紐育ニ轉電シ紐育ヨリ佛ニ轉電シ米ニ暗送セシム

124 昭和8年10月5日 在滿洲國菱刈大使より
広田外務大臣宛

対滿投資のための銀行設立計画に關し独国人
ハイエと関東軍參謀長および我が方大使館參
事官との会談内容について

公機密第九六五號 (10月9日接受)

昭和八年十月五日

在滿洲國

特命全權大使 菱刈 隆〔印〕

外務大臣 廣田 弘毅殿

獨逸人「フェルデインランド、ハイエ」ノ言動ニ

關スル件

九月八日附亞三機密第三四五號^(機密)及同月上旬貴電ヲ以テ御來示アリタル獨逸人「フェルデインランド、ハイエ」ハ九月六

日當地ニ來着シ一兩日滞在中小磯參謀長及谷參事官ヲ別々ニ訪問東京獨逸代理大使ノ證明書ヲ提示シ現獨逸政府ノ派遣員トシテ來訪セル旨ヲ述ヘ滿洲ノ産業開發ニ寄與スル目的ヲ以テ日滿獨三國合辦ノ銀行ヲ成立シ度之ヲ許容セラルルニ於テハ獨逸政府ハ滿洲國ノ獨立ヲ承認スヘキ旨ヲ語リ尙參謀長ニ對シテハ右承認ノ上ハ獨逸政府ニ於テハ同人ヲ駐滿公使ニ任命スルノ意嚮アル旨語リタル趣ナルカ右ニ對シ參謀長ハ

「滿洲國ハ現ニ着々建設ノ途ヲ辿リツツアルモ今急ニ多額ノ外國資本ヲ必要トシ居ラス

「滿獨ノ關係ハ寧ロ先ツ政治的提携ノ實ヲ舉クルコト望マシク獨逸ノ滿洲國承認實現ノコトトモナラハ其對滿投資ニ付テモ喜ンテ協議スヘシ

「承認實現ノ曉獨逸政府ノ任命ニ基キ「ハイエ」カ駐滿公使トシテ來任スルコトニ付テハ滿洲國政府トシテ何等異議ナカルヘキコトヲ信ス

ト應酬シタル外何等立入りタル話合ヲ爲ササリシ趣ナリ尙同人トノ應酬ニ際シ谷參事官ヨリ承認問題ニ關シ聯盟ノ不承認決議ニ參加シ居レル獨逸政府ノ立場ヲ如何ニ調和ス

ヘキヤヲ尋ネタルニ秘密條約ニ依リ承認スヘシ等ト要領ヲ得サル答ヲ爲シ其ノ他所述一般ニ重キヲ置クニ足ラサル印象ヲ與ヘタル趣ナルカ只佛國資本家ト日滿トノ關係ニ付焦慮ノ態度ヲ示シタル趣ナリ
右報告申進ス

編 注 本信は同日付内田外務大臣より在独国永井大使宛公

信亜三機密第六八号(第117文書)の転報。

125 昭和8年10月20日 広田外務大臣より
在滿洲國菱刈大使、在奉天峰谷總領事、
在米國出淵大使宛(電報)

ニールセン誘拐事件などに関する在本邦米國大
使館參事官と重光次官との会談内容について

付 記 十月十九日付、作成局課不明

「重光次官米國大使館參事官會談要旨」

本省 10月20日後8時40分發

合第一九二〇號

十九日米大使館「ネビル」重光次官來訪「ニールセン」救

出問題ニ關シ日滿兩國官憲ノ措置ニ對スル謝意及救出ノ任ニ當レル日本人ノ拉致ニ對スル遺憾ノ意ヲ表シタルガ其ノ際「ネ」ヨリ營口ノ英人船員救出ノ際ノ身代金ニ關シ種々説明ヲ求メタルヲ以テ次官ハ右英人ノ救出ニハ滿洲國官憲ニ於テ多大ノ努力ヲ拂ヒ我方出先官憲モ亦出來ル限りノ援助ヲ與ヘタリ身代金ニ付テハ一部ハ英國側ニテ支拂ヒ殘餘ノ額モ他日英國側ヨリ支拂ヲ受クル期待ノ下ニ滿洲國ニ於テ仮リニ支拂ヒタリ蓋シ事態急迫ノ爲メ時期ヲ失スルヲ恐レ只管人道上ノ見地ヨリ救出實現ニ重キヲ置キタル爲メナリ從ツテ右身代金ノ問題ハ英國側トノ間ニ未タ「ペンディング」トナリ居レル次第ナリト答ヘ置キタリ
(本電宛先) 滿、奉天、米

奉天ヨリ安東へ暗送アリ度

(付 記)

重光次官米國大使館參事官會談要旨

昭和八年十月十九日米大使館參事官「ネヴィル」氏重光次官ヲ來訪要件左ノ通

「ニールセン」救出問題

「ネヴィル」氏ハ「ニールセン」救出ニ付満洲國及日本側官憲カ今日迄採リタル處置ニ對シ感謝ノ意ヲ表スルト共ニ右事件ニ付救出ノ任ニ當リ居リシ日本人ノ一人カ更ニ土匪ノ爲ラ致セラレタル事ニ對シ遺憾ノ意ヲ表シタル後右事件ニ關シ其ノ後ノ事情ヲ承知致シ度ト述フ

由テ次官ハ「ニールセン」ノ救出ニ付テハ滿洲國官憲ニ於テ全力ヲ盡シ居レリトノ事ハ承知シ居ルモ詳細ノ點ハ承知シ居ラスト答ヘ尙只今申述ヘラレタル感謝ノ意其他ノ點ニ付テハ滿洲國ニ於ケル帝國代表者ヲ通シテ滿洲國ニ申入方希望セララル次第ナリヤト質ネタルニ

「ネ」ハ右ハ單ニ貴下ニ申入レタルニ過キスト答フ

次テ「ネ」ハ自分ノ得タル報道ニ依レハ牛莊ニ於テ土匪ニ拉致セラレタル英人二人ノ奪回ハ成功セリトノ事ナルカハ果シテ事實ナリヤト述ヘタルニ付

次官ハ自分ノ得居ル報道ニヨレハ然リト答フ

「ネ」ハ右ノ際身代金ヲ拂ヒタリトノ事ナルカ該身代金ハ何人カ如何ナル方法ニテ支拂ヒタルヤ又英人ノ救出ニハ如何ナル手段カ講セラレタリヤニ付説明ヲ得レハ幸甚ナリト述ヘタルヲ以テ

次官ハ右英人ノ救出ハ滿洲國官憲カ非常ナル努力ヲ盡シテ行ヒタルモノニシテ我方出先官憲モ素ヨリ出來得ル限りノ援助ヲナセリ尙身代金ハ一部ハ英國側ニ於テ支拂ヒ殘リハ滿洲國側ニ於テ他日英國側ヨリ支拂ヲ受クル期待ノ下ニ事態急迫ノ爲人道上ノ見地ヨリ時期ヲ逸セサルヤウ支拂ヒ以テ右救出ニ成功シタル次第ナリトノ報告ヲ受ケ居レリト説明セリ

三次ニ「ネ」ハ「スタンダード、オイル、コンパニー」ノ神戸ノ「タンク」問題ノ回答ヲ督促セリ

三「ネ」ハ本日ノ「アドバタイザー」ニ石井子爵カ米國トノ關係ニ付外相ニ進言シタリトノ長文ノ記述アル處其真相如何ト尋ネタルニ付

次官ハ昨日石井子カ外務省ヲ來訪シ局課長會議ニ出席食事ヲ共ニセラレタリ大臣ハ短時間石井子ニ遇ハレタルカ御話ノ如キ新聞記事ハ全然記者ノ想像ニ出テタル處ニシテ根據ナキ所ナル事ヲ説明シ置キタリ

四米參事官ハ佛國側カ十億法ノ借款ヲ滿洲ニテ起スノ計畫アリトノ事ヲ聞込ミタルカ其ノ真相如何ト尋ネタルヲ以テ次官ハ之ヲ否定シ置ケリ

五「ネ」ハ內蒙古ニ於テ蒙古王族カ獨立ヲ企テタリトノ事ナルカ其眞偽如何ト問ヒタルニ付

次官ハ綏遠ニ於テ內蒙古ノ王族カ支那政府ノ遣口ニ不滿ノ意ヲ表シテ獨立運動ヲ以テ威嚇シ居レリトノ報告アリタルカ既ニ獨立シタリトノ事ハ聞カス何レニスルモ邊境ニ於ケル一小事件ニ過キスト思考スト答ヘ置ケリ

126 昭和8年10月25日 在滿州國麥刈大使より
広田外務大臣宛(電報)

ニールセン救出解放について

新 京 10月25日後発
本 省 10月25日後着

第一三〇一號(至急)

二十五日奉天憲兵隊ヨリ當地憲兵隊司令部ニ達シタル報告ニ依レハ「ニールセン」ハ同日午前二時岫巖^ウニ脱出シ來レル趣ナリ

詳報未着ナルモ不取敢
奉天、安東、營口、關東長官、米へ轉電セリ

(欄外記入)

ネヴィルへ通知セリ廿五日夕

127 昭和8年10月25日 在ハルビン森島總領事より
広田外務大臣宛(電報)

独國領事より滿州國産大豆輸入を通じて日滿
両国との經濟提携を図りたい旨提議について

ハルビン 10月25日後発
本 省 10月25日後着

第七〇四號

本官發滿宛電報

第六三七號

(欄外記入)
在哈獨逸領事「バルザー」ハ豫テヨリ獨逸ハ滿洲大豆ノ一大輸入國ナルカ獨逸貿易ハ獨逸ニ不利ナル一方日獨貿易ハ獨逸ニ有利ナル實狀ニアル處今ヤ日滿經濟「ブロック」ノ成立セル以上獨逸トシテハ右「ブロック」ト經濟的握手ヲ爲シ滿洲大豆ヲ輸入スル一方獨逸ノ現在ノ財政狀態ニ於テハ右ニ對シ貨幣ヲ以テ支拂フ能力無キニ付對日輸出超過ノ帳尻ヲ以テ決濟ニ當テ以テ滿洲大豆ノ對獨輸出ヲ促進シ更

特命全權大使 菱刈 隆〔印〕

外務大臣 廣田 弘毅殿

滿洲國石油輸入關稅ニ關スル件

一、本年九月中旬往電ヲ以テ申進置キタル首題ノ件ニ關シ其後曩ニ當大使館ヲ訪問シタル英米石油業者ヨリ當館係官ニ對シ私信ヲ於テ督促ノ次第モアリタルヲ以テ係官ヲシテ財政部ニ付照會セシメタル處財政部係官ノ語ル處大要左ノ通り

財政部ニ於テハ種々研究シタルカ比重 30 Baume ヲ以テ燈油ト輕油トノ區別ノ標準トナスコトハ左ノ如キ理由ニ因リ到底實現困難ナリ

(イ)科學的ニ看テ Kerosene ト Light oil トノ區別ハ大体比重 39 Baume ヲ限界トスルコトハ一般ノ通説ニシテ世界各國ノ稅關ニ於ケル標準モ大体之ニ依リ居ルヲ以テ關稅技術上 30 Baume 迄モ引キ下クルコトハ不可能ナリ

(ロ)若シ 39 Baume ヨリモ著シク低下シタル標準ヲ採用スルトセハ全然燈火用ニ使用セラルルコトヲ目的トセ(？)ス例ヘハ燃料等ニ使用セラルル或種ノ油(現在輕

事情ヲ研究スルノ要有り又一方獨逸ト日滿經濟「ブロック」トノ接近ハ日獨國交關係ニモ影響スル所有ルヘキニ付本官ニ於テモ特ニ慎重研究致度キ所存ナルカ問題カ專門の事項ニ亘ルノミナラス滿洲國ニ關係スル所多キニ依リ中央ニ於テモ關係諸機關ト協議御考究相願度本官トシテ心得フヘキ事有ラハ御垂示相仰度シ

大臣ヘ轉電セリ

(欄外記入)

獨逸側ニ餘リニ虫のよき案ニモ考エラルル處斯様ナ事出來得ベキカ

~~~~~

128 昭和 8 年 10 月 25 日 在滿州國菱刈大使より  
廣田外務大臣宛

滿洲國石油輸入關稅率の区分方法に関する英米石油会社請願への同國財政部対応振りについて  
(10月30日接受)

昭和八年十月廿五日 在滿洲國

油トシテ輸入セラレ居ルモノハ却ツテ稅番四九五號ニ因リ課稅セラルル結果トナリ不合理ナル狀態ヲ生ス可シ

(イ)元來比重試驗ヲ燃燒試驗ニ變更シタルハ英米石油業者ノ陳情ニ依ルモノニシテ今又再ヒ彼等ノ苦情ニ因リ舊制度ニ戻ルカ如キハ朝令暮改ノ甚タシキモノニシテ現在ニ於テハ財政部ノ命令ニ因リ各稅關一律ニ燃燒試驗ヲ採用シ居ル次第ナルヲ以テ今俄カニ之ヲ變更スルコトハ困難ナリ

(ロ)英米石油業者ノ陳フルカ如キ不合理ハ比重試驗ヨリ燃燒試驗ニ變更スルコトニ因リ著シク改善セラレタルハ事實ニシテ現ニ新制度採用後在來ノ制度ニ依レハ輕油トシテ通關スヘカリシ油ニシテ燈油ナリト斷定セラレタルモノ約一萬箱ニ達シ居ルヨリ見テ明カナリ英米石油業者ニシテ此以上ヲ望ムハ所謂隨ヲ得テ蜀ヲ望ムモノト謂フ可シ

(ハ)日本石油業者カ特ニ輕油トシテ通關スルカ如キ性質ノ石油ヲ製造輸入スルハ恰モ日本綿布カ世界各國ニ進出シ居ルカ如ク輸入地ノ情況ヲ見ルニ敏ニシテ所謂商賣上手ナルニ依ルモノニシテ英米石油業者カ之ニ倣フコ

ニ獨逸ト日滿經濟「ブロック」ノ接近ヲ計り度キ旨ノ希望ヲ館員ニ表明シ居タル處其ノ後同領事ヨリ在哈一邦人ニ本件實現促進方ニ付申出ツル所アリタル趣ヲ以テ同邦人ヨリ本官ニ話合ノ次第アリタリ然ル處二十四日館員ト會談ノ際同領事ハ本件實現方ニ付本國政府ヨリ概括的訓令接到シ居ル處政府トシテハ大体ノ膳立ニ付斡旋シタル上ハ總テ同國關係實業家ニ委シ度キ意嚮ナルカ出來得ヘクンハ右ノ膳立ノ爲然ル可キ日本側實業家ヲ斡旋アリ度ク大綱決定ノ上ハ改メテ本國政府ヘ請訓スル積リナリ

(2) 尙差當リ同人「バ」トシテハ一方獨逸資本團ト他方大豆ヲ取扱ヒ居ルト同時ニ獨逸商品ノ輸入ニ從事セル日滿大資本團トノ協議ニ基キ毎年豫メ需要大豆ノ數量ト獨逸製品ノ數量並ニ金額及「クレヂット」條件ヲ決定シ以テ大豆ト獨逸製品トノ交換機關ヲ組織スルヲ最モ合理的ナリト思考スル旨述ヘ居タル趣ナリ

元來獨逸ヘ輸入サル滿洲大豆ノ相當部分ハ倫敦ニ於テ取引サレ居ル處今回ノ計畫實現ノ曉ハ全部獨逸トノ直接取引トナリ自然滿洲大豆ノ輸出ハ獨逸國內事情ニ依リ若ハ獨逸商人ニ依リ或ル程度迄左右セラルルニ至ラサルヤ等諸般ノ

事情ヲ研究スルノ要有り又一方獨逸ト日滿經濟「ブロック」トノ接近ハ日獨國交關係ニモ影響スル所有ルヘキニ付本官ニ於テモ特ニ慎重研究致度キ所存ナルカ問題カ專門の事項ニ亘ルノミナラス滿洲國ニ關係スル所多キニ依リ中央ニ於テモ關係諸機關ト協議御考究相願度本官トシテ心得フヘキ事有ラハ御垂示相仰度シ

大臣ヘ轉電セリ

(欄外記入)

獨逸側ニ餘リニ虫のよき案ニモ考エラルル處斯様ナ事出來得ベキカ

~~~~~

128 昭和 8 年 10 月 25 日 在滿州國菱刈大使より
廣田外務大臣宛

滿洲國石油輸入關稅率の区分方法に関する英米石油会社請願への同國財政部対応振りについて
(10月30日接受)

昭和八年十月廿五日 在滿洲國

油トシテ輸入セラレ居ルモノハ却ツテ稅番四九五號ニ因リ課稅セラルル結果トナリ不合理ナル狀態ヲ生ス可シ

(イ)元來比重試驗ヲ燃燒試驗ニ變更シタルハ英米石油業者ノ陳情ニ依ルモノニシテ今又再ヒ彼等ノ苦情ニ因リ舊制度ニ戻ルカ如キハ朝令暮改ノ甚タシキモノニシテ現在ニ於テハ財政部ノ命令ニ因リ各稅關一律ニ燃燒試驗ヲ採用シ居ル次第ナルヲ以テ今俄カニ之ヲ變更スルコトハ困難ナリ

(ロ)英米石油業者ノ陳フルカ如キ不合理ハ比重試驗ヨリ燃燒試驗ニ變更スルコトニ因リ著シク改善セラレタルハ事實ニシテ現ニ新制度採用後在來ノ制度ニ依レハ輕油トシテ通關スヘカリシ油ニシテ燈油ナリト斷定セラレタルモノ約一萬箱ニ達シ居ルヨリ見テ明カナリ英米石油業者ニシテ此以上ヲ望ムハ所謂隨ヲ得テ蜀ヲ望ムモノト謂フ可シ

(ハ)日本石油業者カ特ニ輕油トシテ通關スルカ如キ性質ノ石油ヲ製造輸入スルハ恰モ日本綿布カ世界各國ニ進出シ居ルカ如ク輸入地ノ情況ヲ見ルニ敏ニシテ所謂商賣上手ナルニ依ルモノニシテ英米石油業者カ之ニ倣フコ

二 満州国をめぐる列国との関係

トヲ得サルハ門戸開放、機會均等ノ下ニ於テ商賣上敗北シタルモノト見ルノ外無シ殊ニ滿洲國ハ一般人民ノ生活程度極メテ低ク高級ナル石油ヲ使用セス煤煙等ノ不便ヲ忍ヒテモ下級ナル石油ニ甘シスル事情ハ石油業者トシテハ當然知悉ス可キ事柄ニシテ英米石油業者カ之ニ適應スル商品ヲ輸入セサルハ怠慢ニヨルモノト謂ハサルヲ得ス

(ハ) 税番第四九五號ハ從量税ニシテ税番第五〇六號ハ從價税ナルカ元々實際徴收セラルル税額ニハ大差無カリシモノカ爲替ノ變動ニ因リ非常ナル差異トナリタルモノニシテ斯クノ如キ事情ハ石油ニ限ラス多數ノ品目ニ付起リ居ルモノナリ

滿洲國輸入關税率全般ノ改正ノ場合ニハ當然他ノ全種ノ事情アル品目ト共ニ考慮セラル可キ運命ニアルモ石油ニ關シテハ結局日本ニ於ケルカ如ク比重ニ依リ數種ノ階段ヲ付ク可キモノト思考シ居レリ唯現在滿洲國財政部ニ於テハ關稅收入等ヲ考慮シ税率ヲ定ム可キ統計資料無ク目下銳意統計作成中ナルニ付尠ク共今後一ケ年位ノ輸入狀況ヲ見タル上成案ヲ得度キ意向ナルヲ以テ早晚改正セラ

對シ祝意ヲ表スル旨正式ニ申出テタリ

米ニ轉電セリ

奉天、安東ニ轉電アリタシ

130 昭和8年10月30日 在独国永井大使より
広田外務大臣宛(電報)

独国の対滿經濟關係促進氣運は仏國の對滿投資活動に刺激されたものとの觀測に鑑み仏國活動内容回答方稟請

第二四二號

ベルリン 10月30日後発
本省 10月31日前着

獨逸ノ對極東政策ハ經濟的發展ヲ以テ其ノ基調ト爲シ居ル處滿洲國ノ基礎漸次鞏固トナレルニ從ヒ獨逸側トシテ同國トノ經濟關係促進ニ付テハ特別ノ關心ヲ有スルニ至リ居ルモノト云フヘク從テ最近滿洲國ニ於ケル佛國側投資ニ關スル新聞報道ハ當國一般ニ相當注意ヲ喚起シ一部方面ニ於テハ之ヲ米露接近ト結着ケ極東ニ相對立セル「プロツク」ヲ造成スルモノトサヘ見ル向モ有リ尙在哈爾濱總領事發貴大

ル可キ運命ニアルコトハ今日ヨリ明言シ得ル次第ナリニ當館係官ヨリハ特ニ本件カ滿洲國ノ門戸開放、機會均等主義適用如何ニ關スル一例トシテ諸外國ノ注目ヲ惹キ在滿外國新聞通信員ヨリモ特種トシテ外國ニ報道セラレ又在東京關係外交代表ヨリ日本外務省ニ問合セノ次第アリタルコト等ヲ告ケ可成ク速カニ合理的ニ改正セラルルコトヲ希望シ置キタリ

右何等御參考迄報告申進ス
本信寫送付先 奉天

129 昭和8年10月27日 広田外務大臣より
在滿州国菱刈大使宛(電報)

ニールセン救出に対し米國政府謝意表明について

本省 10月27日後7時45分発

第九九一號

二十七日米國大使本大臣ヲ來訪シ本國政府ノ訓令ニ基ク趣ヲ以テ「ニールセン」ノ無事救出ニ關スル關係官憲ノ御盡力ニ對シ深甚ナル謝意ヲ表スル旨竝ニ本件救出ニ關シ献身事ニ當リ一旦匪賊ノ爲拉致セラレタル鳥畑指導官ノ脱出ニ

臣宛電報第七〇四號同地獨逸領事申出ノ如キモ或程度迄右佛國側活動ニ刺戟セラレタルモノト云フヲ得ヘキト共ニ將來ニ於ケル獨逸ノ經濟的接近ノ素地ヲ作ラントスル魂膽ニ出テタルモノト觀測スルモ敢テ不自然ニアラサルヘシ此ノ形勢ニ對シテハ我方トシテモ相當注目ヲ要スヘク場合ニ依リテハ之ヲ善導利用スルコト有用ナルヘキニ付今後ニ處スル準備ノ爲本使含迄ニ右佛國側投資計畫ノ内容及進捗程度御電報ヲ請フ
滿、哈爾濱へ轉電アリタシ

131 昭和8年11月4日 在滿州国菱刈大使より
広田外務大臣宛(電報)

独国側よりの満州国産大豆輸入を通じての日滿両国との經濟提携方提議に關し大使館商務官の研究報告について

新京 11月4日後発
本省 11月4日後着

第一三三九號
獨發本使宛電報

第五號

貴電第五號ニ關シ

當館商務官ヲシテ調査セシメタル結果左ノ如シ

(一)大豆ハ其含油量ト糟生産率ニ於テ獨逸カ需要スル植物性油脂並ニ家畜飼料ノ比率ニ最モ適セル理想的原料ナルカ更ニ價格低廉且其他ノ利用價值多キ爲他ノ油脂原料ニ勝リ獨逸油房側モ最モ經濟的原料トシテ歡迎シ居ルカ過去四年間ニ於テ大豆油ノ信用モ激増シ獨逸ニ於ケル植物性油年產全量カ一九二九年八十五萬ヨリ一九三二年六十八萬噸ニ減セルニモ拘ラス大豆油ハ十六萬ヨリ十八萬噸ニ増加セリ之ニ反シ亞麻油ヲ除キ他ノ植物性油ハ何レモ減退シ落花生ノ如ク同期間二十七萬ヨリ十萬ニ激減セリ大豆糟ハ蛋白含有飼料トシテ最モ有利ナル上ニ更ニ油房側宣傳ノ效果現ハレ需要漸増シツツアリ尤モ現在國內飼料保護ノ結果一時需要停止ノ狀態ニアルモ若シ獨逸ノ農村救済カ飼料自給ヨリ進テ外國產「バタ」ノ輸入防止政策ニ移リ乳牛飼育ヲ獎勵スルニ至ラハ其需要倍加スヘシト當業者ハ述ヘ居レリ

(二)大豆關稅引上ニ關シ目下外務省ヘ照會中ナルモ斯ル懸念ナキカ如シ尙油糟ニ對シ專賣稅ハ蛋白飼料ヲ特ニ要セサル

麥小麥豐作ノ結果之ヲ以テ養豚馬匹飼育方面ヲ自給シ得ルトスルモ乳牛ニ缺クヘカサル蛋白飼料タル油糟ハ特ニ嚴寒ノ場合現在ノ生産及輸入狀況ニテハ必スヤ不足ヲ告クルモノト豫想セラル當業者筋ノ觀測ニ依レハ若シ然リトセハ油糟相場昂騰シ政府ハ農村救済ノ必要ニ迫ラレ現行取締ヲ排シ又ハ輕減スヘク自然之カ爲再ヒ大豆ノ輸入増進ヲ見ルヘキ見込ナリ即チ將來大豆ノ輸入量ハ本年冬期ノ長短ニ依リ決定セラルルモ少クトモ大体現状ハ維持セラレ最惡ノ場合ニ於テモ現在ノ二割五分減ノ程度ノ輸入ハ確實ナリト觀測セラル

(六)⁽³⁾「コンチンгент」ニ關シテハ倫敦市場ニテハ種々噂アルモ獨逸油房側ハ頻リニ大豆輸入量「コンチンгент」政策ニ反對シ政府ニ陳情シツツアリ現政府ノ方策ハ未タ知ル能ハサルモ目下ノ處責任アル油房側ノ談ニ依レハ特別ノ事由無キ限り一九三二年ノ輸入量ヲ認メ之カ爲替取組ヲ許可スル方針ナリト

(七)獨逸政府ハ大豆ノ輸入制限實施ノ困難ナルヲ認メ居ルモ對滿貿易入超ト滿洲國財政ニ重大關係アル大豆輸出ノ實情ニ付ケ込ミ何等カ代償ヲ求メン爲機械類トノ交換提議ヲ試

養豚馬匹飼育方面ニ國產飼料ノ使用ヲ強制センカ爲ナリ

(三)大豆ニ匹敵スル代用原料見當ラス國內自給モ亦當分困難ナリ又滿洲以外ヨリノ輸入ノ懸念ナシ豆油モ差支ナシ

因ニ一九三二年獨逸ノ大豆輸入量ハ百十八萬七千噸内滿洲國ヨリ百十四萬米國ヨリ四萬二千露國ヨリ五千ナリ

(四)⁽²⁾現在輸入量ノ増減及價格ノ變動ハ油脂原料タル關係ヨリモ飼料トシテ國內需要ニ左右セラル傾向ナリ本年輸入量一月十二萬七千二月十一萬四千三月十五萬五百四月八萬七五月十四萬五千八百六月十一萬四千七百七月八萬一千九百八月七萬八千八百九月六萬三千七百即チ一月ヨリ六月迄ノ輸入量ノ著増ハ當時市場ニ於テ最低廉ナル油脂原料ナリシ爲ナルカ大豆糟ニ專賣稅實施後ノ消費ハ五月六月ニ比シ二割乃至三割方減少セルモ過去數ヶ月ノ情勢ヨリシテ九月ヨリ十二月迄尙四十萬噸輸入ノ見込アリ又目下ノ需要ハ「フロチングカーゴ」及十月十一月積出ノモノヲ以テ滿シ得ルモノト見ラル

(五)又本年ハ一面外國產油糟輸入(年平均約六十五萬乃至七十萬)ノ減少ト他面最近大豆ノ輸入減退ヨリ生スル國內油糟ノ供給不足等ニ依リ飼料不足ヲ免レス但シ本年獨逸ハ大

ミタルモノト想像セラルル處獨逸ノ飼料自給政策ト自給自足主義ニ依ル貿易政策カ存續スル限り滿洲國側カ獨逸機械購入ニ努ムトモ大豆ノ輸入量ヲ前記觀測ニ依リ實需以上ニ増加セシムルモノトハ想像シ難シ

(六)大豆輸入ヲ獨逸對日滿「ブロック」ノ關係トシテ見ル可キ場合ニ關シテハ獨逸ハ入超トナル可キニ付左記ノ點特ニ考慮ヲ要ス可シ

(イ)假ニ獨逸側ノ申出ハ單ニ支拂決濟ニ關スル問題カ主眼ナリトスルモ獨逸カ現在他國ト貿易ノ均衡ヲ求メントシツツアル政策ニ鑑ミ本邦ノ對獨逸輸出カ實際上ノ拘束ヲ受クルニ至ル惧アリ

(ロ)加之現在獨逸當局ハ獨逸品ト激烈ナル競爭關係ニ有ル本邦對獨逸輸出製品特ニ雜貨ノ輸入ヲ防遏セントシ居ルモ右ハ獨逸ノ對日貿易カ著シク出超ナルカ爲困難ナル事情ニ有リ從テ日滿ヲ一「ブロック」トスル場合ニハ特ニ此等品目カ壓迫セラルル惧無シトセス依テ日滿「ブロック」トノ關係トシテ大豆ノ對獨逸輸出ノ確保及増進ヲ計ルニ付テハ本邦ノ對獨逸輸出カ拘束セラレサル方法ヲ研究スル必要アル可シ

本電ヲ外部ニ公表セラレサル様御取計有リ度シ
大臣及在哈爾賓總領事へ轉電アリタシ

132 昭和8年11月8日 在滿州国麥刈大使より
広田外務大臣宛(電報)

モパン社代表の滿州国訪問について

新 京 11月8日後発
本 省 11月8日後着

第一三五九號

柳井課長へ吉澤ヨリ

先般佛國事業會社「プロサール、モパン」代表者「ルシヤン、メルレ」ナル者澤田代理大使ノ紹介狀ヲ携へ谷參事官ヲ來訪對滿投資ニ參加シ度其用意アル旨ヲ述へタル上内地ニ赴キタルカ其後在哈爾賓同會社日本人代表者谷參事官ヲ來訪「メルレ」ヨリ參事官宛書翰ヲ手交シタルカ其書翰ノ内容ハ同會社カ具体的ニ滿洲國內ニ於テ爲シ得ヘキ事業アラハ指示ヲ受ケ度又同人東京滞在ニ關係方面トノ接觸ニ付便宜ヲ與ヘラレ度シトノ趣旨ナリシヲ以テ其際參事官ヨリ前記日本人代表者ニ對シ近々歸朝スヘキニ付内地ニ於テ談

紐育へ轉電セリ

紐育ヨリ米佛へ轉電アリ度シ

134 昭和8年11月10日 在滿州国麥刈大使より
広田外務大臣宛(電報)

仏国側資本の對滿投資事業に関する活動概要
についで

新 京 11月10日後発
本 省 11月11日前着

第一三七七號

本官發獨宛電報

第六號

大臣宛貴電第二四二號ニ關シ

「佛國資本ノ對滿投資問題ハ客年十二月 Syndicat pour l'étude et la réalisation d'entreprises en Extrême-Orient 代表者 Douville 外二名カ相當大ナル佛國資本ヲ具体的ノ建設事業ニ投資スルノ案ヲ持シ渡滿シタルニ始マル一行ハ當地滞在中軍、滿洲國政府、滿鐵等ト協議ノ結果「ドリル」ノ代表スル財團ト滿鐵トノ間ニ滿洲企業組合ナルモノヲ組

合スヘキ旨「メ」ニ傳達方依頼シ置カレタル趣ナリ右御含迄

133 昭和8年11月9日 在滿州国麥刈大使より
広田外務大臣宛(電報)

米國著名土木会社の滿州国土木建築事業引受け方申越しに対し現在ハ外國技術導入を必要
としない旨滿州国側回答について

新 京 11月9日後発
本 省 11月9日後着

第一三六三號

貴電第八五六號ニ關シ

滿洲國政府ノ意向ハ現ニ進行中ナル各般ノ建設事業ニ必要ナル技術ハ之ヲ特ニ費用ヲ出シテ外國ヨリ招來スル必要ヲ感セサルモ今後建設事業力愈進展シ特殊ノ技術經驗ヲ必要トスルモノアルニ至ラハ會社ノ好意アル申出ヲ利用スルコトアル可キニ付此ノ趣旨ニテ先方ニ對シ然ル可ク應酬アリ度キ旨申出ノ次第アリタル處諸般ノ狀況ヨリ觀テ現在ニ於テハ之以上具體的ニ回答ヲ爲スコト困難ナルヤニ思考セラル本電軍ト打合濟

織シ各二十萬圓ノ限度迄出資シ本組合ヲ通シ佛國資本ヲ滿洲國ニ誘致スル事ニ話合纏リ本趣旨ニ依ル契約案ニ署名シタル上歸佛シタルカ其後「ドリル」ノ代表スル財團ニ内紛ヲ生シ居タルモ八月其内紛モ落着シタル趣ナリ

ニ更ニ本年六月下旬 Association nationale d'expansion économique 代表者 D'Olivier ナル者渡日外務省ニ出頭右協會加入佛國資本家ニ於テ對滿投資ニ參加ヲ希望シ居ル旨説明更ニ八月下旬當地ニ來リ各方面ニ折衝シ居リタル處同人カ「ドリル」ニ對シ攻撃的口吻ヲ漏ラシ居リタルニモ鑑ミ當方ニ於テハ前記「ドリル」トノ關係及本人ノ資格等ニ付詳細判明セサリシ爲本人ノ希望ヲ聽キ置ク程度ニ止メ置キタルカ其後關東軍、滿鐵ニ於テハ「ドリビエ」關係ノ企業家ニシテ確實ナル限り之ヲ排(斥)スルノ理由モナカルヘキヲ以テ「ドリル」側トノ提携不可能ナリトセハ此ノ際滿鐵トシテハ「ドリル」ノ場合ト同様「ドリビエ」トモ投資組合ノ如キモノヲ組織スルモ可ナリトノ意見有力トナリ當館ニ於テモ贊成ノ意ヲ表シタル結果「ドリビエ」滿鐵間ニ交渉行ハレ資本金十萬圓、佛國資本家及滿鐵ノ平分出資ノ會社ヲ組織スルコトニ意見一致シ具體的定款案ニ付目下双方ニ於

テ研究中ナルカ大体ニ於テ双方ノ意見一致ヲ見タル模様ナリ
然ルニ右交渉ノ進行中大臣ノ御訓令ニ基キ在佛代理大使ニ
於テ調査ノ結果「ドリビエ」ハ經濟發展協會ニ加入セル資
本家ノ數人ヨリ調査ヲ依頼セラレ居ルニ止マリ前記ノ如キ
具体的事項ニ付契約ヲ調印スルカ如キ權限無キコト判明シ
又最近佛國外務省ニ於テ「コンミュニケ」ノ形ニ於テ同趣
旨ノコト發表セラレタル次第アルモ滿側トシテ定款案ヲ監
督官廳ニ提出シ其ノ認可ヲ得ルニ於テハ調印差支無シトノ
意向ナルカ如シ

三前記「ドリビエ」ノ來滿ト前後シテ或ハ合辦^{（稱カ）}ノ投資ノ銀
行ヲ設立シ度シトカ（獨）金礦ヲ開發シ度シトカ（英）土木事
業ヲ請負ヒ度シトカ（米）及佛ノ事業會社 Protésard
Mopin等ノ申出ヲ爲シタルモノアリ未タ具体的事業ニ投
資スルコトニ迄漕付ケタルモノ無キモ滿洲國ノ治安力漸次
恢復シ經濟建設事業ノ進捗スルト共ニ此ノ種歐米資本家ニ
シテ投資ヲ希望スルモノ續出スヘク豫想セラルルヲ以テ滿
洲國獨立ノ認識ヲ深カラシムル爲當方トシテモ關係在外交
館トモ充分ノ聯絡ヲ取り此ノ形勢ヲ善導利用致度キ所存ナリ
獨ヨリ米ニ轉電シ英、佛、白、伊、蘭、知惠古ニ暗送アリ度シ

大臣へ轉電セリ

昭和8年11月15日 在奉天蜂谷總領事より
広田外務大臣宛

満洲国石油輸入関税率の区分方法に関する同
国財政部の見解再考方につき英米石油会社の
斡旋依頼について

機密第一〇四九號 (11月20日接受)

昭和八年十一月十五日

在奉天

總領事 蜂谷 輝雄（印）

外務大臣 廣田 弘毅殿

昭和八年十一月十五日附 菱刈大使宛往信寫送付
機密第六四九號

件 名

一、英米石油輸入税問題ニ關スル件

機密第六四九號

昭和八年十一月十五日

在奉天

總領事 蜂谷 輝雄

在滿洲國

特命全權大使 菱刈 隆殿

英米石油輸入税問題ニ關スル件

小官發貴大使宛往信機密第六三二號ニ關シ

去ル八日紐育「スタンダード」石油會社代表者「ラックス」
「コルベツト」當館係官ヲ來訪滿洲國當局ノ説明ハ之ヲ諒
知セルモ右ハ結果トシテ英米石油會社側ヲ不當ニ不利ナル
立場ニ陷ラシムルモノニシテ同石油會社側トシテハ品質ノ
優秀ナルヲ以テ多年其ノ聲名ヲ維持シ居ル次第ナルヲ以テ
今更下級品ヲ取扱フヲ得サル立場ニモアリ此儘ニテ推移セ
ハ永キ經驗ヲ有スル同社等ハ事實上差別待遇ヲ受クル事ト
ナルヘキ點ニ留意セラレ税番五〇六番ノ石油輸入税ハ之ヲ
廢止アリタク旁々三十九 baume ヲ以テ燈油ト輕油トノ區
別ノ限界ヲ爲ストノ説ハ必スシモ世界ノ通説ヲ爲スモノニ
非ルヲ以テ三十 baume 以上ノ石油ハ總テ之ヲ同稅率ト致
サレ度トシテ縷々同會社側ノ願意ヲ説明シタルニ付係官ニ
於テ右ノ趣兎モ角新京大使館ニ移牒シ之ヲ當國當局ニ傳達

方依頼スヘキ旨答へ置キタル趣ナリ

就テハ右ノ次第可然滿洲國側ニ御傳達方相煩度此段申進ス
本信寫送付先 外務大臣

136 昭和8年11月19日 在仏国沢田臨時代理大使より
広田外務大臣宛（電報）

ドリル側財団とアエロ・フランスとの組合權
利讓渡交渉合意まではドリヴィエ側と満鉄と
の合併会社設立契約は延期すべき旨意見具申

パ リ 発

本 省 11月19日前着

第五四三號（機械館長符號扱）

菱刈大使發貴大臣宛電報第一三九七號及第一三九九號ニ關シ
「アエロ・フランス」及UIC間交渉ノ成行ハ往電第五二
四號及第五二六號所報ノ通りニテ至急交渉ヲ纏ムル様目下
折角關係者（説）得中ナルカ「ドリビエ」契約一度成立セハ
右交渉ノ決裂スヘキハ疑ナキ處ナルモノノ如ク「ドリル」
契約カ政界ノ有力者タル「レニエ」及財界ノ相當ノ地歩ヲ
有スルUICニ依リ漸ク具體化ノ曙光ヲ認ムルニ至リタル

際事此處ニ至ルハ關係者ニ取り痛恨事タルハ勿論ニテ契約ノ成立以來終始其満足ナル具體化ニ助力シ來リタル當館トシテモ遺憾トスル所ナリ他方「ドリビエ」契約ノ成立セン事ハ佛國ノ滿洲國ニ對スル關心ヲ増大スルノ見地ヨリ當館ノ等シク歡迎スル所ナレト之ニ對スル當國政府及議會方面ノ態度ハ往電第五二六號所報ノ通りナル外對支借款問題ニテ「ド、ラ、シヨーム」ニ會談ノ際同氏ハ「ドリビエ」ノ吹聴ノ大袈裟ナルヲ述ヘ一體「ド」ハ所要資金ヲ奈邊ニ求メ得ル積リナリヤト寧ロ冷笑的口吻ヲ漏ラシ居リタルニモ鑑ミ拓務省ノ認可ハ今暫ク延期セラルル事當方トシテハ好都合ニシテ少ク共「アエロ、フランス」及UIC間交渉ノ見極メ付ク迄之ヲ待タシメラルル事然ルヘキヤニ思考ス

137

昭和8年11月21日 広田外務大臣より
在仏国沢田臨時代理大使宛(電報)

早急なる契約履行につきドリル側財団に勧告方
および計画具体化の可能性につき調査方訓令

付記 十二月十一日付、作成局課不明

「佛國財團ノ對滿投資問題ニ關スル在京佛國

テ應酬シ専ラ「ドリル」側計劃ノ具體化ヲ待チツツアリシ次第ナリ然ルニ「ドリル」側財團ニ於テハ滿鐵トノ契約調印以來十ヶ月又「アエロフランス」ヘノ讓渡案成立以來數ヶ月ヲ經タル今日ニ至ルモ未タ滿鐵トノ契約ヲ履行スルノ運ニ至ラス右ハ滿洲國側及滿鐵等ニ於テモ頗ル迷惑トシ居ル次第ナルニ付テハ貴官ハ「ドリル」側ニ對シ以上ノ次第ヲ充分説示セラルト共ニ此ノ際「ドリル」側ニ於テ速ニ其ノ内証ヲ整理シ滿鐵トノ契約ヲ履行スルノ運ヒニ至ルニ於テハ「ドリヴエ」契約案ノ如キハ何等問題トナリ得サルヘキモ然ラサル限り滿洲國ニ於ケル有利ナル投資事業カ他ノ資本家ノ手ニ落ルコトトナルモ已ムヲ得サルヘシトノ趣旨ヲ申聞ケラレ、u、i、cトノ談合等ヲ至急成立セシムル様仕向ケラレ度

三、尙印度支那銀行、巴里和蘭銀行及「プロツサル、モパン」ノ重役「リュシアン、メルレ」カ本省係官ニ語ル所ニ依レハ「ドリル」ハ關係財團中ノ「ポンタムソン」社及「アンリー、ロチルド」ノ資金ヲ合計十二萬五千法使ヒ込ミタル爲紛糾ヲ生シツツアリトノ事ニテ「ドリル」ト所謂商賣敵ノ關係ニ在ル「メルレ」ノ言ハ必シモ全部

大使「ピラ」ト柳井亞細亞局第三課長トノ會
談要領

本省 11月21日後8時30分迄

第二六六號

貴電第五二六號及第五四三號ニ關シ

「日佛合辦會社設立ニ關スル「ドリヴエ」滿鐵間話合ノ模様ハ在滿大使發本大臣宛電報第一三九七號及第一三九九號ニ依リ御承知ノ通ニシテ佛國ノ對滿投資ハ一切同會社ニ於テ取扱フヘシトカ「ドリヴエ」ハ近ク或種ノ具體的事業ニ關スル取極ニモ調印ノ答ナリトカノ報道ハ事實無根ナリ又今後滿鐵ヨリ拓務省宛認可申請アル場合ニハ關係省ノ間ニ協議ノ上許否ヲ決スルコトニ打合アル次第ナルカ滿鐵ヨリハ未タ右申請ヲ提出シ居ラス

「本年二月調印セラレタル「ドリル」滿鐵間ノ契約カ「ドリル」側ニ對シ何等獨占的權利ヲ與ヘタルモノニアラサルハ勿論ナル處右ニモ不拘滿洲國側及滿鐵トシテハ同財團ノ對滿投資計畫ニ對シ凡有ル便宜ヲ與ヘ現ニ「プロツサルモパン」印度支那銀行、巴里和蘭銀行ヨリノ申出ニ對シテモ成ルヘク「ドリル」財團ト共同スヘキ旨ヲ以

信用シ得ストスルモ「アエロ、フランス」ヘノ讓渡案ハ既ニ本年八月成立セルニ對シ「ドリヴエ」契約ニ關スル誇大ナル報道ハ最近傳ヘラレタルモノナル事等ヲ考フルニu、i、c側カ躊躇シツツアル原因ハ「ドリヴエ」契約成立ノ報道以外ニモ存スルニ非スヤトモ想像セラレ旁々此ノ際「ドリル」乃至「アエロフランス」側ニ非サル方面例ヘハu、i、c側ヨリ直接ノ情報等ヲ求メ果シテ「ドリル」側計劃カ近ク具體化ノ可能性アルモノナリヤ否ヤニ對シ適確ナル判斷ヲ下ス事ト致度ニ付右御含ニテ適宜御措置相成結果同電アリ度

(付記)

佛國財團ノ對滿投資問題ニ關スル在京佛國大使「ピラ」ト柳井亞細亞局第三課長トノ會談要領

(昭和八年十二月十一日)

昭和八年十二月十一日柳井亞細亞局第三課長在京佛國大使「ピラ」ノ希望ニ依リ同大使ヲ往訪會談ス、要領左ノ如シ佛國大使。佛國財團ノ對滿投資ニ關シテ(一)既ニ失敗ニ歸シタル「ドリル」ノ調査團ヲ最初ノモノトシ(二)「ドリヴイ

138

昭和8年12月2日 在仏国沢田臨時代理大使より
広田外務大臣宛(電報)

ドリル側財団の組合権利譲渡交渉の進捗状況

要トストノ趣旨ナリ
佛國大使。滿鐵カ外國資本家ト合辦ニテ事業ヲ行フコトハ其ノ金額ノ如何ニ不拘主義トシテ日本ノ滿洲經營上重要ナルコトナレハ、余モ滿鐵ノ契約ニハ監督官廳ノ認可ヲ要スヘキモノト思考シ居タル次第ニテ此ノ點ニ付前記「ドリヴィエ」ノ説明ニハ腑ニ落ちヌ所アリ旁々本日御説明ヲ願ヒタル譯ナリ
尙目下來京中ノ「ルシアン、メルレ」ハ「プロツサル、モパン」會社、巴里和蘭銀行及印度支那銀行ヲ背景トシ居リ現ニ事業會社モ金融ノ銀行モ存在シ居リ何時ニテモ事業ヲ行ヒ得又資金モアル點ハ「メルレ」側トシテノ強味ナリ、故ニ若シ「メルレ」カ「ドリル」ヨリモ以前ニ赴滿シ居タリトセハ滿鐵トノ間ニ契約ヲ調印シキタルナルヘシト存ス
尙本件ニ付テハ今後共時々情報ヲ給ハリ度

エ」(三)「ルシアン、メルレ」(四)「バイエンヌ」ノ計劃アルコト御承知ノ通ニシテ「バイエンヌ」ニハ數日中二面會ノ筈ナルカ(五)尙「ミツシエル」ナル者目下新京ニテ調査ノ爲滞在中ナル趣ナリ
右ノ中「ドリヴィエ」ハ既ニ滿鐵トノ契約ヲ達成シ右契約ヲ携ヘテ明日歸佛ノ途ニ就ク趣ニシテ、「ドリヴィエ」及小林順一郎ノ談ニ依レハ右契約ニ關シテハ滿鐵側ニ於テ日本政府ノ認可ヲ經ルヲ必要トセサル由ナリ、「ド」自身ハ特定ノ佛國ノ財業者ヲ代表スルモノニハ非サルモ今後右契約カ佛國財業者ニ依リ確認セラレ追々モノニ成ルニ於テハ日佛兩國一般ノ關係上有意義ナルヘシト思考シ居リ右ノ次第ハ既ニ本國政府ニ報告シ置キタリ、本件ニ關シテハ外務省ニ於テ一切御承知ノコトト存スル處日本政府側ノ態度ハ如何ナリヤ承リ度
柳井課長。「ドリヴィエ」カ滿鐵トノ間ニ既ニ契約ヲ調印シタリトノコトハ全然承知セス、滿鐵カ他ノ會社ト合辦シ投資スル場合ニハ政府ノ認可ヲ必要トスルモノニシテ在滿帝國大使館ノ報告ニ依ルモ滿鐵ハ調印ヲ爲ス前豫メ拓務省ノ認可ヲ經ヘキ意向ナリトノコトナリ、實ハ今朝モ

爲念取調ヘタルカ拓務省モ滿鐵東京支社モ未タ右契約案ナルモノヲ提示セラレタルコト無ク又右滿鐵本社ニ於テ調印済ナル旨ノ情報ニモ接シ居ラサル趣ナリキ、此ノ種ノ契約ニ付テハ滿鐵本社ヨリノ認可申請ヲ俟チ拓務省ヨリ外務省ニ移牒シ次テ關係省ノ間ニ協議ノ上何分ノ決定ヲ與フルコトトナリ居ル次第ナル處右協議ニ當リテハ關係省側トシテハ

(イ)滿鐵ノ相手方ニ對シテ獨占權ヲ與ヘサルコト
(ロ)本件契約ニ於テ滿鐵ノ相手方ハ之ヲ巴里ノ財業者ニ提示シテ其ノ確認ヲ得ルノ餘地ヲ留保スルニ反シ滿鐵側ノミハ當初ヨリ決定的ニ拘束セラルルカ如キ不合理ヲ來ササルコト

(ハ)空漠タル利權漁リニ非スシテ現實且速ニ事業ニ着手スルモノタルコト

ノ三點ヲ特ニ重視スヘシ尙右(イ)ノ點ハ滿鐵ハ本件契約調印後モ滿洲國ニ於テ他ノ佛國財業者又ハ其ノ他ノ國ノ財業者ト同様ノ契約ヲ締結シ協力スルノ自由アルヘシトノ趣旨ニシテ(門戶開放)又(ロ)ノ點ハ滿鐵ト拘束力アル契約ヲ締結スル爲ニハ相手方モ調印ノ權限ヲ有スルコトヲ必

および早急なる契約履行方勧告について

パリ 12月2日後発
本省 12月3日前着

第五六六號(極秘)
往電第五二四號及第五二六號ニ關シ

「ドリル」側ニ對シU、I、C行惱ノ眞因ヲ突止ムル様申聞ケ置キタル處U、I、C側ニ於テ本件交渉ノ任ニ當リ居ル同社専務「ア、ガブリエル」ハ豫テヨリ「ドリル」ノ權利ハ事實上ノ獨占權ナリトノ建前ニテ(十月十日附機密公第五七三號拙信附屬第四號條件第一三章)U、I、Cノ意見ヲ纏メ來リタル矢先「ドリビエ」カ滿鐵トノ間ニ「ドリル」ト同様ノ契約ヲ締結スヘシトノ報頻リニ當地ニ傳ハリタル爲U、I、C重役會ハ同人ノ提案ヲ一旦否決スルニ至リ行惱ミ居ル次第ナルカ同人トシテハ以前「アエロ、フランス」側ト協力 seren ノ實現ヲ希望シ目下重役ノ臆意ニ努メ居レル處

(一)seren ハ佛國ノ對滿事業ニ關スル限り佛國內ニ於ケル滿鐵ノ agent exclusif タルコト(尤モ滿鐵カ佛以外ノ國ト契約ヲ爲スコト及日本當局カ滿鐵以外ノ他ノ會社ニ依リ

佛國內ニ日佛「コントアール」ヲ設立スルコトハ自由ナリ)
(二)佛國代表者ノ滿鐵派遣後六ヶ月内ニ目星キ事業無キトキハ解散ノ自由ヲ有スルコト

(三)組合員ノ責任範圍ハ其ノ出資ノ範圍ニ限ラルルコト(最初ノ拂込額ハ出資額ノ四分ノ一トス新タナル拂込請求ハ最初ノ事業ノ結果ニ從ヒテ行ハルルコト)

ノ三點ニ付改メテ滿鐵側ノ了解ヲ得ハ重役會ノ態度ヲ變更シ得ヘシト申シ居ル趣ナリシヲ以テ

本官ハ(一)ニ付テハ我方ハ滿洲ノ門戶解放主義ヲ唱道スルモノナルヲ以テ滿鐵ヲシテ *serem* ニ獨占權ヲ與フルカ如キ了解ヲ公然書キ物トシテ與ヘシムルコトハ不可能ナルカ本省ヨリノ來電ニ依レハ「ドリル」側ニ於テ速ニ滿鐵トノ契約ヲ履行スル運ニ至ル限リ我方トシテハ「ドリビエ」契約案ノ如キハ何等問題トシ居ラサルモノノ如ク要ハ速ニ有力ナル組合ヲ組成スルニアルヘシ(二)及(三)ノ如キハ此ノ際兎ヤ角論議スヘキ筋合ニ非ス組合組成後代表者ヲ現地ニ派遣シ滿鐵トノ間ニ談合スレハ宜敷キ問題ナルヘシトノ趣旨ヲ「アエロ」側ヲ通シ「ア、ガブリエル」ニ傳ヘシメタル處(本官ハ「ア、ガブリエル」ヨリ直接事情聴取ノ意見ナリシ

繰返シ申聞ケ置キタリ
滿ヘ轉電アリ度シ

139 昭和8年12月4日 在滿州國麥刈大使より
広田外務大臣宛

ベルギー人実業家の満州國要人などの意見
交換について

公機密第一一九九號 (接受日不明)

昭和八年十二月四日

在滿州國

特命全權大使 菱刈 隆

外務大臣 廣田 弘毅殿

白耳義實業家「バイヤン」ノ行動ニ關スル件

白耳義實業家「バイヤン」(本年十月中旬關東長官發大臣宛往電参照)ハ本年十一月八日當地ニ來リ關東廳外事課長代理ノ紹介狀ヲ持テ當館ヲ訪問當方ノ斡旋ニ依リ外交部ヲ通シ九日滿洲國實業部總長ニ面會シタルカ其際「バイヤン」ハ佛國ノ現狀ニ於テハ現物供給ノ形式ニ依ル長期「クレヂツト」設定以外現金資本ヲ外國ニ投下スル餘力ニ乏シク又

モ「アエロ」側ハ若シU、I、Cトノ交渉纏マラサルトキハ他ニ之ニ劣ラサル財團ヲ探シ飽ク迄「アエロ」社ヲ中心トスル佛國側團體ヲ組成シ度キ熱心ナル希望ヲ有シ居ルヲ以テ本官ニ於テ「アエロ」側ヲ差置キ直接「ア、ガブリエル」ト談合ヲ爲スニ於テハ「アエロ」側ノ感觸ヲ害シ事態ヲ一層紛糾セシムル惧多キニ付之ヲ差控ヘ居ル次第ナリ)
「ア」ハ之ヲ諒トシ二十九日「アエロ」側代表者トノ間ニU、I、Cノ極東ニ關スル部門タル「Union Financière de Extrême-Orient」ト「アエロ」トニ於テ *serem* ノ佛國側團體ヲ作り「レニエ」ヲ同團體ノ「プレジデント」(從テ *serem* ノ「ヴァイス、プレジデント」トシ右團體結成後直ニ代表者ヲ滿洲ニ派遣スルコトニ談合成立シ「アエロ」側ハ直ニ之ニ同意ヲ表シU、I、C側ハ最近ノ重役會ニ諮リタル上十二月十五日以前ニ何分ノ確答ヲ爲スコトナリタル趣ニテ三十日「ドリル」及「デパルドン」本官ヲ來訪右ノ次第ヲ報告セリ依テ本官ハ貴電第二六六號御來示ノ趣旨ニ依リ速ニ組合ノ成立セサルトキハ滿洲國ニ於ケル有利ナル投資事業カ他ノ資本家ノ手中ニ落ツルモ已ムヲ得サルヘキ旨ヲ説示シ何レニスルモ至急談合ヲ纏ムルコト肝要ナルコトヲ

假令外國ニ投資スル希望ヲ有スル場合ニ於テモ絶對ニ安全ナリトノ保證ヲ得ルニ非ラサレハ之ヲ爲ササルヘク殊ニ極東ノ事情ニ關シテハ一般ニ認識充分ナラサルヲ以テ此ノ際滿洲國ヨリ經濟「ミツシヨン」ヲ歐洲ニ派遣シ滿洲國ノ現狀ヲ説明スルコト得策ナルヘク其ノ結果歐洲ノ諸國ト滿洲國トノ間ニ經濟提携實現セハ滿洲國ノ正式承認ノ途ヲ拓クモノト謂フヘシトノ意味ノコトヲ述ヘタル趣ナリ十日日本使官邸ニ於テ滿洲國側、軍側、當館員等ヲ加ヘ同人ノ爲ニ茶會ヲ催シ其ノ機會ニ同人ト種々意見ヲ交換シタルカ其ノ際同人ハ滿洲國ノ開發ニ對シ多少共投資シ得ル國ハ歐洲ニ於テハ佛、白、蘭ノ三國アルノミニシテ殊ニ佛國ニ於テハ對滿洲國投資ニ對シテハ熱心ヲ感シ居ル次第ナルカ唯佛國カ滿洲國ヲ承認シ居ラサル關係上現狀ニ於テ如何ナル形式ヲ以テ佛國資本ノ對滿投資カ可能ナリヤ換言スレハ滿洲國ニ於ケル門戶開放、機會均等ノ主義カ如何ナル形ニ於テ適用セラレ居ルヤヲ現狀ニ付調査スル爲來滿シタル次第ニシテ當地大使館、軍部等ト充分連絡ノ上「イルユストラシオン」等ニ寄稿シ度キ意向ヲ有スルコトヲ述ヘ更ニ滿洲國ニ於ケル農業ニ關シ特ニ興味ヲ有スルコトト特産ノ輸

二 満州国をめぐる列国との関係

出増進策トシテ所謂特産業者ニ依ル利益壟斷ノ廢止、運賃ノ低減、特産利用方法ノ増加ノ必要ナルコト等ヲ述ヘタルニ對シ本使ヨリハ充分現地ヲ視察セラレ滿洲國ニ關スル歐洲人ノ認識ヲ深ムル爲貢獻セラルコトヲ希望スル旨告ケ置キタリ

同人ハ十二日哈爾濱ニ赴キ十五日再ヒ歸來十六日執政ニ面謁シタル後特務部ニ沼田總務課長ヲ訪問シ滿洲國ノ經濟建設方針ニ關シ意見ヲ徵シタルカ其際同課長ヨリ滿洲國ハ極端ナル資本主義及共產主義ノ弊害ヲ充分認メ一種ノ國家社會主義タル統制經濟ヲ實現セント努力シ居ル次第ニテ日滿兩國ノ特殊關係ヨリ國防ニ關係アル基本企業ハ國家ノ統制ノ下ニ置キ資本家ノ利益壟斷ノ餘地無カラシメ其ノ統制ニ服スル限リハ此等ノ基本企業ニ對シテモ外國資本ノ投下ヲ認ムルハ勿論夫レ以外ノ所謂自由企業ニ關シテハ徹底的ニ門戸開放、機會均等ノ立場ヨリ外資ヲ歡迎スル次第ナルコトヲ説明シタルニ「バイヤン」ハ具體的ニ如何ナル事業ニ外國資本ノ流入ヲ實現シ得ヘキヤニ付質問シタルヲ以テ同課長ヨリ道路、水道、建築、鐵道ヲ除ク運輸企業ノ如キ其ノ主ナルモノナルコトヲ告ケタリ同人ハ二十日再ヒ哈爾濱

後實際的話合進行セサル間ニ滿鐵ノ増資及ヒ社債ノ發行ニ依リ約十六億圓ノ資本ヲ運轉シ得ルコトヲ發見シタルヲ以テ現在ニ於テハ殆ント外資ノ援助ヲ仰ク必要ナキ狀態ナルカ外國資本ノ招來ニ對シテハ今猶歡迎シ居ルモ滿洲國トシテハ滿洲國不承認決議ニ參加シ居ル諸外國ニ對シ惡感情ヲ有スルコトハ否ムヘカラサルヲ以テ外國資本家ニシテ滿洲ニ投資セントスル場合ニハ其ノ政府ニ於テ先ヅ滿洲國ヲ承認セラレタル後來滿セラルコト順序ナリト思考ス故ニ將來非聯盟國ニシテ滿洲國ヲ承認スルカ如キ場合ハ該國力未承認國ヨリモ對滿投資ニ關シ有利ナル地位ニ置カルコトアルヘキハ想像ニ難カラス

「バ」

聯盟加入國トシテ今直チニ滿洲國不承認決議ヨリ脫退スルコトハ極メテ困難ナリ一般投資家ハ之等政治問題ニハ興味ヲ有セサルヲ以テ寧ロ之等ノ未承認國ノ資本カ投下セラルルコトニ依リ漸次滿洲國承認ノ氣運ヲ醸成スルモノニ在ラヌヤト思考ス

同人ハ二十七日上海ニ向ケ當地發南下シタルカ十一月中旬貴電ノ次第モアリタルヲ以テ館員ヨリ同人ニ對シ隴海鐵道

ニ赴キ二十四日歸來二十六日參謀長ト會見セリ其際ニ於ケル問答ノ大要左ノ如シ

「バ」

最近北滿ヲ旅行シ對蘇關係ヲ視察シタルカ自分ノ得タル印象ニ依レハ北滿ノ所謂白系露人ナルモノハ必スシモ信賴シ難ク滿蘇開戰等ノ場合ニハ赤露ノ爲ニ喜ンテ「サーヴイス」ヲ提供スルモノナリトノ印象ヲ得タリ

「參」

北滿ニ於ケル白系露人ハ赤露ニ對シ反感ヲ有スルト同時ニ祖國トシテノ露國ニ對シ愛着ノ念ヲ有スルモノニシテ日滿軍力蘇領ニ侵入スルカ如キコトノナカラムコトヲ希望シ居ルモノナリ

「バ」

滿洲國經濟建設ニ對スル外國資本ノ參加ニ付閣下ヨリ明確ナル説明ヲ得度シ

「參」

滿洲國經濟建設ニ着手シタル當時約十億圓ノ資本ヲ要スルモノト計算シ外資トシテハ主トシテ佛國資本ヲ招來スル目的ヲ以テ當時ノ在東京佛國大使ノ諒解ヲ求メ置キタルカ其

權利讓渡申出ノ件ニ關シ夫レト無ク質問シタルニ同人ハ往年同鐵道權利讓渡ノ申出アリタル際株主側ノ反對ニ依リ立消トナリタルコトヲ承知シ居レルカ日本ニ對スル同情ノ念ヨリ純然タル「サーヴイス」提供ノ見地ヨリ本件ヲ持出し好意的仲介ヲ爲サントスルモノニシテ何等私利ノ爲策動シ居ル次第ニ非ラサルコトヲ縷々説明セル趣ナリ
右何等御參考迄申進ス

本信寫送付先 支(上海)、佛、關東廳

140 昭和8年12月17日 在仏國沢田臨時代理大使より 広田外務大臣宛(電報)

滿洲企業組合の仏國側組織に関する合意成立

について

パリ 12月17日後発
本省 12月18日前着

第五九八號(極秘)

往電第五六六號ニ關シ

十六日「ドリル」及「デパルドン」來訪客月廿九日談合ノ筋ニテ(冒頭往電末段參照)UIC側モ異議無ク茲ニ佛蘭西

側「サンデイカ」成立シタルヲ以テ何レ來週初書面ヲ以テ
「コンファーム」スヘキモ不取敢口頭ヲ以テ右報告ニ及フ
旨ヲ述ヘタリ

滿ヘ轉電アリ度シ

三 満州国との諸案件交渉

141 昭和8年1月4日 在満州国武藤大使より
内田外務大臣宛(電報)

満州国による関内よりの阿片密輸入計画について

新 京 1月4日後発
本 省 1月4日後着

第六號

本使發天津宛電報

第一號(極秘)

客年往電第二號ニ關シ

三 満州国との諸案件交渉
滿洲國政府ハ阿片專賣實施ノ手始メトシテ先ツ國內及熱河
方面ニ於テ收買ヲ始メタルモ其ノ成績面白カラス其ノ入手
料ハ豫想ノ數分ノ一ニモ達セサル爲已ムヲ得ス關内附近ニ
於テ之ヲ入手シ國內ニ密輸入セント計畫スルニ至リタルモ
ノニシテ其ノ成否如何ハ專賣制度ノ生命ニ係ハル關係上軍
ニ於テモ之ヲ援助スルコトナリタル次第ナル趣ナリ
本件ハ事件ノ性質ニ鑑ミ絶體極秘トシテ取扱ハレ度シ

大臣、支、北平へ轉電セリ

142 昭和8年1月7日 在中国有吉公使より
内田外務大臣宛(電報)

満州国は公正なる方法により阿片を入手すべ

き旨意見具申

上 海 1月7日後発
本 省 1月7日後着

第一六號(極秘)

武藤大使發天津宛電報第一號ニ關シ

滿洲國カ天津方面ヨリ阿片ヲ密輸入セントスルニ至リタル
事情ハ專賣制度其ノモノノ維持ノ爲ニハ一應已ムヲ得サル
儀ナル可キカ本問題ニ付テハ更ニ大局ヨリ之ヲ考量スル必
要有リト思考セラル蓋シ滿洲國ノ阿片專賣ハ速ニ禁煙ヲ實
行セントスル人道的目的ニ基ク次第ナルヲ以テ所要阿片ノ
取得ハ收買其ノ他公正ナル方法ニ依ルコト然ル可シ密輸入